

よこ ろ

# 横路遺跡(原井ヶ市地区)

浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月

島根県浜田市教育委員会

横路遺跡(原井ヶ市地区) 正誤表

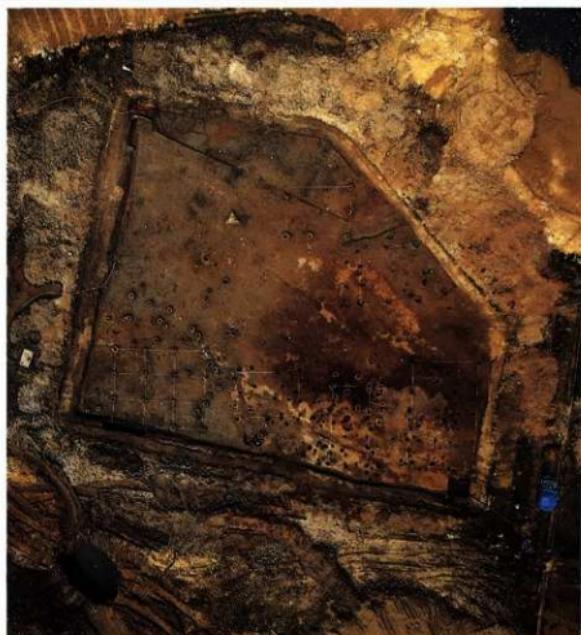
ページ	行	正誤箇所
14	8	大量→少量
50	7	(13)は土師壺の壺→(13)はCP25出土の土師器の壺
63	13	底部がさらに大きくなる坏 一口径に対し底径がさらに大きくなり、小型化した坏

報告書抄録

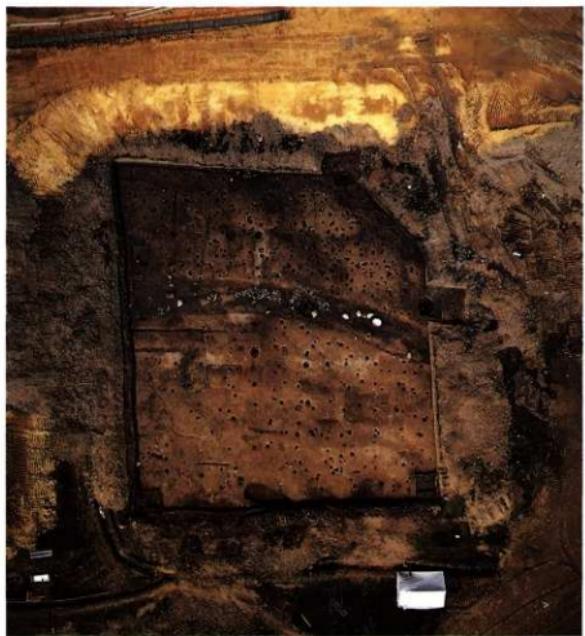
ふりがな	よころいせき(はらいがいちらく)						
書名	横路遺跡(原井ヶ市地区)						
副書名	浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	柳原 博英						
編集機関	島根県浜田市教育委員会						
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 Tel. 0855-22-2612(代)						
発行年月日	1998年3月						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コ 市町村	一 遺跡番号	ド 北緯	東 經	調査期間	調査原因 面積m <sup>2</sup>
よころいせき 横路遺跡 はらいがいちらく (原井ヶ市地区)	しまねけん 島根県 はまだし 浜田市 しもこうちょう 下府町	32202		34° 55' 18"	132° 07' 03"	19961007 ~ 19980331	m <sup>2</sup> 1,963
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
横路遺跡 (原井ヶ市地区)	集落跡 包含層	奈良～鎌倉	水田遺構 堀立柱建物跡 溝 井戸跡	須恵器 綠釉陶器 土師器 白磁、青磁、中国陶器	石見国府推定 地域内に所在		



卷頭図版 1  
横路地区  
遠景  
(南より)



卷頭図版 2  
横路遺跡  
(原井ヶ市地区)  
B調査区全景



卷頭図版3  
横路遺跡  
(原井ヶ市地区)  
C調査区全景



卷頭図版4 横路遺跡（原井ヶ市地区）出土遺物

## 序

浜田市教育委員会では浜田東中学校の建設工事に伴い、平成8年度に横路遺跡（原井ヶ市地区）の発掘調査を実施しました。本書はこの発掘調査の報告書です。

浜田市には石見国分寺跡、同国分尼寺跡を始め多くの遺跡が存在しています。所在地は確定していませんが石見国府も存在したと考えられており、古代から中世にかけての石見地域の中心地であります。当教育委員会では、これらの文化財の解明を行うためこれまで石見国分寺跡、下府廃寺跡、古市遺跡、横路遺跡と発掘調査を実施し、いずれも貴重な調査結果を得ております。

横路遺跡（原井ヶ市地区）はかつて昭和52年度から3年に亘って島根県教育委員会が実施した石見国府推定地調査の調査地点を含んでいます。調査の結果、中世の水田跡や平安時代初めから鎌倉時代にかけての集落跡が見つかりました。国府地区で初めて古代の集落跡が見つかったことは、今後古代の石見国府を探るで非常に重要な発見といえます。

これらの資料を末長く後世に伝え、学校教育や生涯学習などひろく活用していくことが大きな課題であります。祖先の営みを知ることにより、文化の香り豊かな浜田を築くことができるものと信じております。

本書の資料が幅広く活用されることにより、文化財保護思想の普及、歴史研究への一助となることを願っております。

おわりに、調査を指導していただいた文化庁記念物課の坂井秀弥調査官、島根大学総合理工学部の山内靖喜教授、浜田市文化財審議会会长の桑原韶一先生をはじめとする諸先生方、島根県教育委員会及び関係諸機関に厚く感謝申し上げます。また、あらゆる面から御協力下さいました地元の方々に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

平成10年3月

浜田市教育委員会

教育長 竹中弘忠

## 例 言

1. 本書は浜田市教育委員会が平成8年度に実施した浜山東中学校建設事業に伴う横路遺跡（原井ヶ市地区）の発掘調査報告書である。発掘調査は平成8年度、遺物整理及び調査報告書作成は平成9年度に実施した。
2. 調査は次のような組織で行った。

調査主体	浜田市教育委員会教育長 古原忠雄（平成8年度） 竹中弘忠（平成9年度）
調査指導	坂井秀弥（文化庁記念物課文化財調査官） 山内靖喜（島根大学総合理工学部教授） 中村唯史（島根大学総合理工学部 当時） 桑原韶一（島根県文化財保護指導員） 島根県教育委員会 文化財課
調査員	榎原博英（浜田市教育委員会生涯学習課 文化振興係主事）
事務局	浜田市教育委員会生涯学習課 生涯学習課長 宮本延寿（平成8年度） 千代延公敏（平成9年度） 文化振興係長 中村俊二 主任主事 村田キミエ 主事 原 裕司
3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

石山広重、岩本一男、内野健太、江原美幸、大田温、大野初恵、人屋徳仁、勝沼孝幸、川崎宏、佐々木一長、月森典子、佐々木慶子、佐々木悟、佐々木伸一、佐々木千尋、佐々木真実、篠山美智子、山藤力、清水義三、白石定人、田淵智恵美、中川廣造、中田夕子、中田洋子、中村忠雄、中村政雄、永富ヒロ子、永見義隆、半場利定、三浦文雄、村上美佐子、豊光子、横田泰、吉山安男、余村広美
4. 遺跡に関する論考として奈良教育大学 三辻利一教授より下稿をいただいた。
5. 遺跡内の花粉分析及びプラント・オパール分析は川崎地質株式会社に委託し、分析結果の概要を掲載した。
6. 挿図の方位は国上調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。
7. 基準点設置及び空中写真撮影・測量はワールド航測コンサルタント株式会社へ委託して実施した。
8. 遺構番号は以下の略記号を用いた。

P（柱穴類）・S B（建物）・S D（溝） S K（土壙）・S E（井戸）
9. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。
10. 本書の執筆編集は榎原が行った。

# 本文目次

I. 調査の経緯	1
II. 位置と歴史的環境	2
III. 調査の概要	5
1 試掘調査	5
2 A調査区	14
3 B調査区	17
A 調査区の層位	
B 近世の遺構・遺物	
C 掘立柱建物・溝	
D 土壙・柱穴類	
E 出土遺物	
4 C調査区	32
A 調査区の層位	
B 掘立柱建物・溝	
C 溝・池状遺構	
D 土壙・柱穴類・井戸跡	
E 出土遺物	
IV. 小結	61
V. 自然理科学分析	65
・横路遺跡(原井ヶ市地区)発掘調査における花粉分析	65
渡辺正巳 (川崎地質株式会社)	
・横路遺跡(原井ヶ市地区)出土土器の蛍光X線分析	72
三辻利一 (奈良教育大学教授)	

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版 1 横路地区遺跡 (南より)
- 卷頭図版 2 横路遺跡 (原井ヶ市地区) B調査区全景
- 卷頭図版 3 横路遺跡 (原井ヶ市地区) C調査区全景
- 卷頭図版 4 横路遺跡 (原井ヶ市地区) 出土遺物

## 挿 図 目 次

- 第1図 横路遺跡周辺図
- 第2図 試掘調査出土遺物実測図
- 第3図 調査区位置図
- 第4図 調査区設定図
- 第5図 A調査区実測図
- 第6図 A調査区出土遺物実測図
- 第7図 B調査区西壁上層図
- 第8図 B調査区近世遺構実測図
- 第9図 B調査区近世遺構出土遺物実測図
- 第10図 B調査区古代～中世遺構実測図
- 第11図 S B B 1 実測図
- 第12図 S B B 3 実測図
- 第13図 S B B 4 実測図
- 第14図 S B B 5 実測図
- 第15図 B調査区掘立柱建物出土遺物実測図
- 第16図 S K B 1 実測図
- 第17図 S K B 1 出土遺物実測図
- 第18図 B調査区柱穴類出土遺物実測図
- 第19図 B調査区出土遺物実測図(1)
- 第20図 B調査区出土遺物実測図(2)
- 第21図 C調査区西壁十層図
- 第22図 C調査区遺構実測図
- 第23図 S B C 1 実測図
- 第24図 S B C 3 実測図
- 第25図 S B C 2 実測図
- 第26図 S B C 9 実測図
- 第27図 S B C 12 実測図
- 第28図 C調査区掘立柱建物出土遺物実測図
- 第29図 C調査区北側（S D C 1）実測図
- 第30図 S D C 1 出土遺物実測図(1)
- 第31図 S D C 1 出土遺物実測図(2)
- 第32図 S G C 1・S K・柱穴類出土遺物実測図
- 第33図 S E C 1 実測図
- 第34図 S E C 2 実測図
- 第35図 S E C 3 実測図

- 第36図 S E C 3出土遺物実測図  
第37図 S E C 4出土遺物実測図  
第38図 C調査区出土遺物実測図(1)  
第39図 C調査区出土遺物実測図(2)  
第40図 C調査区出土遺物実測図(3)

## 表 目 次

- 表1 B調査区掘立柱建物一覧表  
表2 C調査区掘立柱建物一覧表

## 図 版 目 次

- 図版1 横路地区遠景(南より)  
図版2 A調査区全景  
図版3 B調査区全景(北より)  
図版4 C調査区全景(北より)  
図版5 試掘調査B-1調査区(水山跡検出状況)  
図版6 試掘調査D-1調査区(近世遺構)  
図版7 試掘調査E-4調査区(中世遺構検出状況)  
図版8 A調査区水山跡畔検出状況  
図版9 A調査区水山跡北縁検出状況  
図版10 B調査区西壁土層  
図版11 B調査区中世遺構検出状況  
図版12 B調査区近世遺構検出状況  
図版13 B調査区近世遺構(西より)  
図版14 B P 8 5 遺物出土状況  
図版15 B P 8 6 遺物出土状況  
図版16 S K B 1 遺物出土状況  
図版17 S K B 1 全景  
図版18 C調査区西壁土層(北側)  
図版19 C調査区西壁土層(中央)  
図版20 S D C 1 土層堆積状況  
図版21 S D C 1 全景(東より)  
図版22 噴砂検出状況(遺物包含層上面)  
図版23 S E C 1 と土器群A(S D C 1内)  
図版24 S D C 1 内土器群B  
図版25 S G C 1 全景(西より)  
図版26 S E C 1 検出状況

- 図版27 S E C 1 全景  
図版28 S E C 2 全景  
図版29 S E C 3 全景  
図版30 S E C 4 検出状況  
図版31 S E C 4 全景  
図版32 出土遺物(1)  
図版33 出土遺物(2)  
図版34 出土遺物(3)  
図版35 出土遺物(4)  
図版36 出土遺物(5)  
図版37 出土遺物(6)  
図版38 出土遺物(7)  
図版39 出土遺物(8)  
図版40 出土遺物(9)  
図版41 出土遺物(10)  
図版42 出土遺物(11)  
図版43 出土遺物(12)

## I. 調査の経緯

横路遺跡は島根県浜田市下府町に位置しており、伊賀上地区画整理事業により発掘調査が行われた古市遺跡より約1km下流である。那賀郡金城町を源とする二級河川下府川が大きく南へ屈曲する地点の北側の微高地上に位置する。この一帯は平地が広がり、昭和53年には島根県教育委員会による石見国府推定地調査が行われている（註1）。その結果、近世以降の畦状遺構が検出されたのみで、国府に関する遺構や遺物は確認されなかった。

平成6年にこの地域に国府中学校・有福中学校の統合に伴う新校舎の建設設計画が提示された。事業対称地は周知の埋蔵文化財である横路遺跡（土器土地区）に隣接しており（註2）、浜田市教育委員会は平成8年1月から3月にかけて重機及び人力による試掘調査を実施した。その結果、対称地の一部で中世の水田跡及び柱穴と土師器、輸入陶磁器などの遺物を確認した。これに伴い、調査対象遺跡を「横路遺跡（原井ヶ市地X）」とした。

試掘調査の結果を受けて、浜田市開発公社との協議を行い、平成8年度に発掘調査、平成9年度に調査報告書作成を行うこととなった。

事業対称地30,000m<sup>2</sup>のうち、A調査区300m<sup>2</sup>・B調査区937.5m<sup>2</sup>・C調査区725m<sup>2</sup>の合計1962.5m<sup>2</sup>を全面調査の対称とし、平成8年10月14日からA調査区より調査を開始した。表上部を重機により掘削し、遺物包含層及び遺構を人力により調査を実施した。

調査の結果、A調査区では中世の水田跡、B・C調査区からは平安時代初めから鎌倉時代頃（8世紀後半から14世紀）の柱穴や、土器が大量に廃棄された溝・井戸が見つかった。古市遺跡と併せて、中世前半には下府川沿いに多量の貿易陶磁を伴う町が存在したことが明らかになった。またB・C調査区で確認された平安時代初め頃の遺物や建物跡は山側に古代の遺跡の存在を示しており、石見国府を考える上で非常に貴重な調査結果を得た。

調査後半は周辺の造成工事と並行することとなったが、3月22日に現地説明会を開催し、3月31日に調査を終了した。調査区は砂を敷いて埋戻しを行った。

平成9年度は平成9年10月7日から平成10年3月31日まで遺物整理と調査報告書の作成を実施した。

### 註

- (1) 島根県教育委員会 1978『石見国府推定地調査報告1』
- (2) 浜田市教育委員会 1997『横路遺跡(土器土地区)』

## II. 位置と歴史的環境

横路遺跡は島根県浜田市下府町788番地他に所在し、石見地方と呼ばれる島根県西部地域のほぼ中央に位置する。この地域は山々が海岸付近までせまっており、河川河口部には沖積平野が広がる。遺跡は下府川が大きく平野南部に屈曲する地点の現標高約2.7～3.8mの平地に立地する。

この地域の遺跡は数としては少ないが、石見国分寺・同国分尼寺などが所在しており、古代から中世にかけての石見国の中心と考えられ「那賀郡伊甘郷」に属す。現在、旧石器・縄文時代の遺跡は知られていない。

### 弥生時代

伊甘神社脇遺跡（註1）・下府廃寺跡（註2）・古市遺跡（註3）・上府遺跡（註4）などで前期から後期にかけての遺物が確認されている。川向遺跡で環状石斧（註5）、上条遺跡（註6）では扁平紐式袈裟襷文銅鐸が2個体発見されている。銅鐸は正立した状態で埋められていたとされる。銅鐸の分類ではⅢ式に属すものである（註7）。

### 古墳時代

前期・中期古墳は確認されていない。中ノ古墳の墳形は不明であるが、片袖の横穴式石室が一部残っている。半場口古墳群は箱式石棺の1号墳、横穴式石室の奥壁のみが残る2号墳で構成され、いずれも墳丘は不明である。片山古墳は外護列石を廻らす二段築成の方墳で、全長6.4m、幅約1.7mの無袖形の横穴式石室が開口している（註8）。集落跡は確認されていないが、伊甘神社脇遺跡で手捏ね土器を含む5世紀末～6世紀の祭祀土壙が見つかっている（註9）。

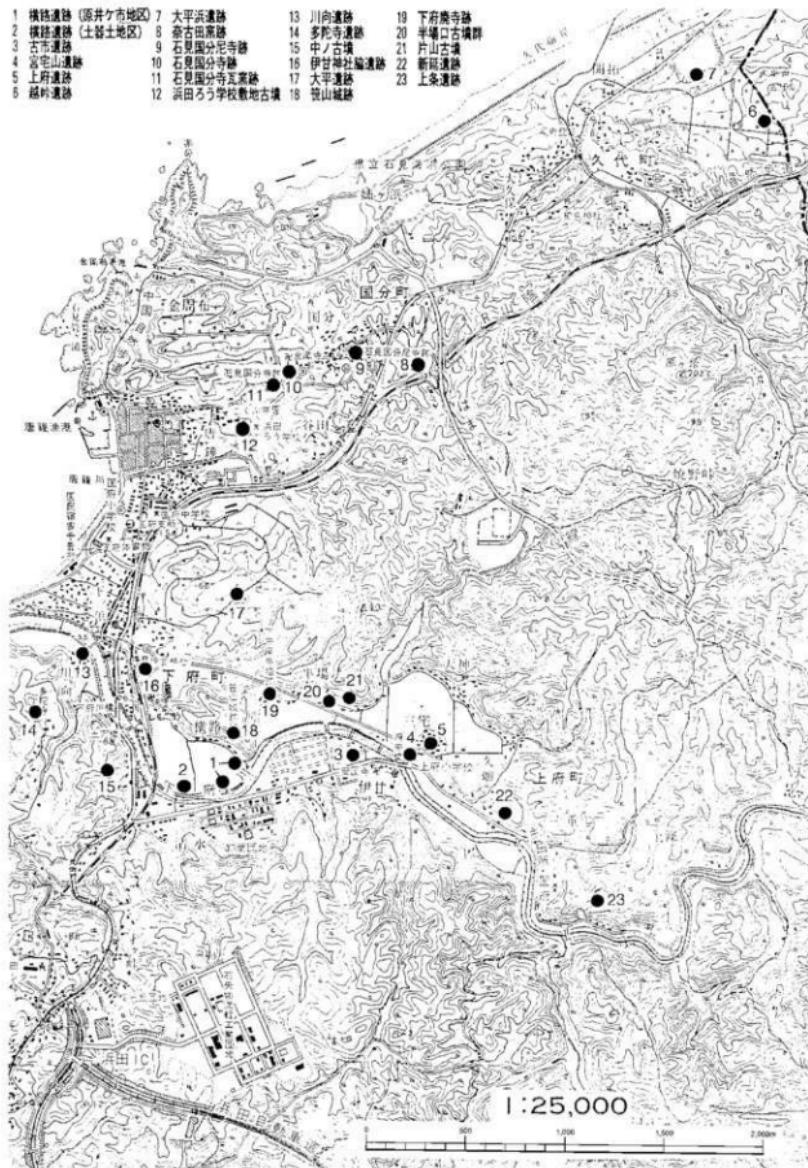
### 古代

石見国府は横路地区、伊甘神社脇遺跡、上府遺跡の3地点での推定地調査が行われたが、所在は確定されていない（註10）。奈古田窯跡は7～8世紀頃の須恵器窯で、中心部分は烟により破壊されていると考えられる（註11）。白鳳時代末には金堂と塔のみの法起寺式に近い伽藍配置の下府廃寺が建立される（註12）。石見国分寺は現在の金蔵寺境内にあり、塔跡の一部などが調査され、白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出上している（註13）。国分寺塔跡から約100m南西側には、石見国分寺瓦窯跡が位置している（註14）。石見国分尼寺は現在の国分寺の境内に位置し、石見国分寺と同文の軒瓦や白鳳期の銅造誕生釈迦仏立像が出土している（註15）。

### 中世

古代からの国府は新たに「府中」として発展したと考えられる。府中の範囲は現在の上府・下府を中心とした地域と推定されている（註16）。古市遺跡（註17）・横路遺跡（註18）・伊甘神社脇遺跡（註19）・上府遺跡（註20）・下府廃寺跡（註21）などで遺構、遺物が確認されている。現在の河口付近の川向遺跡や砂丘地である大平遺跡、上府八幡宮下の宮宅山遺跡からも遺物が確認されている。笠山城跡も含め、広い範囲で中世遺跡が分布している。また、益田氏との関連が深く、伊甘山安国寺・伝御神本（益田）氏三代の墓、臼口大明神、上府八幡宮がある。また、明治23年の地籍図を見ると、現在の上府町三宅の平野には縦長の条理の跡が見られる（註22）。

- |                 |             |            |           |
|-----------------|-------------|------------|-----------|
| 1 横路遺跡 (原井ヶ市地図) | 7 大平浜遺跡     | 13 川向遺跡    | 19 下府廢寺跡  |
| 2 横路遺跡 (土器土地区)  | 8 古田窯跡      | 14 多院寺遺跡   | 20 半場口古墳群 |
| 3 古市遺跡          | 9 石見國分尼寺跡   | 15 中ノ古墳    | 21 片山古墳   |
| 4 宮宅山遺跡         | 10 石見國分寺跡   | 16 伊甘神社附近跡 | 22 新延遺跡   |
| 5 上府遺跡          | 11 石見國分寺瓦窯跡 | 17 大平遺跡    | 23 上条遺跡   |
| 6 越前道路          | 12 浜田ろう学校遺跡 | 18 長山城跡    |           |



第1図 横路遺跡周辺図

註

- (1)島根県教育委員会1979『石見国府推定地調査報告Ⅱ』
- (2)浜田市教育委員会1993『下府廃寺跡』
- (3)浜田市教育委員会1992『古市遺跡発掘調査概報』
- (4)島根県教育委員会1980『石見国府推定地調査報告Ⅲ』
- (5)浜田市1973『浜川市誌 下巻』
- (6)直良信夫1932「石見上府村発見銅鐸の出土状態」  
『考古学雑誌22-2』
- (7)島根県教育委員会・朝日新聞社1997  
『古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産—』
- (8)前掲註2
- (9)前掲註1
- (10)島根県教育委員会1978『石見国府推定地調査報告Ⅰ』  
前掲註1・4
- 石井悠1996「石見国」「国府—畿内・七道の様相—」  
日本考古学協会三重県実行委員会
- (11)川原和人1980「石見の須恵器窯跡」『さんいん古代史の周辺(下)』
- (12)前掲註2
- (13)浜川市教育委員会1989『石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報』
- (14)内田律雄1986「石見国分寺瓦窯跡」  
『島根県生産遺跡分布調査報告書』
- (15)国府町文化財審議会1963『国府町の文化財』
- (16)益田市教育委員会1996「第58号文書 解説」  
『史料集・益田兼堯とその時代』
- (17)浜田市教育委員会1995  
『伊賀土地区画整理事業に伴う占市遺跡発掘調査概報』
- (18)浜川市教育委員会1997『横路遺跡(土器土地区)』  
前掲註3
- (19)前掲註1
- (20)前掲註4
- (21)前掲註2
- (22)前掲註4

### III. 調査の概要

#### 1 試掘調査(第3図・第4図)

事業計画地内はほぼ平坦な水田地のため、東西に50m間隔・南北に30m間隔で5m×3mの調査区を20区設定した。南西隅を起点に西から東へA～F、南から北へ1～4と順に調査区番号を決め、部分的に拡張等を行った。

調査前の原状は平野部の北側は湧水が激しい地点で、休耕田となっており、南側は現水田地である。東側の篠山の下辺りは災害により何回か下府川が決壊し土砂が流入している。現地表高は2.7m～3.8mにかけてで、北側の山裾部と東側にかけて高くなる。調査地の小字名はすべて「原井ヶ市」である。

石見国府推定地調査の際には畦状遺構と仮称された起伏が確認されており、江戸時代頃と考えられている。今回の試掘調査は畦状遺構より下の状況の確認に特に重点を置いて調査を行った。

##### A-1 調査区

5m×3mの調査区である。約1.5m下・標高1.9m付近まで調査した。水田下のほぼ標高3.0m以下は砂礫層や砂層が堆積していた。砂礫層中より内外面に離砂の付着した瓦が1点見つかったのみである。遺構は確認されなかった。

##### A-2 調査区

5m×3mの調査区である。約1.5m下・標高1.9m付近まで調査した。標高2.5m以下は砂質土・砂層が堆積している。標高2.4mの暗褐色砂質土で磨滅した土器の細片を一点確認した。遺構は確認できなかった。

##### A-3 調査区

5m×3mの調査区である。約1.2m下・標高2m付近まで調査した。遺構・遺物は確認されなかった。

##### A-4 調査区

5m×3mの調査区である。石見国府推定地調査の第1次調査地点である(以下推定地調査と略す)。0.7m下・標高2.5m付近まで水が湧くため、一部を重機による深堀りを標高1.4m付近まで行ったが、標高1.879m以下は均質な暗青灰色粘質土で遺物は確認できなかった。調査区西壁際に推定地調査のD-4トレンチが一部確認できた。畦状遺構は北壁で4列確認したが、南壁では確認できなかった。南北方向に走り調査区内で途切れていると考えられる。遺物は確認できなかった。

##### B-1 調査区

5m×3mの調査区を設定したが、地上下0.6m・標高約2.7mの淡赤灰色粘質土面で黄色砂に入る長方形形状の落ちこみを2枚確認した。そのため、北側・東側をそれぞれ拡張し、面的な広がりの確認を行った。東西方向に長い2枚の短冊型の落ち込みで、北側は南北約3.7m・東西約18m・深さ2mを測り、南側は南北4m以上・東西約18m・深さ20cmを測る。いずれも床面はほぼ水平である。北側と西側に同様の遺構は確認できず、北側と東側の遺構面は小謄を含

む淡黄褐色砂質土になる。淡赤灰色粘質土上面で土師器と考えられる微細な破片が見つかったのみで明確な時期は不明である。淡赤灰色粘質土の下は砂礫層である。遺構のあり方から一時的な水田跡と考えられる。

#### B-2 調査区

5m×3mの調査区である。約1.2m下・標高約2.3mまで調査した。標高約2.6m以下は砂礫層や砂層が堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。

#### B-3 調査区

5m×3mの調査区である。約1.1m下・標高約2.3mまで調査した。標高約2.9mの暗灰色粘質土より磨滅した土師器の細片が一点見つかった。遺構は確認できなかった。

#### B-4 調査区

5m×3mの調査区である。推定地調査地点である。約1m下・標高約2.4mで湧水がある。標高約2.3m以下は浅黄色砂層であった。畦状遺構は6列確認でき、東西方向に走る。凹所を砂礫層が埋めており、マンガンにより青色味を帯びている。調査区の東壁側は竹を埋めた後世の暗渠によって壊されている。遺物は確認できなかった。

#### C-1 調査区

5m×3mの調査区である。約1.2m下・標高約2.0mまで調査した。標高約2.9m付近の暗灰褐色粘質土混じり黄褐色粘質土より土師器の底部が一点見つかった。遺構は確認できなかった。

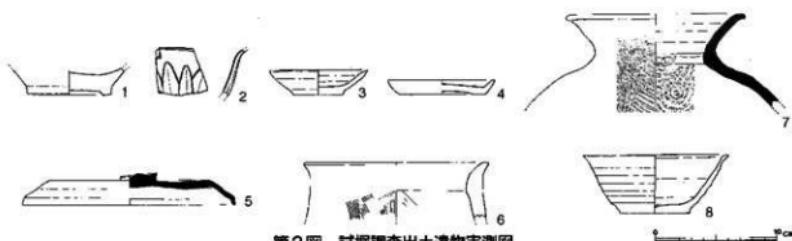
#### C-2 調査区

5m×3mの調査区である。約1.0m下・標高約2.4mまで調査した。標高約2.6m以下は砂礫層が堆積している。現在の水田床下には厚さ約20cmで砂礫層があり、白磁碗II類の底部破片が一点確認された。この砂礫層の下には最大の厚さ10cm程の黒灰色粘質土が堆積していたが、遺物・遺構は確認できなかった。

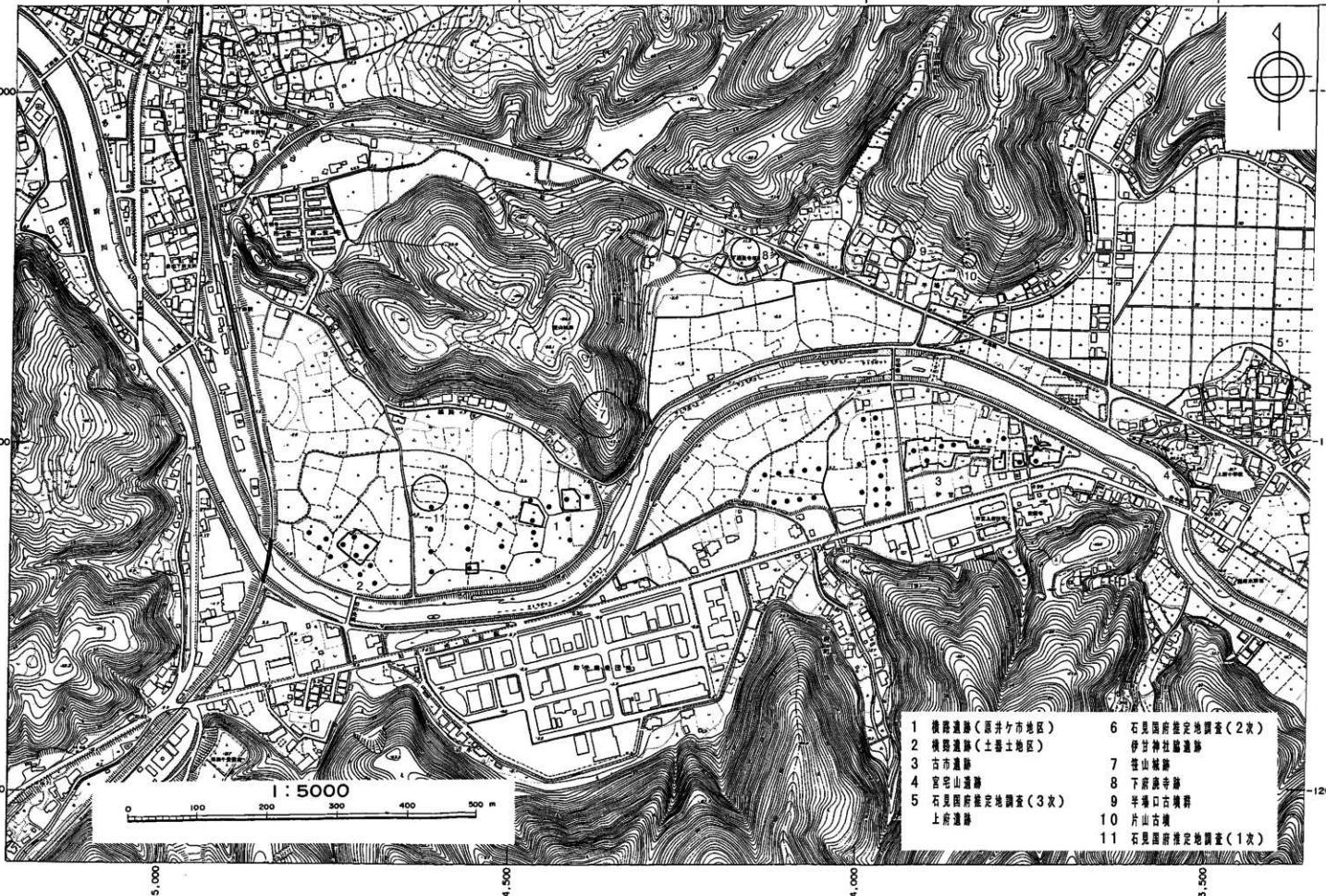
#### C-3 調査区

5m×3mの調査区である。約1.2m下・標高約2.2mまで調査した。標高約2.5m以下は砂及び砂利層が堆積している。畦状遺構は3列確認でき、北東方向へ走る。いずれも凹所を砂礫層が埋めている。この砂礫層中から磁器片が出土した。全面に失透性の灰白色の釉がかかり、高台内面の釉を輪状に掻き取るものである。近世以降のものと考えられる。

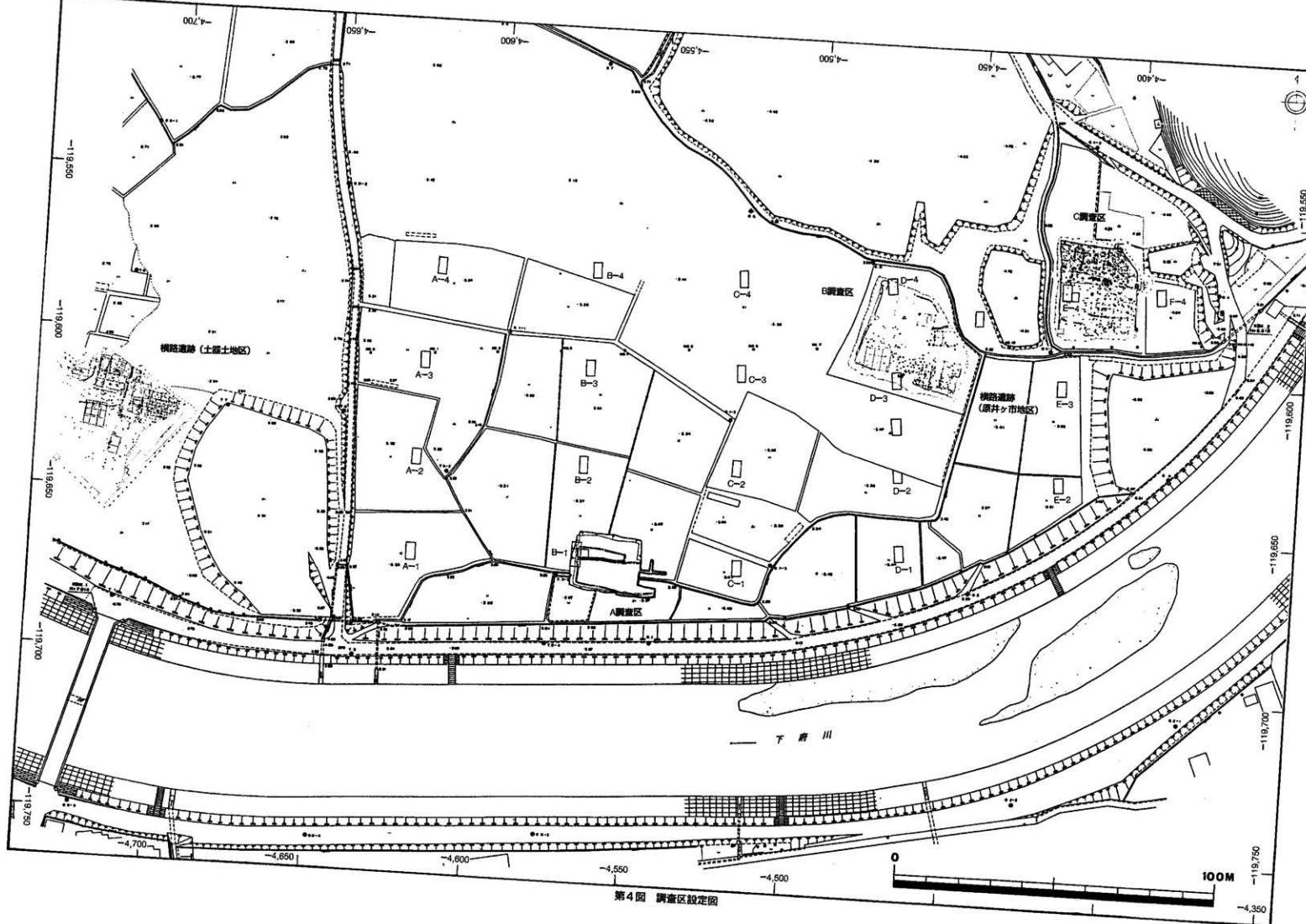
#### C-4 調査区



第2図 試掘調査出土遺物実測図



第3図 調査区位置図（黒丸印は試掘調査）



5m×3mの調査区である。約1.1m下・標高2.1mまで調査したが現代の暗渠があるため特に湧水が激しかった。畦状遺構は5列存在し、北西方向に走る。標高約2.3mの暗青灰色粘質土から須恵器の細片が出土した。

#### D-1 調査区

5m×3mの調査区である。約1.3m下・標高2.16mまで調査した。畦状遺構は4列確認でき、内1列は調査区内で途切れている。凹所を砂礫層が埋めており、東西方向に走り、床面はほぼ水平である。遺物は確認できなかった。

#### D-2 調査区

5m×3mの調査区である。約1.2m下・標高2.06mまで調査した。水田床下の標高3.00m付近に厚さ20cm程の砂礫層が堆積しており、標高約2.5m以下は砂・砂利層が堆積している。遺構・遺物は確認できなかった。

#### D-3 調査区

5m×3mの調査区である。約1.1m下・標高2.40mまで調査した。水田床下に畦状遺構は4列確認でき、北東方向に走る。その下に厚さ10cm程の灰色粘質土と黒色粘質土が堆積しており、弥生時代～中世前半にかけての遺物を含む。黒色粘質土を取り除いた直下の灰色砂質土の混じる灰白色砂利層面で柱穴10基と落ち込み1基が確認された。遺構面は若干北側に向けて高くなるが、ほぼ標高2.50mを測る。湧水が非常に激しく、調査した柱穴は湧水で形がすぐに崩壊してしまった。埋土はいずれも上層と判別がつかない同様の黒色粘質土である。柱穴は直径10cm～25cm、深さ13cm～22cmで、中から土師器、白磁などが出土した。

#### 出土遺物（第2図・1～4、7）

(1)は黒色粘質土出土の白磁碗の底部である。太宰府の貿易陶磁器分類の椀IV類である(註1)。胎土は白色で釉は灰白色である。低い削り出しの高台を有す。(2)も黒色粘質土出土の龍泉窯系青磁碗I 5類である。淡緑色の釉が厚くかかる。外面にはしっかりした削りだしの鍋連弁文がある。(3)・(4)は柱穴内出土の土師器皿である。いずれも淡黄褐色を呈し、底部は回転糸切り痕が残る。(3)は底部がやや厚く、体部は直線的に立ち上がる。(4)は器高が低く体部は短く立ち上がる。(7)は遺構検出面の砂利層面で見つかった須恵器の甕である。灰色を呈し、外面には自然釉がかかる。外面は平行叩き、内面は同心円叩きの痕跡が残る。

#### D-4 調査区

5m×3mの調査区である。約1.6m下・標高1.60mまで調査した。畦状遺構が確認できるが、北側は凹所を灰色砂層が埋めていた。北西方向に走る。標高約2.6mに黒灰色粘質土があり、D-3調査区の遺物包含層に対応すると考えられる。遺物はD-3調査区と同様のものが見つかるが、量はやや少ない。黒灰色粘質土下には緑灰色粘質土が堆積しており、須恵器の蓋、土師器の甕が出土した。この緑灰色粘質土は古市遺跡において見られた遺構検出面の土と同様であったが、遺構は見つからなかった。また、この土に部分的に挟まる暗青色砂層が帶状に不自然に動いており、液状化現象によると推定される。しかし、細い砂帶から湧水が起るため、壁面は直ぐそこから割れて崩壊してしまった。しかし、前述の黒灰色粘質土中で止まっており、中世前半以降のものと考えられる(註2)。この下には植物質を含む黒褐色粘土が堆積してい

たが、遺物は確認できなかった。

#### E - 2 調査区

5m × 3m の調査区である。約1.6m下・標高2.00mまで調査した。水田床下の標高3.15m付近に厚さ約30cm程の砂礫層が堆積しており、標高2.6m以下は薄く砂層や粘質土が堆積している。遺構・遺物は確認できなかった。

#### E - 3 調査区

5m × 3m の調査区である。約1.4m下・標高2.3mまで調査した。標高2.6m以下は砂層が堆積しており、湧水が激しい。畦状遺構は東西方向に4列走る。標高約2.8m付近に弥生時代から中世までの遺物が混在して含まれる暗褐色粘質土が堆積している。遺構は確認できなかった。

#### E - 4 調査区

5m × 3m の調査区を設定したが、湧水が激しいため東側を 3m × 3m で拡張して調査を行なった。標高約2.2m付近に主として奈良時代から中世前半の遺物を含む厚さ20cmの黒色粘質土が堆積しており、D - 3 調査区の層と対応すると考えられる。この直下で柱穴を 5 基確認した。西側は激しい湧水で検出できかったが同様に存在したと考えられる。径は25cm～30cm・深さ 5 cm～17cm を測る。柱穴から遺物は見つからなかった。遺構検出面はほぼ3.2mを測り、若干南側に向かって高くなる。

#### E - 4 調査区

(8)は土師器の壺である。赤みを帯びた淡褐色を呈し、底部には回転糸切り痕が残る。体部には回転ナデ痕が残り、II 線端部は外反する。内面は外面より丁寧に仕上げてある。

#### F - 4 調査区

5m × 3m の調査区である。約1.0m下・標高3.0mまで調査した。現在の水田直下には硬質の三群変性岩の角礫を含む土が堆積している。この角礫はすぐ北側の笠山からのものと考えられる。これらの層からは弥生時代～中世にかけての遺物の細片が少量出土した。調査区の北東隅に北西方向の流路が確認された。砂層が堆積しており、一部層を内えぐり状に削りこんでいることから相当強い水流だったと考えられる。

試掘調査の結果B - 1・D - 3・E - 4 調査区を中心に弥生時代から中世前半までの遺物包含層と中世前半の柱穴などの遺構を確認した。全体ではコンテナ2箱分の遺物が見つかった。

B - 1 調査区で一部確認した落ち込みは形態、埋没状況からみて災害で埋まった水田跡と考えられる。しかし、深さがそれぞれ15cm近く差があること、床面に耕作土や人為的攪乱（足跡）などが確認されなかったことからほとんど使用されなかつた状態で埋没したと考えられる。時

代の決め手となる遺物は見つからなかったが、地盤・集落の形成期から見て、最も古く見て中世前半頃と考えられる。

今回の調査区で最も遺物が出土するのはD-3、E-4調査区である。貿易陶磁より11世紀後半から13世紀中頃（平安時代後期～鎌倉時代前半）にかけての遺跡と考えられる。

遺物包含層の範囲を把握するためにD-2・D-3間とE-4・F-4間の補足調査を行なった。D-2・D-3間の調査区において黒色粘質土は確認できなかった。E-4・F-4間の調査区では黒色粘質土内からほとんど遺物は見つからず、遺構も確認されなかった。D-4、E-4調査区、F-4調査区の緑灰色系の粘質土は川を挟んだ東側に位置する古市遺跡の遺構検出面の土と同様で、同時期の遺構・遺物が確認されている。この土は奈良時代頃の須恵器などの遺物を所々で含んでおり、生活できる基盤の形成の時期を示している。上層部で確認された柱状遺構を埋めている近世以降の砂礫層はほぼ標高3.0m付近で確認される。この流れは調査対象地を北西方向にほぼ横断しており、これらの調査区では遺物もあまりみつからない。

当初、調査対象地西側の試掘調査で確認され、横路遺跡(土器土地区)とした中世前半の集落の続きが今回の調査でも確認されると考えられたが、A-3調査区では遺物包含層と遺構は確認されなかった。しかし、ほぼ同時期の集落が調査区東側の山際で確認された。この遺物包含層からは須恵器が多く見つかり、山際に古代遺跡の存在を伺わせる。前述したように砂礫層の堆積が北西方向に見られたことから考えて、中世の集落が確認された地点は後背湿地状になっており、集落が形成されたと考えられる。

## 2. A調査区（第5図）

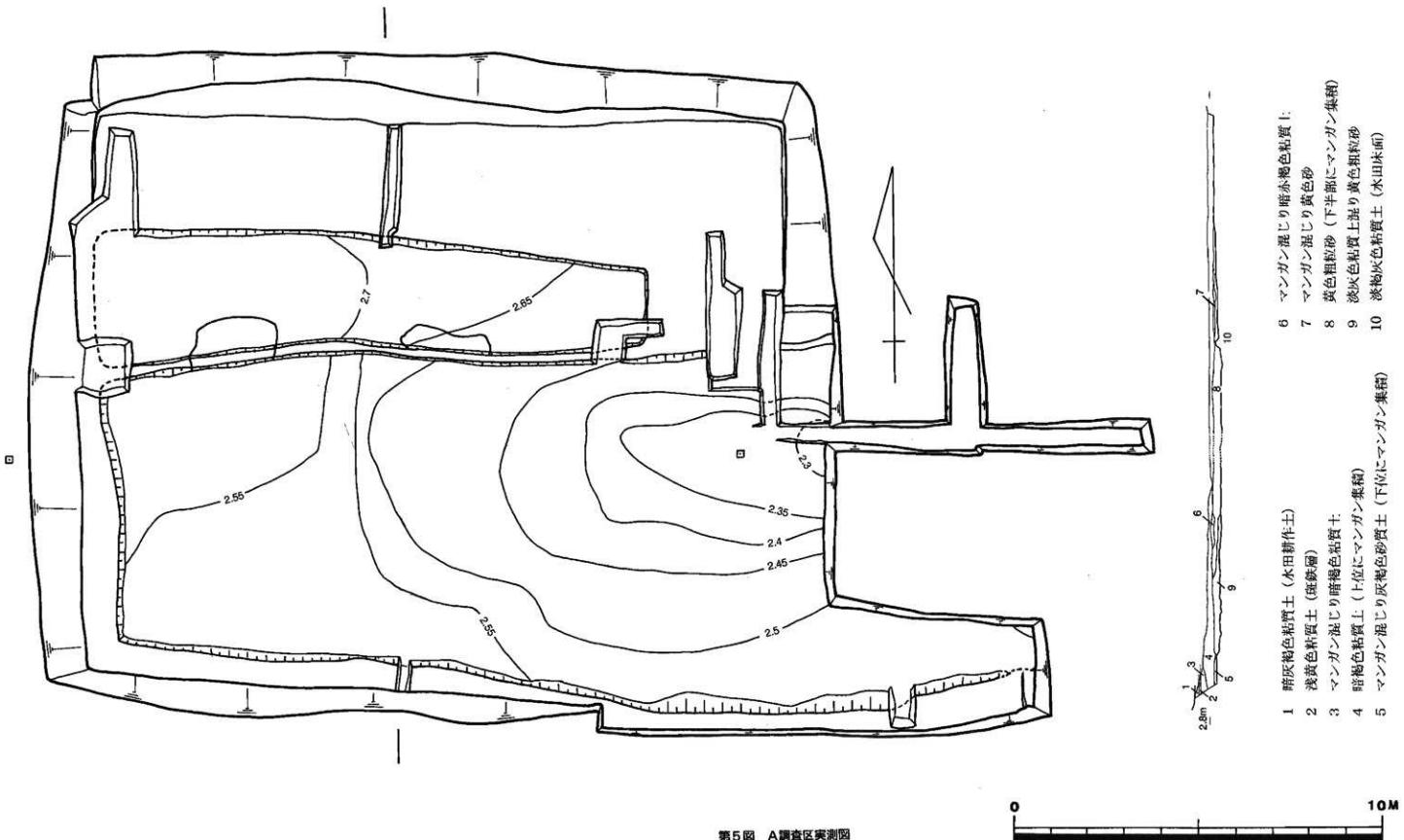
試掘調査の結果を受け、B-1調査区を中心に15m×20m (300m<sup>2</sup>) の調査区を設定した。現在の下府川の脇に位置しており、標高は約3.3mである。調査前の状況は水田と畑として利用されていた。現地上下0.6m・標高約2.7mで東西に畦状の土手を掘り残した短冊状の区画が2枚確認された。この遺構は黄色砂で覆われており、洪水によって埋没した水田跡と考えられた。試掘調査の際に遺構の広がりを確認するために北・南・西方向に調査区を拡張したが、遺構は確認できなかった。なお、調査時にプラント・オバール分析を実施し、遺構床面より稻のプランツ・オバールが大量に確認された。

遺構は淡褐色灰色粘質土（第5図・10層）を掘り込んで作られている。この層の下には砂礫層が厚く堆積している。北側の区画は非常に浅く、西端で幅3.8m・東端で幅2m・東西幅15m・深さ2mである。南側の区画は明瞭な東端が検出できなかつたため、東へ調査区を拡張した。黄色砂層は堆積していたが、端は確認できなかつた。検出状況では調査区の東側の地盤は砂礫層のため、遺構はここまで続かないと考えられる。南側の輪郭も、次第に不明瞭になる。このため、南北幅約8m・東西幅は推定で16m程の区画で、東端は残っていないと考えられる。床面西側部は水平だが、北東部にかけて深くなり、西側と比べ約10cmの比高差がある。畦畔部は幅約30cmで上面はやや平らになっている。遺構を覆うようにして堆積した黄色砂層は一部粘質土が混じり、マンガンが凝固していた。

水田跡は二枚確認されたが、これに伴う取水施設、杭列などは確認できなかつた。B・C調査区及び横路遺跡（土器上地区）の調査結果より中世前半頃のものと考えられる。

## 出土遺物（第6図）

(1)は現在の水田耕作土（1層）から見つかった15世紀頃の備前系陶器の擂鉢である(註3)。暗青灰色を呈し、内面は磨滅している。(2)は遺構が埋没した後に堆積した暗赤褐色粘質土（第5図・6層）より見つかった15世紀頃の龍泉窯系青磁碗である。胎上は白色で、釉は淡緑色で厚くかかる。外面には線描きの鎬連弁文を有し、線の重なる部分は濃緑色に幅広く発色する。内面にはII線端部に2mmの浅い沈線状の段がある。(3)・(4)は遺構を埋める黄色砂層より見つかった須恵器の破片である。いずれも表面が磨滅しており、上流部より運ばれてきたと考えられる。(3)は壺の底部で灰色を呈す。底部調整はヘラ切りのうちにナデを施している。(4)は壺類の頸部である。内面は叩きの後ナデを施す。



第6図 A調査区出土遺物実測図

### 3. B 調査区

試掘調査の結果を受けてD-3調査区を中心に937.5m<sup>2</sup>の調査区を設定した。表上を重機で掘削したあと、5m四方で調査区を区切った。この区ごとに遺物包含層及び遺構を人力により調査を行った。各区ごとに取り上げた遺物は分類したあと破片数と底部個体数を数え、集計を行った。

#### A. 調査区の層位（第7図）

まず灰色の細粒砂や砂礫層（12・13層）が堆積し、遺跡の基盤が形成される。これらの基盤層は河川による堆積層で川の本流に近い状況であったと考えられる。その上には灰色砂質土が堆積し、古代の遺構面が形成される。この時期は河川の流路が離れたため、比較的安定した地盤が形成されていたと考えられるが、この層は北西側へ大きく傾斜しており北西側は凹地状になっていたと考えられる。その上に古代の遺物を含む緑灰色粘質土（9層）が堆積している。この層も北西側へ厚く堆積し、北西側の凹地を埋めている。この層からは古代の須恵器、土師器が大量に見つかった。上面では中世の遺構が確認されたが、調査区東側ではマンガンの凝固によりこの層は確認できず、中世の遺構も灰色の細粒砂や砂礫層（12・13層）で検出している。

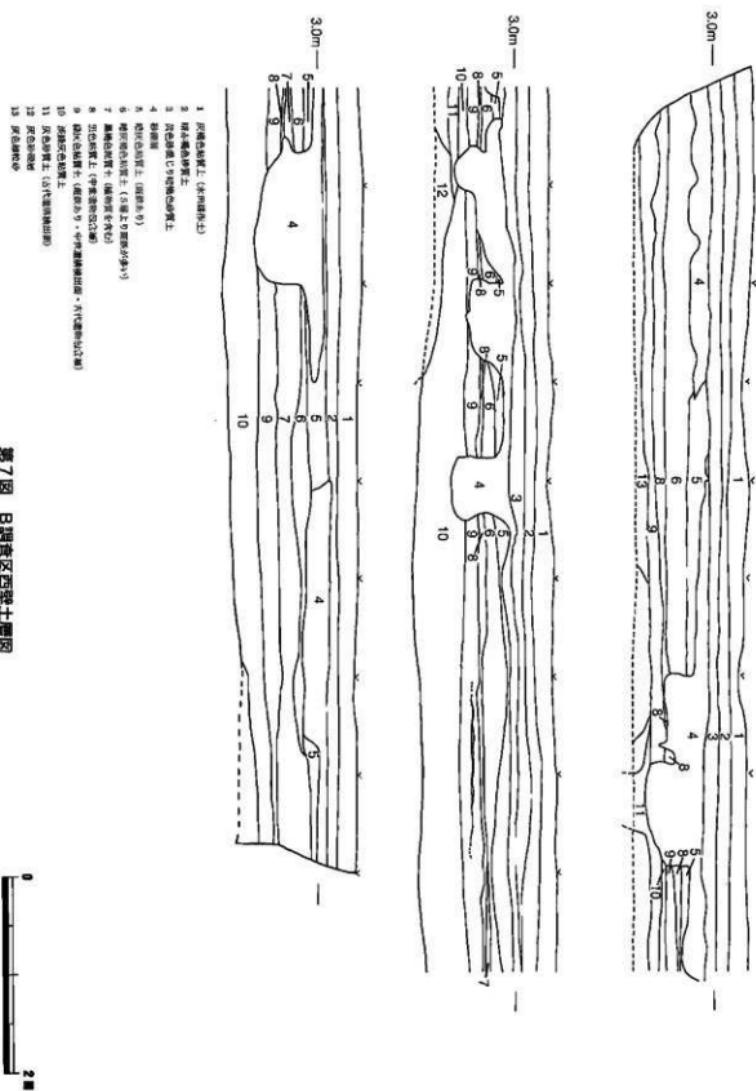
その上に中世の遺物を含む黒色粘質土（8層）が厚さ5cm程で堆積している。調査区北側ではこの黒色粘質土を切って植物質を含む黒褐色泥質土（7層）が堆積しており、中世以降に調査区北西側は湿地であったと考えられる。

暗灰色粘質土（3層）上面では砂礫層（4層）の堆積した溝や土壙が確認された。18世紀頃の遺物を含んでおり、この時期にこの地区は大洪水に襲われたと考えられる。同様の遺構と堆積状況は試掘調査でも確認されていた。およそ近世以降には水田あるいは畑として利用され、現在に至ったと考えられる。古代の遺構埋土は灰褐色粘質土や灰色粘質土で、遺構は調査区北東側で確認された。中世の遺構埋土は黒色粘質土で、遺構は調査区南側に分布している。調査区北西側にはかつて鉄塔が立っていたため搅乱を受けている。古代以降は凹地であったと考えられ、遺構は検出できなかった。

#### B. 近世の遺構・遺物（第8図・第9図）

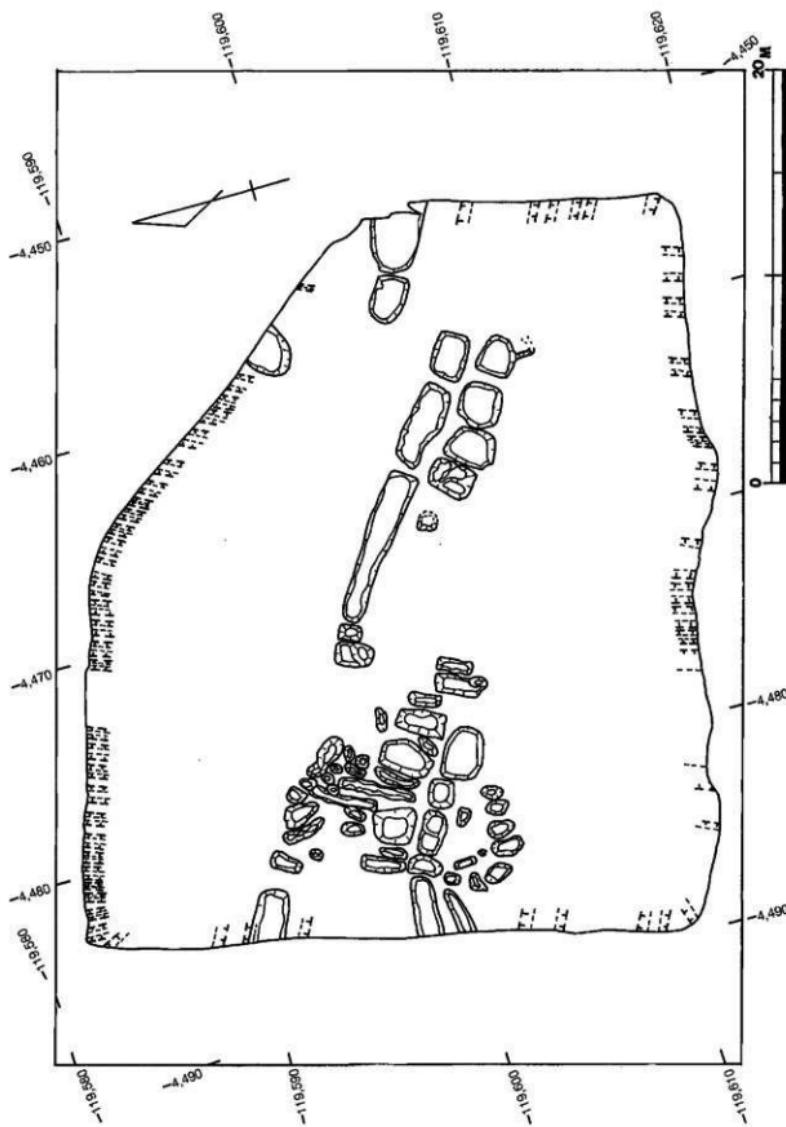
砂礫層（4層）に覆われた遺構は溝と土壙がある（第8図）。土壙はちょうど調査区の中央に東西方向に分布している。西側に不定形なものが密集し、東側にはある程度形の整ったものが並んでいる。重機掘削面からの精査のため、正確な規模ではないが、最大約7.5m×1mの短冊状のものから約4m×4mのものまである。深さも約10cm程のものから55cmまでと形態や深さは様々である。溝状のものは北基準で東へ約4°振ったものと西基準で北へ約4°振ったものがある。この調査区周辺では規則的に掘られていたものと推定される。全長は不明だが調査区中央の土壙付近までは延びていたと考えられる。深さは約10cm程のものから38cmまである。この調査区周辺で規則的に掘られていたものと推定される。北側には浅いものが密集しているが、それ以外ではやや分布が希薄である。

砂礫層から見つかった遺物は古代から近世にかけてと幅広い時期のものだった。最も新しい



第7図 B調査区西望土壤図

第8图 B调查区近地层探测图



遺物は18世紀のもので、この砂礫層も同時期と考えられる。したがって18世紀頃には一度この平野は大洪水に襲われ、砂礫層に覆われたと考えられる。

同じ状況で検出された遺構は石見国府推定地調査や試掘調査でも確認されているが、これまでのものは溝状遺構（石見国府推定地調査では鞋状遺構）のみであったが、この調査区では土壙状のものがかなり多く見られた。遺構の性格としては復旧痕の可能性がある。これは、「水田土壤復旧型」と呼ばれるもので（註4）、土壤を掘削して洪水砂層を埋填処理し、耕作土を掘り出すことによって耕地を復旧するものである。調査区北半分の溝には粒の細かい砂礫層が堆積しているのに対して、土壤は粒の粗い砂礫層が堆積している。このことから洪水の本流は調査区中央の土壤が分布する地帯を流れたと考えられる。

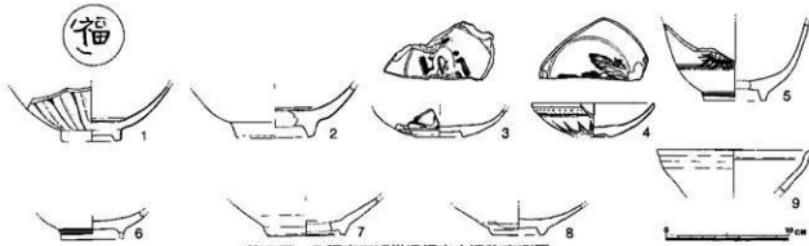
#### 出土遺物（第9図）

(1)は龍泉窯系青磁碗 I 5類である。胎土は淡灰色、釉調は淡緑色で厚くかかる。外面には削り出しの鍋連弁文を有す。内面にはややゆるい段があり、見込みには「福」のスタンプが押される。(2)も龍泉窯系青磁碗である。胎土は白色、釉調は淡緑色で厚くかかる。内面見込みには浅く沈線がある。(3)は中国の青花皿である。胎土は淡灰色、釉調はくすんだ灰白色である。基筒底で内・外面共に黒色で文様が描かれる。(4)も中国の青花皿である。胎土は白色、釉調は青みがかかった白色である。基筒底で内・外面共に青色で文様が描かれる。(5)は肥前磁器の碗である。胎土は白色、釉調は明緑灰色である。体部の立ち上がりがきつく、外面には青色で松のような文様と線が描かれる。(6)は肥前陶器である。胎土は淡灰褐色、釉調は淡灰色である。外面の体部と高台境に青色で沈線が2本描かれる。(7)は陶器である。胎土は淡灰色である。内面見込みには段がある。くすんだ灰白色を呈し、二次的に火を受けた可能性がある。(8)は肥前磁器である。胎土は白色、釉調は白色で失透性がある。高台内面は露胎で、内面見込みの釉を輪状に描き取っている。(9)は国产の天日茶碗である。胎土は白色、釉調は黒色で内面は薄く褐色味がある。口縁端部はややくびれる。

遺物の時代幅は古代の須恵器から(1)のような中世前半の遺物、(2)、(3)、(4)は16世紀頃、(5)、(6)、(8)、(9)は18世紀頃と考えられるものまで幅広く見つかった（註5）。

#### C. 堀立柱建物・溝

柱穴類と考えられる遺構は全部で234確認し、建物跡として5棟復元した。



第9図 B調査区近世遺構出土遺物実測図

SBB1・SBB2・SBB3・SBB4は中世前半の建物跡で、SBB5は古代の建物跡である。

#### SBB1 (第11図)

調査区の南西隅に位置する。検出面の標高は約2.5mである。建物の規模は3間(8m)×3間(6.66m)の総柱建物で、軸方向はN-7°-Eを測る。柱穴は径約10~30cm、深さ約20cmとやや小さいが、遺構の分布が少なく、比較的容易に復元できた。柱穴内からは土師器、須恵器の破片が見つかった。

#### 出土遺物 (第15図・1)

(1)はBP6出土の土師器の环である。胎土は赤褐色粒を微量に含み、赤みを帯びた淡黄褐色を呈する。口径15.8cm・底径5.8cm・器高4.1cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。底径が口径に対して小さく、体部はやや丸みを持ちながら直線的に立ち上がる、外面には回転ナデ痕が残り、内面はやや丁寧に仕上げられている。

#### SBB2 (第10図)

調査区の中央に位置する。3間(6.28m)×2間(2.9m)、軸方向はE-6°-Sを測る側柱建物である。検出面の標高は約2.6mである。柱穴は径約20~40cm、深さ約20cm前後で不整形のものが多い。柱穴内からは土師器、須恵器、龍泉窯系青磁碗の破片が見つかった。

#### SBB3 (第12図)

調査区の東側に位置する。建物の規模は4間(8.32m)×2間(5.2m)、軸方向はN-8°-Eを測る側柱建物である。検出面の標高は約2.55mである。柱穴は約20~40cm、深さ約10~20cmである。柱穴内からは土師器、白磁碗II類の破片が見つかった。

#### SBB4 (第13図)

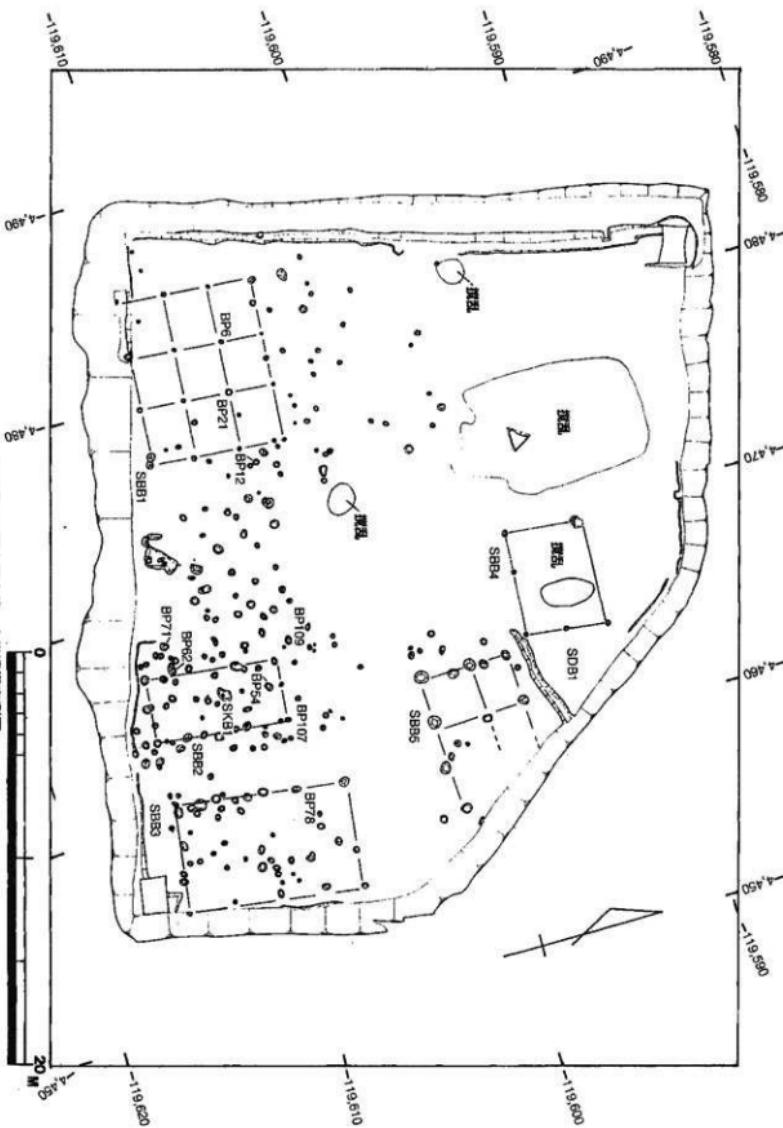
建物の規模は2間(5m)×2間(3.7m)、軸方向はN-7°-Eを測る小型の側柱建物である。検出面の標高は約2.8mである。柱穴は約20~30cm、深さ約20~30cmである。北辺と西辺は柱穴の間が離れているが、他に柱穴が確認できなかったので組み合うものと判断した。柱穴内から遺物は見つかなかった。

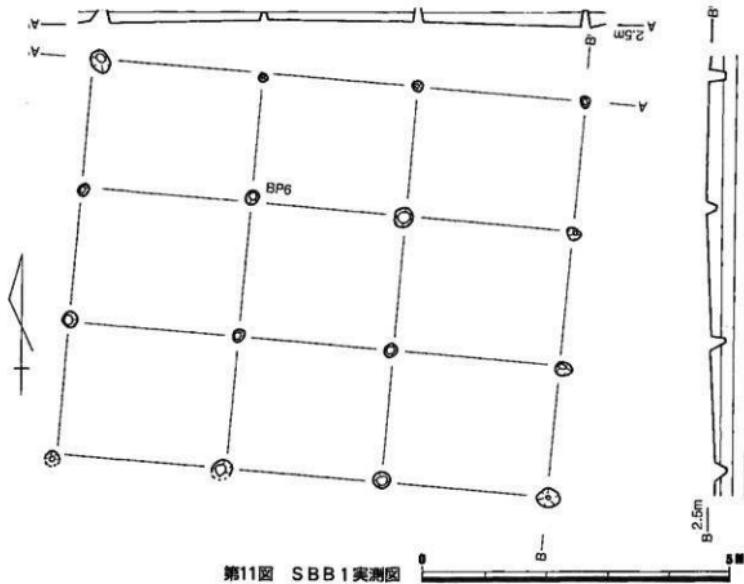
#### SBB5 (第14図)

3間以上(6.6m)×2間(4.22m)を測る総柱建物である。軸方向はE-0°-Sを測る。

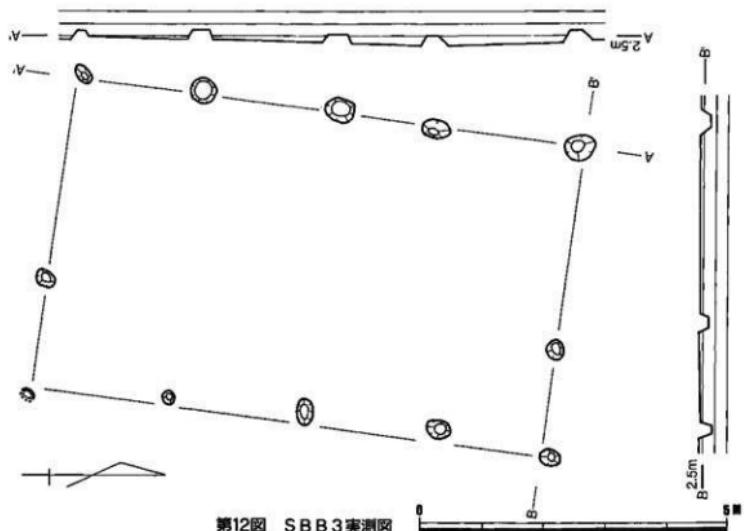
遺構番号	桁行×梁行	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方位	pit番号(報告書掲載分)
SBB1	3×3	8.00×6.66	53.28m <sup>2</sup>	N-7°-E	BP6
SBB2	3×2	6.28×2.90	18.21m <sup>2</sup>	E-6°-S	
SBB3	4×2	8.32×5.20	43.26m <sup>2</sup>	N-8°-E	
SBB4	2×2	5.00×3.70	18.50m <sup>2</sup>	N-7°-E	
SBB5	(3)×(2)	6.60×4.22	27.85m <sup>2</sup>	E-0°-S	BP85;BP86

表1 B調査区掘立柱建物一覧表

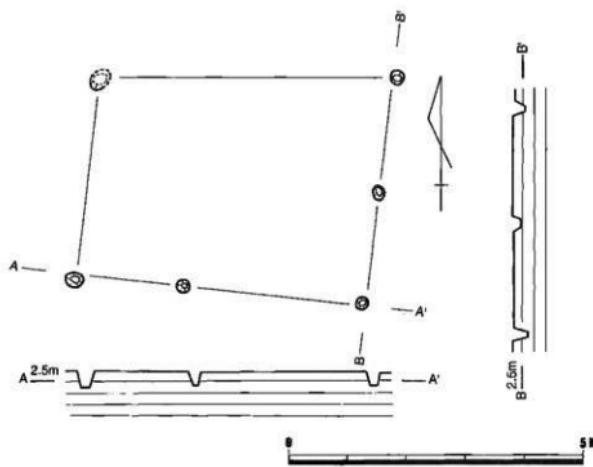




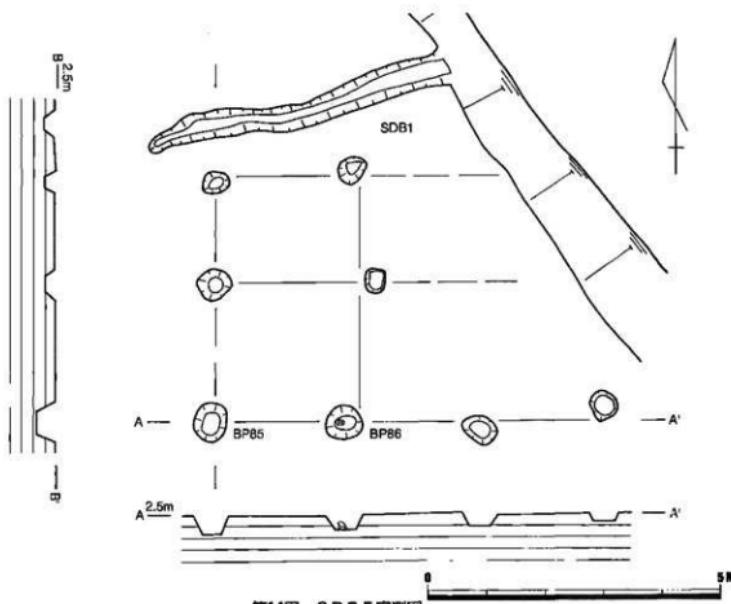
第11図 SBB 1実測図



第12図 SBB 3実測図



第13図 SBB 4実測図



第14図 SBB 5実測図

検出面の標高は約2.2mである。柱穴は約40~70cm、深さ約20~40cmを測り、全体的に柱穴は大型である。柱穴の埋土は灰褐色粘質土で、須恵器壺や壺片が出土したことから、古代の建物と考えられる。

#### 出土遺物（第15図・2~5）

(2)はB P 85出土の須恵器壺の口縁部である。淡灰色を呈し、焼成は良好である。口径14.5cmを測る。外面には自然釉がかかる。(3)~(5)はB P 86出土である。(3)は須恵器の壺である。口径12.7cm・底径7.6cm・器高4.7cmを測る。淡黄灰色を呈し、焼きは軟質である。口縁端部は黒みを帯びる。底部は平底でヘラ切後未調整である。体部は直線的に立ち上がり、丁寧なナデで仕上げられる。内面の見込みは回転ナデ痕が残る。(4)も須恵器の壺である。口径12cm・底径8cm・器高5cmを測る。黒灰色を呈し、焼きは軟質である。底部には低い高台が付き、ヘラ切後未調整である。(5)は上師器の壺である。口径25.1cmを測る。淡灰褐色を呈し、焼成は良い。体部外面上には横方向の後縦方向のハケメが施される。内面には横方向のハケメが施される。

#### S D B 1 (第14図)

S B B 5 の北側に位置する溝である。埋土は灰色粘質土でS B B 5 に伴うと考えられる。東端は調査区外だが、長さ5.3m以上・深さ20cmを測る。遺物は須恵器の壺片が一点見つかったのみである。

#### D. 土壙・柱穴類

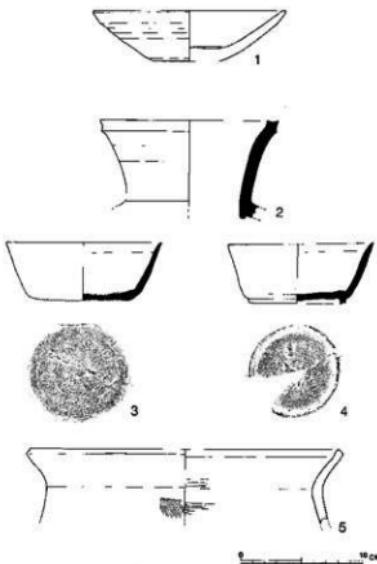
##### S K B 1 (第16図)

東西約0.95m、南北約1.4mの楕円形を呈し、深さは東側が約15m、西側が約30cmである。検出面の標高は約2.75mである。柱穴3基と切り合っており、いずれも土壤より新しいと考えられる。東側の柱穴内出土の土師器皿は他のものと比べ新しいが、他の遺物にはあまり時代幅が見られず、連続して造られたと考えられる。

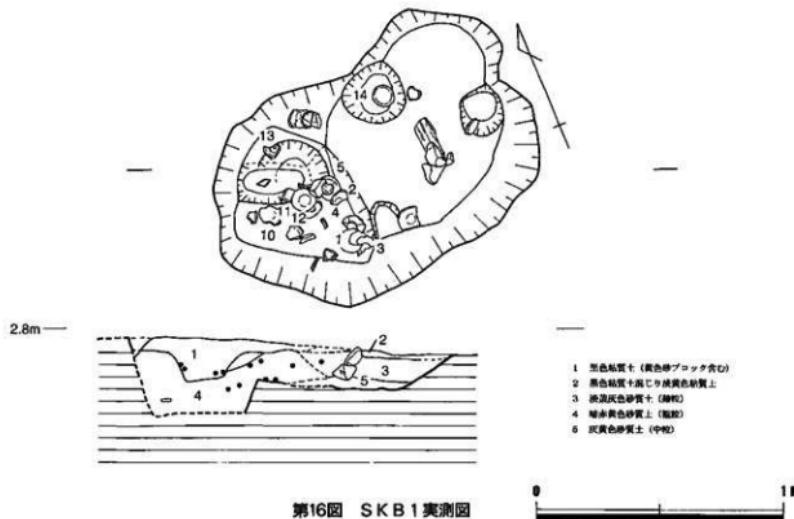
##### 出土遺物（第17図）

(1)~(6)は土壙の西側、(7)~(9)が土壙東側、(10)~(12)が西側の柱穴に伴うと考えられるもの、(10)は東側の柱穴出土である。

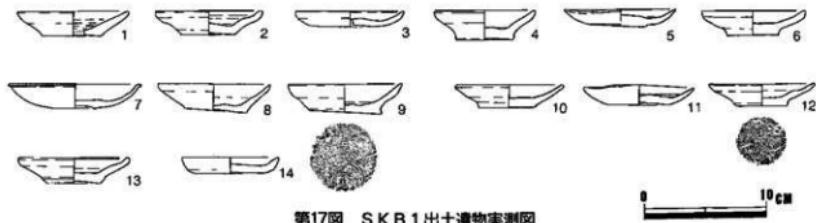
(1)は淡赤褐色の土師器皿である。口径8.9cm・底径4.8cm・器高2cmを測る。胎土は赤褐色粒を微量に含む。底部には回転糸切り痕が残る。(2)も淡赤褐色の土師器皿である。口径8.5cm・底径4.4cm・器高1.9cmを測る。胎土は赤褐色粒を微量に含む。底部には回転糸切



第15図 B 調査区掘立柱建物出土遺物実測図



第16図 SKB 1実測図

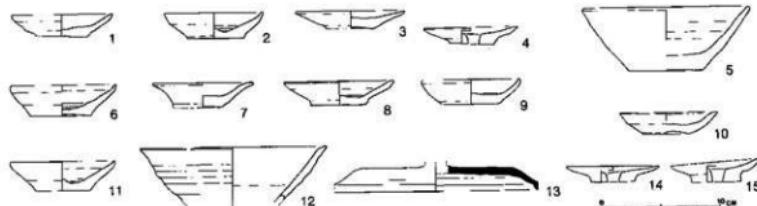


第17図 SKB 1出土遺物実測図

り痕が残り、内面見込み部はナデによりやや凹む。口縁端部は上方にむけて屈曲する。(3)は淡灰褐色の土師器皿である。口径8.7cm・底径4.6cm・器高1.25cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、器高が低く、体部と底部の境は明瞭でない。(4)は淡赤褐色の土師器皿である。口径8cm・底径4.7cm・器高2.4cmを測る。胎土は赤褐色粒を少量含む。底部は厚く、回転糸切り痕が残る。(5)は淡黄褐色の土師器皿である。口径9.1cm・底径4.75cm・器高1.3cmを測る。胎土は砂粒を少量含む。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部にかけて細く終わる。全体がひずんでおり、風化のため調整は不明瞭である。(6)は淡黄褐色を呈す土師器皿である。口径8.4cm・底径4.2cm・器高2cmを測る。胎土は赤褐色粒を多く含む。底部は厚く、回転糸切り痕が残る。口縁端部の外面には面がある。(7)は青白磁の皿である。口径10.9cm・底径2.9cm・器高2cmを測る。胎土は白色で精良、釉は淡緑灰色でガラス質である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は外反する。内面見込み部はやや盛り上がっている。(8)は淡灰褐色の土師器皿である。口径9.2cm・底径5cm・器高2.2cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。底部には回転糸切り痕が残り、内面はナデにより段がつく。(9)は淡褐灰色を呈す土師器皿である。口径9.2cm・底径5.9cm・器高2.3cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、外面はナデによる段がつく。内面は丁寧なナデが施される。(10)は淡黄褐色を呈す土師器皿である。口径8.5cm・底径4.3cm・器高1.85cmを測る。胎土は赤褐色粒を少量含む。底部には回転糸切り痕が残るが、全体的に調整は不明瞭である。(11)は淡黄褐色の上師器皿である。口径8.9cm・底径4.9cm・器高1.65cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。体部は短く外方向に立ち上がり、口縁端部にかけて細く終わる。(12)は淡黄褐色の土師器皿である。口径8.6cm・底径4.1cm・器高1.8cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。胎土は褐色粒を少量含む。(13)は淡黄褐色の上師器皿である。胎土は赤褐色粒を少量含む。口径8.8cm・底径4.3cm・器高2.1cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。口縁端部を上方へつまみ上げる。(14)は淡黄褐色の土師器皿である。胎土は褐色粒を多く含む。口径7.8cm・底径5.5cm・器高1.3cmを測る。底部には回転糸切り痕が残る。底径が大きく体部は短く立ち上がり、器高が低い。

#### 柱穴内出土遺物（第18図）

(1)はB P 12出土の上師器皿である。口径8.6cm・底径4.6cm・器高1.9cmを測る。胎土は砂粒を微量に含み、淡褐灰色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。(2)～(4)はB P 21出土である。(2)は淡灰褐色を呈す土師器の皿である。胎土は砂粒や雲母を微量に含む。口径8.6cm・底径4.8cm・器高2.2cmを測る。底部には回転糸切り痕が残り、内面見込み部は回転ナデにより凹む。



第18図 B 調査区柱穴類出土遺物実測図

口縁端部を上方へつまみ上げる。(3)は十師器の皿である。口径9.4cm・底径4.3cm・器高1.5cmを測る。胎土は金雲母を少量含み、淡灰褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。体部は細く外方へ立ち上がる。(4)は淡灰褐色を呈す上師器の皿で、底部は穿孔されている。口径8.2cm・底径3.4cm・器高1.5cmを測る。穿孔は焼成前に上部から行い、回転糸切りにより切り離している。体部は短く外方に伸びる。(5)はB P 62出土の土師器坏である。口径14cm・底径6.2cm・器高5.4cmを測る。胎土は赤褐色粒を多く含み、淡赤褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は平らに面取りされる。全体的に厚手の作りである。(6)～(9)はB P 54出土の上師器皿である。いずれも底部には回転糸切り痕が残る。(6)は赤褐色を呈し、胎土は砂粒を微量に含む。口径9cm・底径5.1cm・器高2.6cmを測る。内面見込み部は回転ナデ痕が残り、口縁端部を上方へつまみ上げている。(7)は黄褐色を呈し、胎土は赤褐色粒を多く含む。口径8.6cm・底径4.5cm・器高2.1cmを測る。底部は分厚く、体部は外反する。(8)は黄褐色を呈し、胎土は赤褐色粒を少量含む。口径9.2cm・底径4.8cm・器高2cmを測る。内面見込み部は回転ナデ痕が残り、体部は屈曲する。口縁端部はやや上方へつまみ上げている。(9)は淡黄褐色を呈し、胎土は赤褐色粒を微量に含む。口径8.4cm・底径2.1cm・器高2.1cmを測る。底部はやや分厚く、口縁端部をやや上方へつまみ上げている。(10)はB P 107出土の土師器皿である。口径8.6cm・底径4.1cm・器高1.8cmを測る。淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒を少量含む。底部には回転糸切り痕が残る。(11)～(12)はB P 71出土の十師器である。(11)は暗褐色を呈する皿である。胎土は雲母を微量に含む。口径9cm・底径4.6cm・器高2.5cmを測る。内面見込み部は回転ナデにより凹み、口縁端部を上方へつまみ上げている。(12)は坏の口縁部から体部の破片である。復元口径15.8cmを測る。胎土は赤褐色粒を微量に含み、淡黄褐色を呈す。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部の外面と内面全体は丁寧なナデが施される。体部外面には回転ナデ痕が顕著に残る。(13)は須恵器の蓋である。胎土は砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。口径17.4cmを測る。大井部にはケズリの後にナデが施され、内面は不定方向のナデが施される。ボタン状のつまみが付くと考えられる。口縁端部は下垂する。(14)～(15)はB P 109出土の底部穿孔された上師器皿である。(14)は淡黄褐色を呈し、胎土は赤褐色粒を多く含む。口径7.7cm・底径4.2cm・器高1.7cmを測る。全体の調整は不明瞭である。(15)も淡黄褐色を呈し、胎土は赤褐色粒を多く含む。口径7.8cm・底径3.6cm・器高1.35cmを測る。全体の調整は不明瞭である。

## E. 出土遺物

遺物包含層（黒色粘質土と緑灰色粘質土）からは総破片数では3,492点出土した。最も多いのは須恵器で1,520点（43%）を占める。古代の十師器や弥生土器は632点（18%）である。中世前半の土師器で褐色系のものは1,000点（29%）である。灰白色系の土師器は46点（1%）と少ない。瓦は古代のもので、67点（2%）を占める。貿易陶磁は白磁167点（5%）、青磁27点（1%）、陶器類33点（1%）である。白磁の量は青磁に対して多数を占める。

須恵器（第19図・1～15）

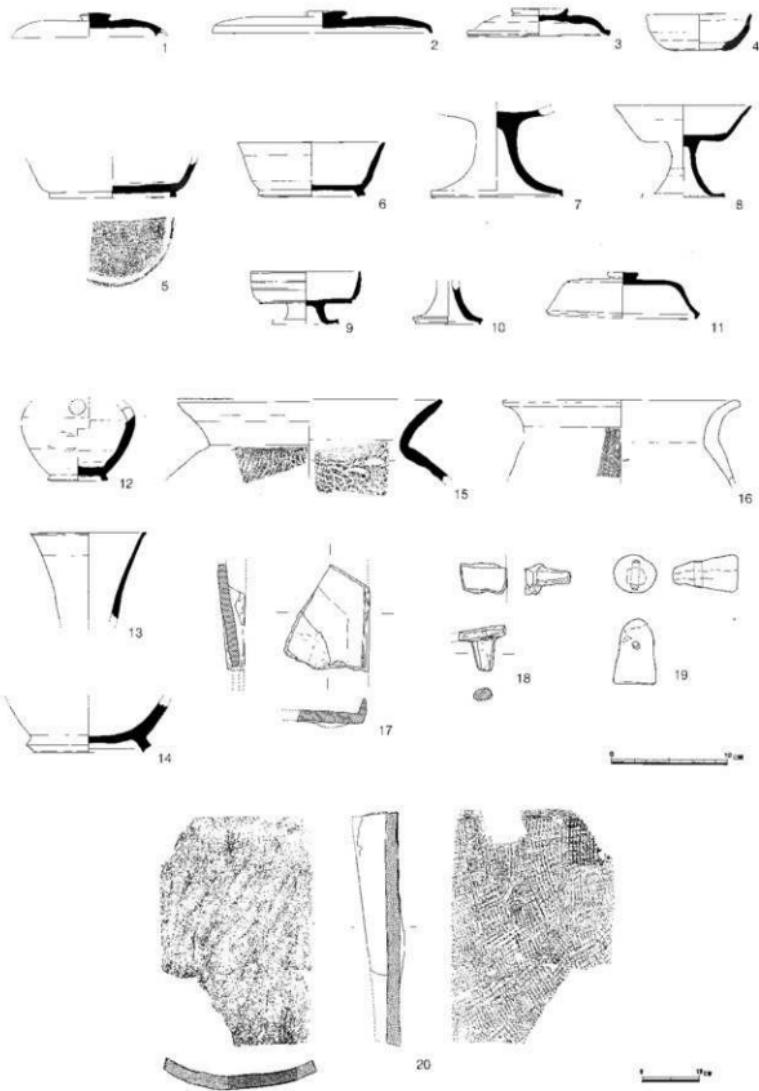
(1)～(3)は蓋である。(1)は口径13.6cmを測り、青灰色を呈す。ボタン状のつまみを有し、内面の返りはやや内側に付く。外面には自然釉がかかる。内面には不定方向のナデが施される。(2)

は口径18.9cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。焼きは軟質である。ボタン状のつまみを有し、口縁端部は下垂する。(3)は口径12.3cmを測り、淡灰色を呈す。輪状のつまみを有す。天井部はヘラ切り痕が残る。内面にはナデが施される。(4)～(6)は坏である。(4)は復元口径9cm・復元底径4.6cm・器高3.1cmを測る。淡灰色を呈す。体部は丸みを持って立上り、口縁端部はわずかにくびれて外反する。(5)は底径11cmを測る。暗灰色を呈す。底部は低い高台が付き、ヘラ切りの後ナデを施す。底部に「×」の記号がある。(6)は口径12.6cm・底径9.2cm・器高4.65cmを測る。暗青灰色を呈す。底部は太く外開きの高台が付き、ヘラ切り痕が残る。(7)～(10)は高坏である。(9)～(10)は小型のものである。(7)は底径11.4cmを測る。淡灰色を呈す。(8)は口径11.8cm・底径7.2cm・器高7.9cmを測る。淡灰色を呈す。(9)は口径9.4cm・底径5.8cm・器高4.5cmを測る。暗青灰色を呈す。垂直に近く立ち上がる环部と短い脚部をもつ。外面に沈線が2本に入る。(10)は底径5.6cmを測る。暗青灰色を呈す。(9)に比べ細く高い脚部である。(11)は短頸壺の蓋と考えられる。口径12.7cm・器高4cmを測り、暗灰色を呈す。天井部はヘラ切りの後ボタン状のつまみを付け、ナデを施す。天井部内面は不定方向のナデが施される。口縁端部はやや内側に向けて下垂している。(12)は高台の付く甕である。淡青灰色を呈し、白色粒を少量含む。体部は孔より下位はヘラケズリの後ナデ、上位はナデを施している。(13)～(14)は長頸壺である。(13)は口縁部で復元口径10cmを測る。暗灰色を呈し、砂粒を多く含む。口縁端部は外反し、内外面共にナデが施される。(13)は底部で復元底径10.8cmを測る。灰色を呈し、砂粒を少量含む。内外面に自然釉がかかる。底部はヘラ切りで太く外開きの高台が付く。(15)は甕で復元口径22.8cmを測る。暗青灰色を呈し、砂粒を多く含む。口縁部は内外面ともナデが施される。体部の外面は平行叩きと横方向のカキメ、内面は同心円の叩きである。

#### その他古代の遺物（第19図・16～20）

(16)は土師器の甕で復元口径19.8cmを測る。赤褐色を呈し、3mm大の砂粒を含む。体部の外面は縱方向のハケメ、内面は横方向のケズリである。(17)～(18)は風字硯である。(17)は陸から縁にかけての破片で淡灰色を呈する。縁の外面はケズリの後ナデを施している。陸の中央部は磨滅している。(18)は陸と脚部の破片で淡灰色を呈し、脚部には自然釉がかかる。脚部は貼り付けでケズリにより面を作っている。陸部は磨滅している。(19)は土師質の分銅で重量は70gである。淡黄褐色で砂粒を多く含む。(20)は平瓦である。胎土は3～8mm大の砂粒を少量含む。淡灰色を呈する。凸面の調整は5mm×4mmの格子の叩きである。叩き痕は一部ナデにより消えている。凹面には布目痕が一部残るが、大半斜め方向のケズリとナデを施している。全体的にひずんでいる。土師器（第20図・1～3）

(1)は皿である。口径8.4cm・底径4.7cm・器高4.7cmを測る。淡赤褐色を呈し、口縁端部は細くおわる。内外面共に磨滅しており、調整は不明瞭である。(2)は淡黄褐色を呈す皿である。口径8.7cm・底径4.3cm・器高1.75cmを測る。胎土は赤褐色粒を微量に含む。底部には回転糸切り痕が残る。(1)縁端部はやや上方へつまみ上げる。(3)は暗赤褐色を呈す皿である。口径8.8cm・底径4.7cm・器高2.2cmを測る。胎土は砂粒を微量に含む。底部には回転糸切り痕が残る。底部は厚く、内面には回転ナデ痕が残る。

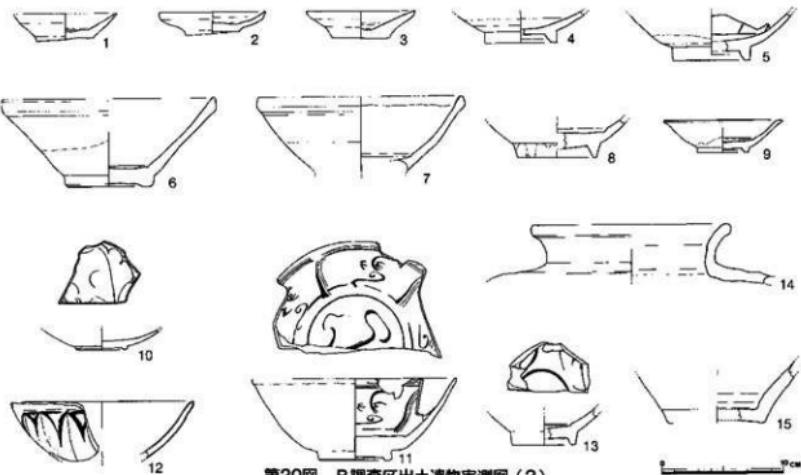


第19図 B調査区出土遺物実測図(1)

### 貿易陶磁 (第20図・4~15)

(4)は白磁碗II類の底部である。高台は内面を斜めに削っている。黄灰色の釉が内面と外面上部にかかる。露胎部との境は化粧土が施されており、赤色に発色している。内面中位には段がある。(5)も白磁碗II類の底部である。高台は内面を斜めに削っている。黄みを帯びた灰白色の釉が内面と外面上部にかかる。内面の中位に段があり、縦の白色堆線がある。(6)は白磁碗IV類である。約1/2残っており、口径17.6cm・底径7.2cm・器高7.2cmを測る。釉は灰色で貫入が見られ、体部上半部と内面にかかる。全体に黄みを帶びている。大きな玉縁口縁をもち、内面見込み部に段がある。底部には低い削りだしの高台である。(7)も白磁碗IV類の口縁部である。口径は16.6cmを測る。淡灰色で貫入のある釉が内外面共にかかるが、口縁内面にやや厚くかかる。玉縁口縁をもち、内面見込み部に段がある。(8)は白磁碗V類の底部である。底径は6.4cmである。釉は乳白色で貫入が見られる。高い高台をもち、内面見込みに段がある。(9)は白磁皿III類である。口径9.8cm・底径4.2cm・器高2.5cmを測る。胎土は灰白色である。釉調は淡緑灰色で貫入が認められる。低い高台が付き、口縁端部は外反する。内面見込みの釉を輪状に掻き取っている。(10)は青白磁の皿である。胎土は精良で釉はガラス質で淡青白色を呈す。露胎部との境は化粧土が施されており、赤色に発色している。ごく低い高台を削りだし、内面には毛彫りの文様がある。

(11)は龍泉窯系青磁碗I類である。口径16.6cm・底径6cm・器高6.7cmを測る。胎土は灰色で精良、釉は暗緑灰色である。体部内面を分割し中に飛雲文、内底見込みにキノコ状の文様を彫る。(12)は龍泉窯系青磁碗I類の体部片である。胎土は淡灰白色で精良、釉はくすんだ緑色で厚くかかる。外面にしっかりと削りだしの鎬蓮弁文をもつ。(13)は初期高麗青磁である。底



第20図 B調査区出土遺物実測図(2)

径5cmを測り、小椀と考えられる。胎土は淡灰白色である。釉は淡灰緑色で全面施釉される。内面には文様、内面見込みには段を有す。高台内面には白色耐火土の目あとが付着する。(14)は中国陶器の壺である。胎土は灰色、黒色粒、砂粒を含み、粗い。釉は体部外面にうすくかかり、暗褐色を呈する。内面は褐色である。口縁端部は玉縁状につくる。(15)は中国陶器の底部である。胎土は砂粒を多く含む。外面は明褐色、内面は暗灰褐色を呈す。半底である。

#### 4. C調査区

試掘調査の結果を受けて、E-4調査区を中心にC調査区(725m<sup>2</sup>)を設定した。調査前の状況は水田で、標高は約3.9mである。表土を重機で掘削したあと、5m四方で調査区を区切った。この区ごとに遺物包含層及び遺構を人力により調査を行った。各区ごとに取り上げた遺物は分類したあと破片数と底部個体数を数え、集計を行った。

##### A. 調査区の層位(第21図)

まず灰色の細粒砂が堆積し、遺跡の基盤が形成される。その上には淡褐色粘質土が堆積し、遺構面が形成される。安定した地盤が形成されていたと考えられ、北側に向けて高くなっている。標高3.1m～3.3mを測る。その上に古代から中世の遺物を大量に含む黒灰色粘質土(11層)が厚さ20cm～35cm程で堆積している。この遺物包含層と柱穴の埋土は分層できないため、黒灰色粘質土は生活によって隨時攪乱されながら厚く堆積したと考えられる。遺物の包含状況も古代から中世の遺物が混在して出土し、規則性や上下関係は見られなかった。このためB調査区と異なり、古代から中世の時期幅で遺構の区別ができなかった。なお、調査区南側では黒色粘質土が暗灰色粘質土によって切られており、後世に攪乱されたと考えられる。また、11層上面で液状化現象による南北方向の噴砂を確認した。長さ約7m・幅1～3cmを測り、白色細粒砂が充填していた。遺物包含層堆積後の地震によるもので、明治5年の浜田地震によるものである(註6)。

##### B. 堀立柱建物・溝

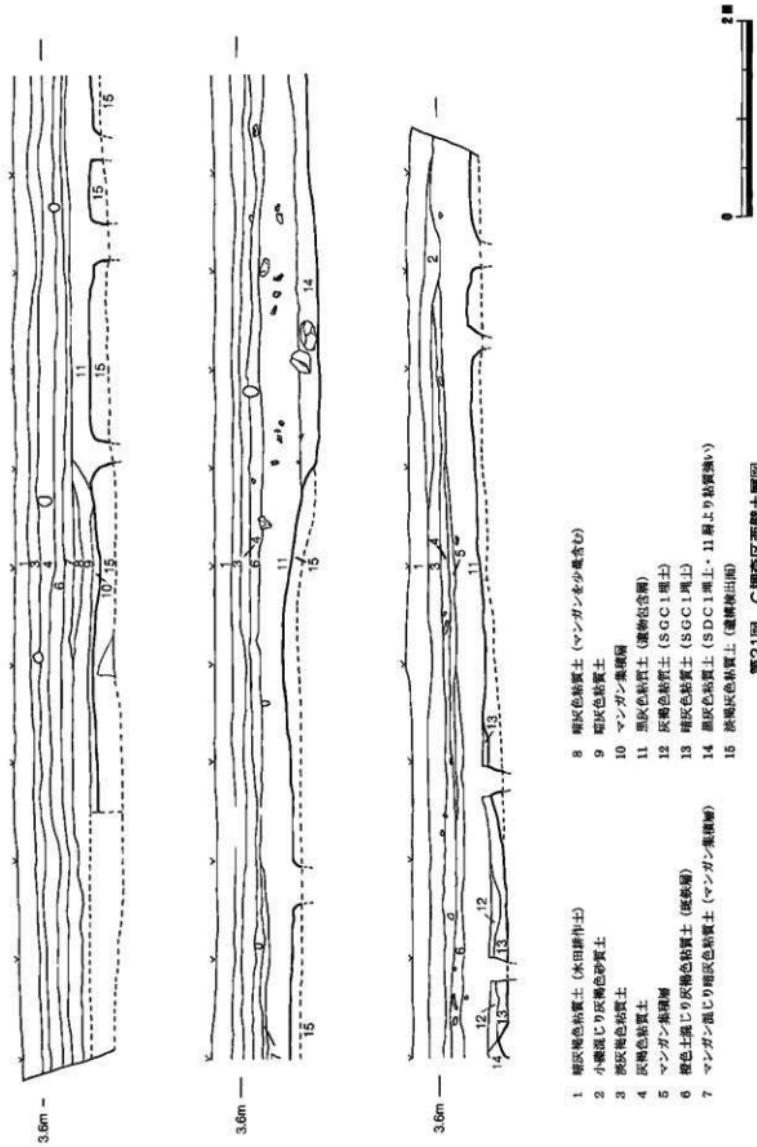
柱穴類と考えられる遺構は全部で673確認し、建物跡として13棟復元した。柱穴はS D C 1より北側は非常に多く、南側はやや少ない。また、建物の区画と考えられるごく浅い溝が6本確認されたが、伴う建物が判別できないもの多かった。

##### S B C 1(第23図)

調査区の北側に位置する。検出面の標高は約3.2mである。建物の規模は4間(9.14m)×3間(6.04m)の側柱建物で、軸方向はE-O°-Sを測る。柱穴は径約20～40cm、深さ約25cmである。なお、南西隅の柱穴はS G C 1により切られていると考えられる。

##### 出土遺物(第28図・1)

柱穴内からは土師器、底部に回転切り痕を残す須恵器皿などが出土した。(1)はC P 84出土上の土師器皿である。口径8.3cm・底径5.9cm・器高1.45cmを測る。胎土は褐色粒、砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。底部には回転糸切り痕を残す。体部は短く外方へ立ち上がる。内面見込みは



第21図 C調査区西壁土層図



第22図 C調査区遺構実測図

回転ナデにより凹む。

#### S B C 2 (第25図)

調査区の北側に位置する。S D C 1 に並行するように位置し、同時併存の可能性がある。5間(12.48m) × 2間(5.14m)、軸方向はE-3.5°-Sを測る大型の総柱建物である。検出面の標高は約3.2mである。柱穴は側面のものは径20cm前後・深さ約20~40cmと全体的に小型だが、中心の列は径60~90cm・深さ約30cm前後と深く、土壤状を呈している。

#### 出土遺物 (第28図・2~4、7~8)

柱穴内からは土師器、須恵器の破片、七鍤などが出た。②~④はC P 181出土の土師器である。②は脚付きの壺である。底径6.6cmを測る。淡黄褐色を呈す。高台は底部を回転糸切りで切り離した後にナデで接合している。体部内面には浅く回転ナデ痕が残る。③は壺である。口径13.8cm・底径6cm・器高3.75cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡赤褐色を呈す。底部がやや厚く、回転糸切り痕を残す。体部内面には浅く回転ナデ痕が残るが、口縁部は丁寧に仕上げられている。体部はやや丸みをもって立ち上がる。

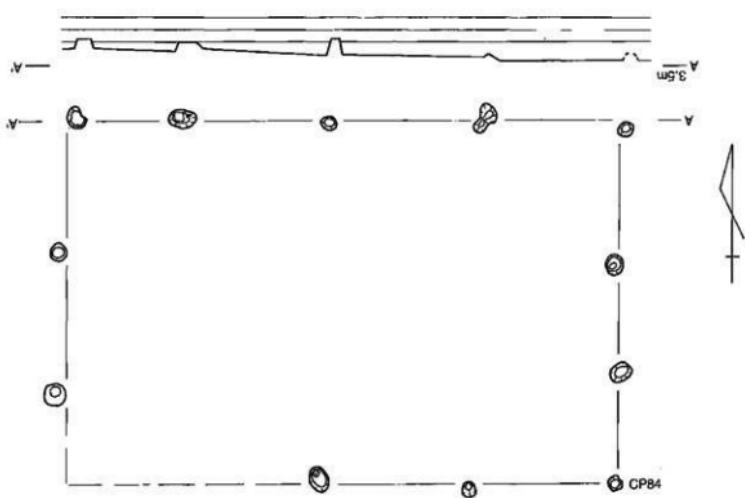
④も壺である。底径7.1cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈す。底部がやや厚く、回転糸切り痕を残す。体部はやや丸みをもって立ち上ると推定される。⑦はS K C 2出土の白磁碗IV類である。口径15.8cm・底径5.9cm・器高5.75cmを測る。胎土は淡黄褐色で気泡がある。釉は乳白色で貰入が見られる。口縁の口縁をもち、高台は低く削りだしている。内面下位には段が見られる。⑧はS K C 3出土の土師器壺である。口径19.8cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈す。体部内面には縦方向のケズリを施している。

#### S B C 3 (第24図)

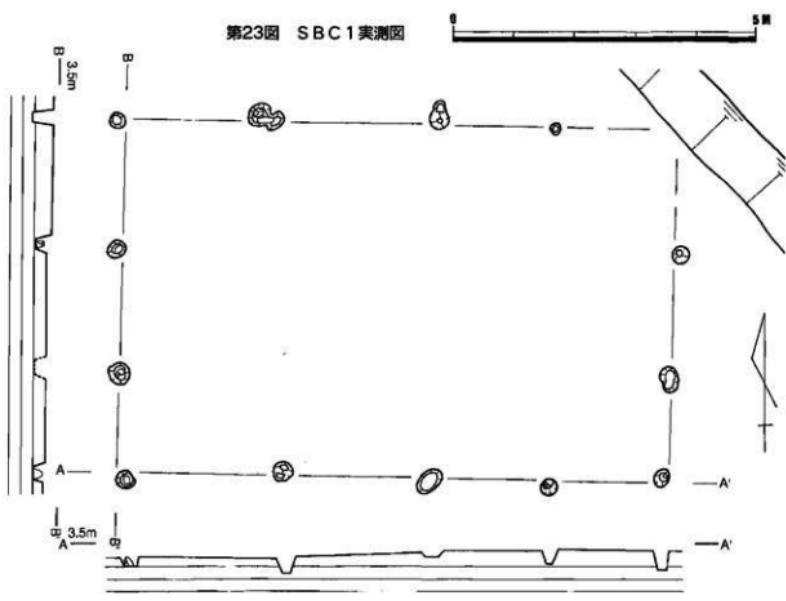
調査区の北東側に位置する。建物の規模は4間(9.1m) × 3間(5.9m)、軸方向はE-

遺構番号	桁行×梁行	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	主軸方位	pit番号(報告書掲載分)
SB C1	4×3	9.14×6.04	55.21m <sup>2</sup>	E-0°-S	
SB C2	5×2	12.48×5.14	64.25m <sup>2</sup>	E-3.5°-S	CP181;SKC2;SKC3
SB C3	4×3	9.10×5.90	53.69m <sup>2</sup>	E-3.5°-S	
SB C4	2×(1)	4.00×(2.24)	8.96m <sup>2</sup>	N-4.5°-E	
SB C5	2×(1)	4.36×(1.16)	5.06m <sup>2</sup>	E-12°-N	
SB C6	2×1	4.04×2.60	10.50m <sup>2</sup>	E 7° S	
SB C7	3×2	5.94×4.72	28.04m <sup>2</sup>	N-1° E	
SB C8	2×1	4.86×2.00	9.72m <sup>2</sup>	W-4.5°-S	
SB C9	4×2	8.08×3.84	31.03m <sup>2</sup>	W 4°-S	
SB C10	2×1	4.00×2.30	9.20m <sup>2</sup>	N-5.5°-W	
SB C11	2×2	5.48×4.04	22.14m <sup>2</sup>	N-2.5°-W	
SB C12	2×1	3.24×4.20	13.61m <sup>2</sup>	N-2.5° E	CP189
SB C13	2×1	4.60×2.00	9.20m <sup>2</sup>	W 6° N	

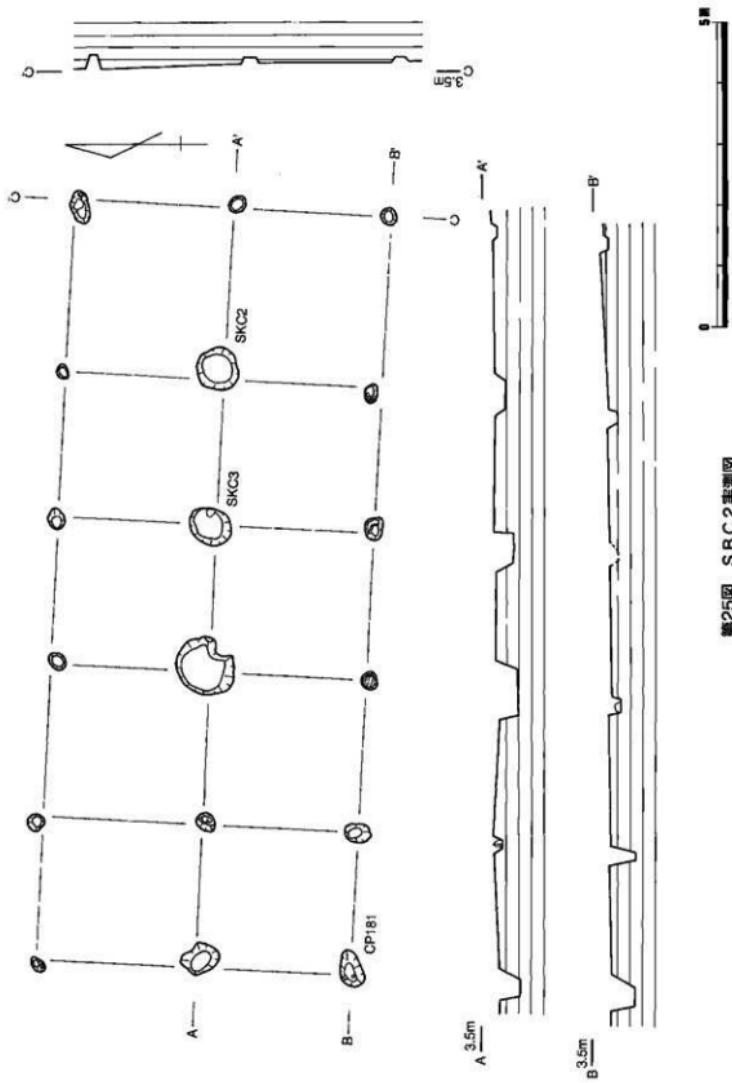
表2 C調査区掘立柱建物一覧表



第23図 SBC 1実測図

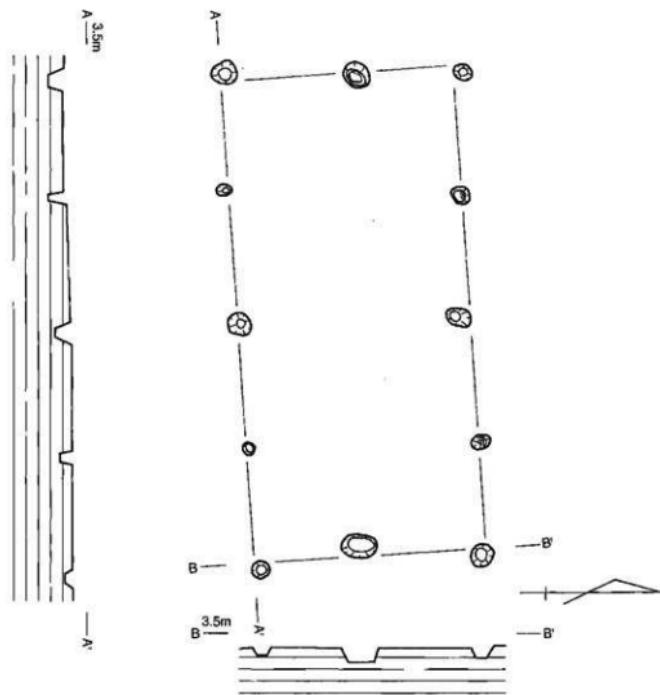


第24図 SBC 3実測図

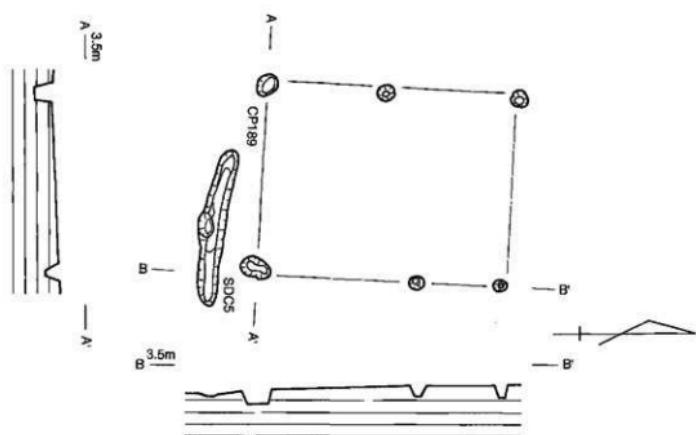


第25圖 SBC2測試圖

第26図 SBC 9実測図



第27図 SBC 12実測図



3.5° - S を測る側柱建物である。検出面の標高は約2.3mである。柱穴は約10~30cm、深さ約10~40cmで深さにはかなりばらつきがある。

#### 出土遺物（第28図・5~6）

柱穴内からは土師器、須恵器の破片が出土した。(5)~(6)はC P 98出土の土師器である。(5)は皿である。口径7.5cm・底径6cm・器高1cmを測る。胎土は褐色粒を微量に含み、淡黄褐色を呈す。底部には回転糸切り痕を残す。体部は短く立ち上がり、内面見込みは回転ナデにより凹む。(6)は壺である。復元口径12cmを測る。胎土は褐色粒を少量含み、赤みを帯びた淡黄褐色を呈す。体部は上位でやや屈折し、口縁端部はやや上方へつまみ上げる。

#### S B C 4 (第29図)

調査区の北西側に位置する。建物の規模は2間以上(4m) × 1間以上(2.24m)、軸方向はN-4.5° - Eを測る総柱建物と考えられる。検出面の標高は約3.1~3.3mである。北側は浅いX画溝状のS D C 4がある。柱穴は約20cm、深さ約20~30cmである。南側はS G C 1により切られた可能性がある。柱穴内からは土師器の破片が出土した。

#### S D C 4 (第29図)

S B C 4 の北側に位置する溝である。長さ3.4m以上、深さ13.5cmである。途中から北方向へ分岐しており、建物の区画溝の可能性がある。遺物は土師器の破片が見つかった。

#### S B C 5 (第29図)

調査区の北側に位置する。2間(4.36m) × 1間以上(1.16m)の総柱建物の可能性があるが、大半は調査区外になる。軸方向はE-12° - Nを測る。検出面の標高は約3.5mである。柱穴は径約30cm前後、深さ約10~20cmと全体的に柱穴は小型である。柱穴内からは土師器の細片が出土した。

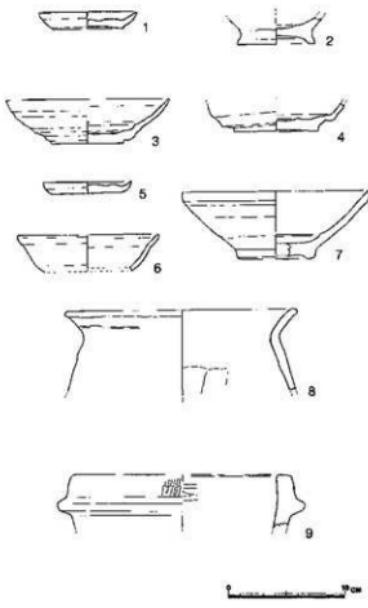
#### S B C 6 (第29図)

調査区の北東側に位置する小型の掘立柱建物である。規模は2間(4.04m) × 1間(2.6m)、軸方向はE-7° - Sを測る。検出面の標高は約3.49mである。柱穴は径約20cm、深さ約20cmを測る。

#### S B C 7 (第22図)

調査区の東側に位置する。建物の規模は3間(5.94m) × 2間(4.72m)、軸方向はN-1° - Eを測る中抜け側柱建物である。

S B C 8 と同時期併存の可能性がある。検出面の標高は約3.4mである。柱穴は約20cm、深さ約6~25cmと小型のものが多い。柱穴内



第28図 C調査区掘立柱建物出土遺物実測図

からは土師器の細片が出土した。

#### S B C 8 (第22図)

S B C 7 の南側に位置する。建物の規模は 2 間 (4.86m) × 1 間 (2 m)、軸方向は W - 4.5° - S を測る総柱建物である。検出面の標高は約3.3mである。柱穴は約15~20cm、深さ約6~30cmと小型のものが多い。柱穴内からは土師器、須恵器の破片が出土した。

#### S B C 9 (第26図)

S B C 7 + S B C 11 と重複する。建物の規模は 4 間 (8.08m) × 2 間 (3.84m)、軸方向は W - 4° - S を測る側柱建物である。検出面の標高は約3.3mである。柱穴は約20~40cm、深さ約15~30cmを測る。柱穴内からは土師器、須恵器の細片が出土した。

#### S B C 10 (第22図)

調査区の南側中央部に位置する。建物の規模は 2 間 (4 m) × 1 間 (2.3m)、軸方向は N - 5.5° - W を測る側柱建物である。検出面の標高は約3.3mで、柱穴は径約20~30cmである。柱穴内からは土師器、須恵器の細片が出土した。

#### S B C 11 (第22図)

調査区の北東側に位置する。建物の規模は 2 間 (5.48m) × 2 間 (4.04m)、軸方向は N - 2.5° - W を測る総柱建物である。検出面の標高は約3.1mである。柱穴は約20~50cm、深さ約10~30cmを測る。柱穴内からは土師器、須恵器の細片が出土した。

#### S B C 12 (第27図)

調査区の北東側に位置する。建物の規模は 2 間 (3.24m) × 1 間 (4.2m)、軸方向は N - 2.5° - E を測る側柱建物である。検出面の標高は約3.1mである。柱穴は径約20~30cm、深さ約20~30cmを測る。北西側には浅い区画溝と考えられる S D C 12 がある。

#### 出土遺物 (第28図・9)

(9)は C P 189出土の滑石製鍋である。口徑16cmを測る。断面台形の頸を削りだしている。口縁部の外面は縦及び横方向へ削り、内面は横方向へ削っている。

#### S D C 5 (第27図)

S B C 12 の南側に位置する溝である。長さ2.6m・深さ7.7cmを測る。

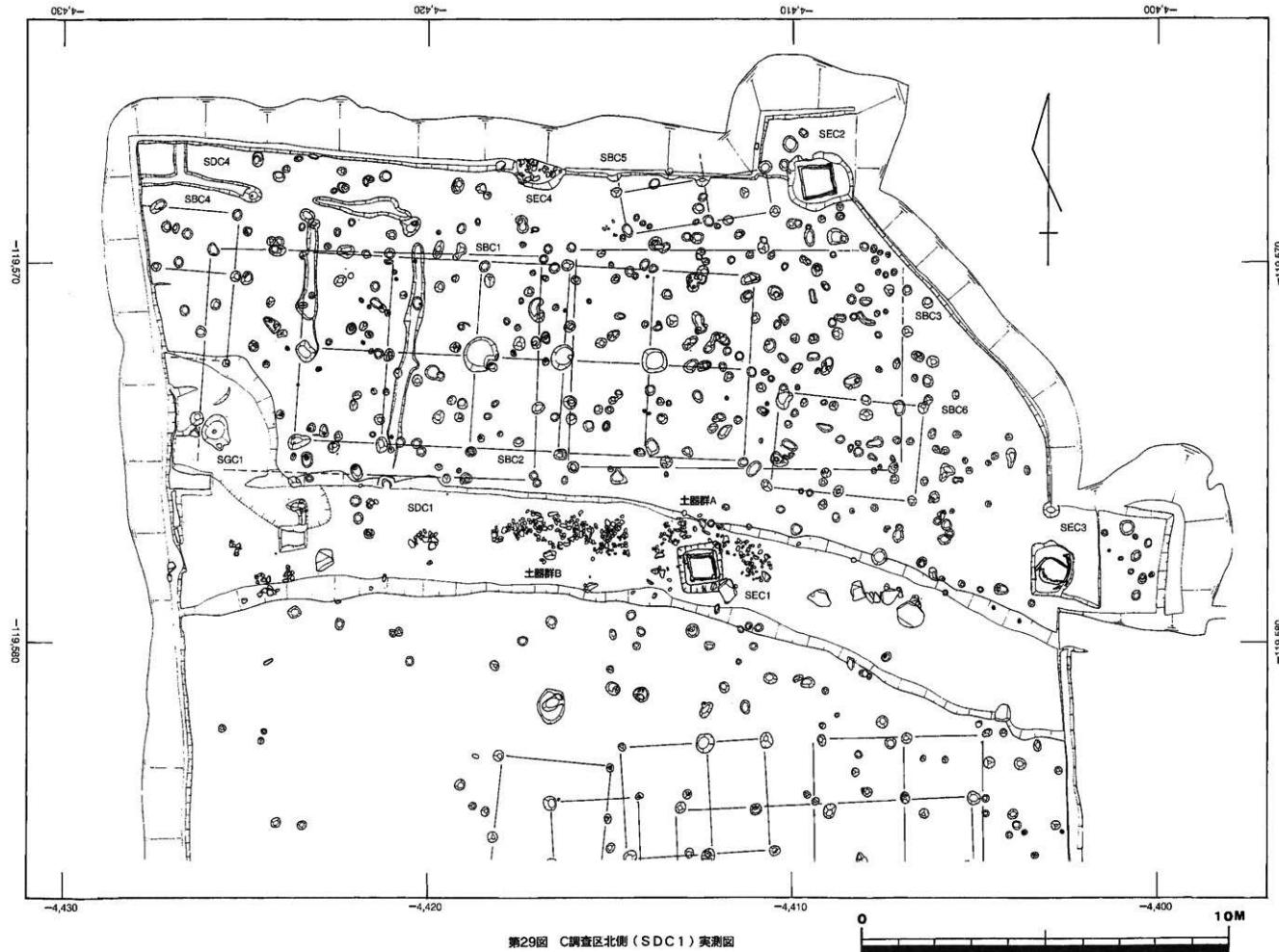
#### S B C 13 (第22図)

調査区の南側に位置する。建物の規模は 2 間 (4.6m) × 1 間 (2 m)、軸方向は W - 6° - N を測る側柱建物である。検出面の標高は約3.3mである。柱穴は約20cmを測る。柱穴内からは土師器の細片が出土した。

### C. 溝・池状遺構

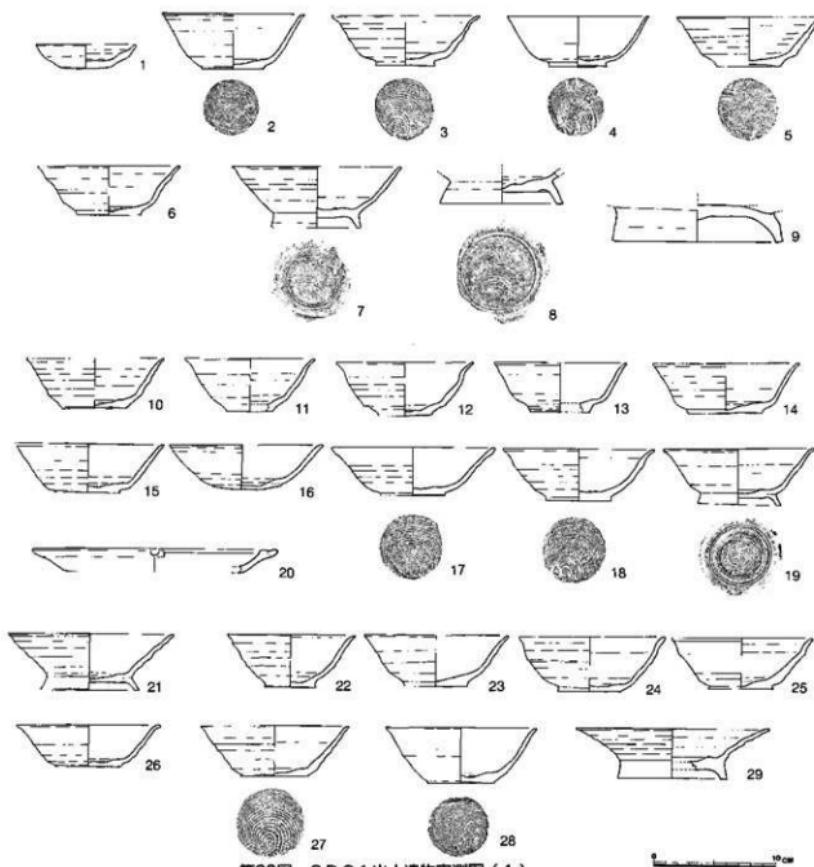
#### S D C 1 (第29図)

調査区中央に東西方向に検出された溝である。幅約3m・深さ約50cmである。床面は西側に向けて深くなつておらず、調査区の西側と東側では約20cmの比高差がある。埋土は他の柱穴と同様に黒色粘質土だが、やや粘性が強い。砂帶は認められず強い水流はほとんど流れていなかつたと推定される。試掘調査で東側に位置する F - 4 調査区では確認できなかつたが、試掘調査



の状況から水害により搅乱されたとも考えられるが、もとは下府川に接続していた可能性もある。この溝より北は柱穴が密集し、南はやや分布が粗になることから集落内の大きな区画として機能していたと考えられる。なお、溝の東半分には30~70cm大の大きな石があるのが目立つが、いずれも溝が半分以上埋没してからのものである。おそらく溝が機能を停止し、浅い凹地になってしまった状態で投棄されたと考えられる。

遺物は古代から中世の遺物が混在して多量に出土したが、後述する中世前半の灰白色を呈する土師器は投棄されたような状態で大量にまとまって見つかった。これらは東側の土器群Aと西側の土器群Bに分けられる。いずれも溝の中位で標高は約3.1mを測る。土器群はいずれも



第30図 SDC 1出土遺物実測図(1)

溝の北側で南にやや傾斜した状態で堆積していたことから、溝の北側から投棄したと考えられる。なお、土器群AはSEC1に一部切られており、土器群Bは完形に復元できる個体が多かった。

#### 出土遺物（第30～31図）

遺物は古代から中世の遺物が破片数で土師器2,678点、須恵器2,249点余り見つかった。

##### 土師器（第30図）

土師器は色調と器形で明確に区分できる。灰白色を呈すもの2,621点、褐色を呈すもの57点と圧倒的に灰白色の上師器が多い。灰白色の土師器の器種は壺（第30図・1など）、高台付の壺（第30図・7など）、足高高台の皿（第30図・9など）、皿（第30図・20）がある。器種が区別できる底部破片では壺878点、高台の付く壺212点、足高高台の皿2点、皿1点となり、壺と高台付の壺が主流を占めている。土器群Aと土器群Bの土器に大きな差は見られず、同期間内の廃棄と考えられる。(1)～(9)は上器群A、(10)～(21)は上器群B、(22)～(29)は土器群Bの周辺から見つかったものである。

(1)は淡黄褐色を呈す皿である。口径8.1cm・底径4.2cm・器高2cmを測る。胎土は赤褐色粒を多く含む。全体の調整は不明瞭である。(2)は灰白色を呈す壺である。口径11.6cm・底径5cm・器高4.5cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面はやや浅い回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(3)は灰白色を呈す壺である。口径11.9cm・底径4.8cm・器高4.1cmを測る。胎土は砂粒を多く含みやや粗い。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。(4)はやや赤みを帯びた淡黄褐色を呈す壺である。口径11.5cm・底径4.7cm・器高4.15cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕と板状压痕が残る。外面は浅い回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。(5)はやや赤みを帯びた灰白色を呈す壺である。口径11.6cm・底径5.1cm・器高4.05cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕と板状压痕が残る。外面は回転ナデ、内面はやや丁寧なナデが施される。(6)は淡灰色を呈す壺である。口径11.6cm・底径5.2cm・器高4cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。(7)は灰白色を呈す高台付壺である。口径13.7cm・底径7.4cm・器高5cmを測る。口縁端部を外反させ、外面は浅い回転ナデ、口縁周開と内面は丁寧なナデが施される。底部は回転糸切りの後、ナデにより高台を接合する。(8)は灰白色を呈す高台付壺の脚部である。底径10cmを測る。内面底部は回転ナデが施される。底部は回転糸切りの後、ナデにより高台を接合する。(9)は暗灰褐色を呈し、足高高台皿の脚部と考えられる。底径13.9cmを測り、焼成はやや不良である。高台内面には丁寧なナデが施される。(10)は灰白色を呈す壺である。口径11.1cm・底径5.2cm・器高4.1cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、口縁端部周辺と内面は丁寧なナデが施される。(11)は灰白色を呈す壺である。口径10.6cm・底径3.8cm・器高4.3cmを測る。胎土は褐色粒を多く含む。底径が他に比べやや小さい。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。(12)は灰白色を呈す壺である。口径11.2cm・底径4.2cm・器高4.4cmを測る。胎土は砂粒を微量に含む。口縁端部をやや外反させ、

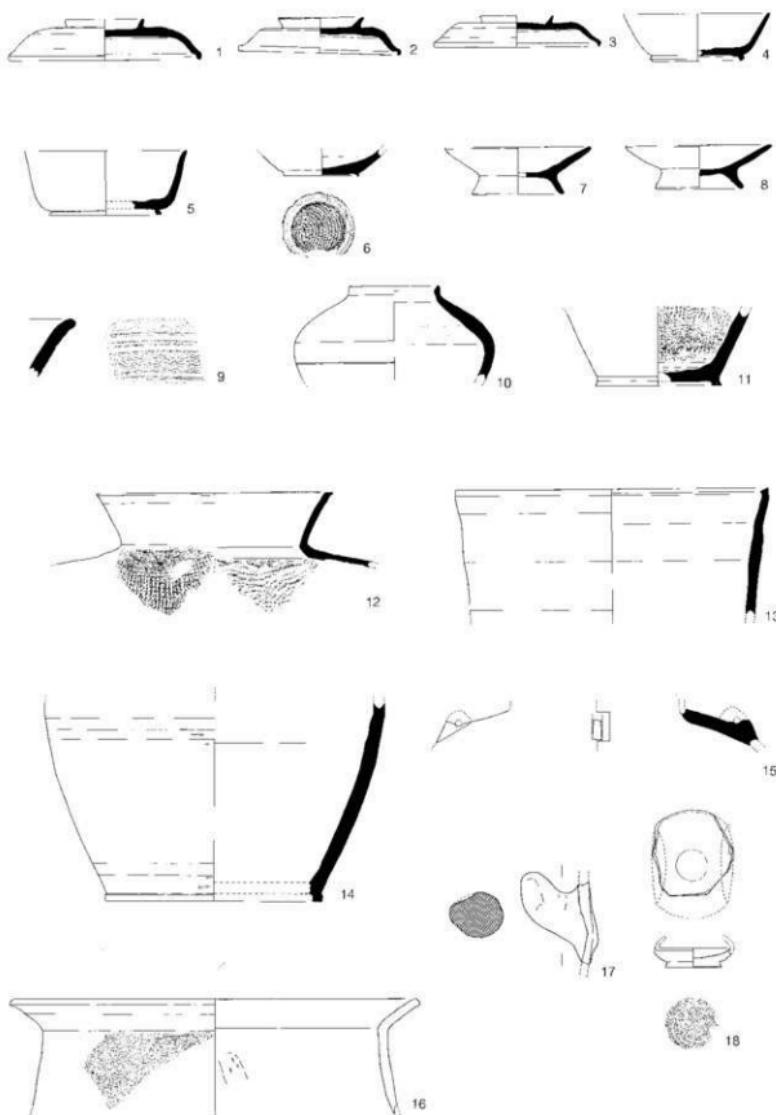
底部には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(13)は灰白色を呈す坏である。口径10.8cm・底径4.9cm・器高4.05cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部はやや厚く、回転糸切り痕が残る。内外面共にやや丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(14)は灰白色を呈す坏である。口径11.8cm・底径6cm・器高4.1cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(15)は灰白色を呈す坏である。口径12.3cm・底径5.3cm・器高4cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(16)は灰白色を呈す坏である。口径12.55cm・底径4.65cm・器高3.65cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。底部中央は回転糸切り後、内側から粘土を充填している。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。内面見込みには回転ナデ痕が残る。(17)は淡褐灰色を呈す坏である。口径13.4cm・底径5.3cm・器高3.9cmを測る。胎土は赤褐色粒を微量に含む。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。口縁端部はやや厚く仕上がる。外面は回転ナデ、口縁周辺と内面には丁寧なナデが施される。(18)は淡褐灰色を呈す坏である。内面は赤みが強い。口径12.4cm・底径5.4cm・器高4.25cmを測る。胎土は砂粒を少數含む。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。口縁端部は煤状のものが付着し黒くなる。外面は回転ナデ、口縁周辺と内面には丁寧なナデが施される。(19)は灰白色を呈す高台付坏である。口径12.5cm・底径6.8cm・器高4.6cmを測る。口縁端部を外反させ、内外面共に丁寧なナデが施される。底部は回転糸切りの後、ナデにより高台を接合している。(20)は口縁端部を凹ませた皿と考えられる。復元口径22.7cmを測る。口縁端部を外反させて厚く仕上げている。確認例はこれ一点のみである。(21)は灰白色を呈す高台付坏である。口径13.6cm・底径8cm・器高4.6cmを測る。口縁端部を外反させ、外面は回転ナデ、口縁周辺と内面には丁寧なナデが施される。底部は高台を接合するためナデにより仕上げている。(22)は灰白色を呈す坏である。口径10.6cm・底径4.2cm・器高4.3cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、口縁周辺と内面には丁寧なナデが施される。底径がやや小さく、体部の立上がりがきつい。(23)は灰白色を呈す坏である。口径11.7cm・底径5.2cm・器高4.15cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。(24)は灰白色を呈す坏である。口径12cm・底径5.2cm・器高4.4cmを測る。口径は卵形でひずんでいる。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。口縁端部は厚く、体部は丸みを持って立ち上がる。(25)は灰白色を呈す坏である。口径11.4cm・底径5.2cm・器高4.1cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、内面は丁寧なナデが施される。器壁は全体的に厚く、体部上半部の屈曲がきつい。(26)は淡褐灰色を呈す坏である。口径11.8cm・底径5.2cm・器高3.3cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、口縁端部と内面は丁寧なナデが施される。器壁は全体的に薄く、器高は低い。初は淡灰色を呈す坏である。口径12.2cm・底径5.6cm・器高4.15cmを測る。口縁端部を外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面は回転ナデ、口縁端部と内面は丁寧なナデが施される。内面見込み

部は回転ナデにより凹む。(2)は赤みを帯びた灰白色を呈す坏である。口径12.2cm・底径5.4cm・器高4.5cmを測る。口縁端部をやや外反させ、底部には回転糸切り痕が残る。外面下位は回転ナデ、外面上半部と内面は丁寧なナデが施される。内面見込み部は回転ナデにより凹む。(3)は淡灰色を呈す高台付坏である。口径15.8cm・底径9cm・器高4.1cmを測る。口縁端部をやや外反させ、外面は回転ナデ、内面はやや丁寧な回転ナデが施される。底部は高台を接合するためナデにより仕上げている。体部は器壁が薄く大きく開く。高台は太くてしっかりしている。

#### 須恵器・その他の遺物（第31図）

須恵器はの器種は蓋、坏、甕の胴部片が目立つ。須恵器2,249点余りのうち、蓋309点、坏409点、甕649点である。甕は外面平行叩き、内面同心叩きのものが圧倒的に多い。灰白色の土師器に平行する中世のものは少なく、ほとんどが古代の須恵器である。

(1)～(3)は須恵器の蓋である。(1)は口径15.8cm・器高3.4cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡灰色を呈す。天井部はヘラ切り後に短い輪状のつまみを付けている。端部は屈曲し、丸く收まる。(2)は口径13.6cm・器高3cmを測る。胎土は黒色粒を少量含み、淡灰色を呈す。天井部はヘラ切り後に不定方向のナデを施す。外反し、口径に対して大きめの輪状のつまみを付けている。天井部内面には不定方向のナデが施される。端部は屈曲し、下垂する。(3)は口径13.8cm・器高2.6cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、暗灰色を呈す。やや焼きが悪い。天井部はヘラ切り後に輪状のつまみをナデにより接合している。天井部内面には不定方向のナデが施される。端部は軽く屈曲し、下垂する。(4)～(6)は須恵器の坏である。(4)は口径12.3cm・底径8.1cm・器高3cmを測り、灰色を呈す。底部はヘラ切り後に外開きに高台を付ける。体部は外方に開く。(5)は口径13.6cm・底径9.4cm・器高5.4cmを測る。胎土は褐色粒を多く含み、淡灰色を呈す。底部はヘラ切り後に、端よりやや内側に外開きの高台を付ける。口縁端部はやや反り、全体に深い器形である。(6)は底径6.2cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。底部は回転糸切り後に、底部端をナデでごく低く高台状に尖らせている。内面には丁寧なナデが施される。(7)～(8)は須恵器の脚付皿である。(7)は口径11.9cm・底径7.4cm・器高3.95cmを測り、淡灰色を呈す。胎土は砂粒を微量に含み、焼きは軟質である。底部は回転糸切り後に外開きの高い高台を付ける。体部は外方に開く。(8)は口径12.1cm・底径7cm・器高3.65cmを測り、淡褐灰色を呈す。底部は回転糸切り後に外開きの高い高台を付ける。体部は外方に開く。(9)は須恵器甕の口縁部破片である。暗灰白色を呈す。外面は2本の凹線の下に波状文、凹線2本を施している。内面は丁寧なナデが施される。(10)は須恵器の短頸壺である。口径7.3cm・最大胴部径16.8cmを測る。胎土は褐色粒を少量含み、暗灰色を呈す。外面には自然釉がかかる。体部中位に沈線を1本施す。(11)は須恵器の壺底部である。底径10.5cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈す。外面は褐色味を帯びる。内面は平行叩きの後、横方向のナデを施している。底部はヘラ切りの後ナデしており、低い高台が付く。(12)は須恵器の甕口縁部である。口径19.8cmを測る。胎土は砂粒を微量に含む。外面は暗青灰色、体部内面は紫灰色を呈す。焼成が良く、硬質である。体部外面は3mm×2mmの格子叩き、内面は同心円叩きである。(13)は須恵器の鉢の口縁部片である。復元口径26.2cmを測る。外面は暗灰色、内面は黒灰色を呈す。外面には自然釉がかかる。体部は



第31図 SDC 1出土遺物実測図(2)

直線的に立上り、口縁端部内面にかえりを造り出す。内面の体部下位には一部指頭状の圧痕が残る。(14)は須恵器の大型壺の底部片である。復底径18.1cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。淡灰色を呈し、外面に一部自然釉がかかる。体部はやや丸みを持ちながら立上り、低い高台が付く。体部外面は横方向のケズリの後ナデを施している。体部内面は横方向ナデが施される。(15)は須恵器の把手付短頸壺の破片である。復元口径14.8cmを測る。胎土は黒色、白色粒を少量含む。灰色を呈し、外面に一部緑灰色の自然釉がかかる。把手は上部が欠損しているが、2対で4ヶ所あったと考えられる。(16)は上師器の壺の口縁部破片である。復元口径33.6cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡褐色を呈す。体部外面は縱方向と横方向のハケメ、口縁内面は横方向のハケメ、体部内面は下から上方向のケズリが施される。(17)は土師質の甕あるいは甌の把手部片である。胎土は砂粒を多く含み、淡褐色を呈す。把手部の先端に黒斑が付く。把手部の先端は指頭圧により若干角張る。(18)は縄釉陶器の耳皿である。釉は鉛色で、胎土は淡灰色を呈し須恵質である。底部は回転糸切り痕が残り、露胎である。洛北産と考えられる。

#### S G C 1 (第29図)

調査区北西隅に位置する。長軸5.5m以上、短軸約3mの細長い楕円形を呈し、深さは約20cmである。埋土は2層に分かれ、上から灰褐色粘質土、暗灰色粘質土と堆積している。後述のS D C 1を切っており、形態から池状の遺構と考えられる。遺物は古代から中世の遺物が混在して出土した。

#### 出土遺物 (第32図・1~6)

(1)~(3)は須恵器の壺である。(1)は口径14.3cm・底径9.3cm・器高4.5cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、暗青灰色を呈す。底部は糸切り後に細くてやや高い高台を付ける。(2)は口縁13.8cm・底径10cm・器高4cmを測る。淡灰色を呈す。底部はヘラ切り後にやや幅広く低い高台を付けている。(3)は口径13.5cm・底径9.2cm・器高5.1cmを測る。暗灰色を呈し、焼成が良く硬質である。底部はヘラ切り後に、丸みをもつ底部の端のやや内側に高台を付けている。(4)は縄釉陶器である。底径6.8cmを測る。胎土は淡灰白色である。土師質で、断面はサンドイッチ状に黒くなる。光沢のある淡緑色の釉で全面施釉される。内外面共にミガキで調整されるが、内面の方がやや粗いミガキである。内面見込み部には段がある。防長産のものと考えられる。(5)は単弁8葉蓮華文軒丸瓦の瓦当部である。調査で出土した瓦当の分かる軒瓦はこれのみである。胎土は砂粒を多く含む。外面は暗青灰色だが、断面は互層状に褐色を呈す。下府廐寺跡の軒丸ⅠF類である(註7)。(6)は灰白色を呈す皿底部の破片である、底径5.1cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。底部は柱状で回転糸切り痕が残る。体部は大きく外側へ開くと考えられる。

#### D. 土壙・柱穴類・井戸跡

柱穴より平面の大きい遺構を土壙としたが、中には柱穴として機能したと考えられるものも存在している。

#### S K C 1 (第29図)

調査区南端中央に位置する。長径3.8m以上・短径1.7m・深さ約0.36mの隅丸方形の土壙である。埋土は下層から暗灰色粘質土、上層は炭粒が混じる褐色粘質土である。遺物は土師器、

須恵器の細片が多く出土した。

#### 出土遺物（第32図・7）

(7)は土師器の皿で口径9.2cm・底径4.5cm・器高1.9cmを測る。淡褐灰色を呈し、底部には回転糸切り痕が残る。

#### S K C 6 (第29図)

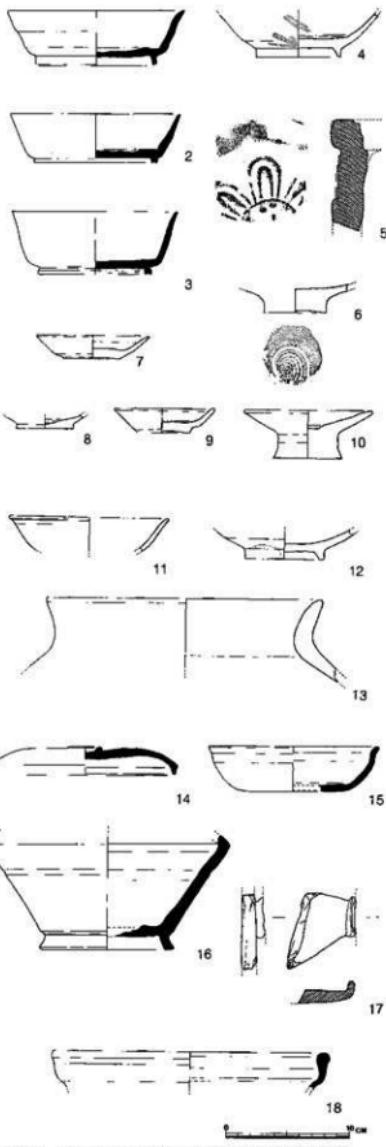
調査区北東隅に位置する。南北方向1.5m以上・東西方向2.7m・深さ約4cmの円形のごく浅い土壤である。埋土は黒色粘質土で上層と区別がつかず、浅い土器溜りのようなものとも考えられる。遺物は須恵器の破片が多く出土した。

#### 出土遺物（第32図・14～18）

(8)は須恵器の蓋で口径14.6cm・器高2.3cmを測る。胎土は砂粒を微量に含み、暗灰色を呈す。天井部はケズリの後にナデが施され、径の小さく低い輪状つまみがつく。天井部内面には不定方向のナデが施される。(9)唇部は下方へ下垂する。(10)は須恵器の坏で口径13.6cm・底径6.8cm・器高3.7cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、焼きが悪いために灰色を呈す。底部はヘラキリである。(11)縁部は屈曲する。(12)は須恵器の長頸壺の下半部で底径10.9cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、外面は暗紫灰色、内面は淡灰色を呈す。底部はヘラキリの後に太くて外開きのを付ける。内面には回転ナデ痕が残る。(13)は風字硯の破片である。胎土は砂粒を微量に含み、焼きが軟質で灰白色を呈す。縁の部分は外方に反る。(14)は須恵器の鉢の口縁部で復元口径22.6cmを測る。胎土は精良で暗灰色を呈す。(15)縁は玉縁状に丸く作り、体部下で大きく屈折しているようである。

#### 柱穴類出土遺物（第32図・8～13）

(8)～(10)はC P 159出土の土師器である。(8)は皿で底径4.6cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈す。底部は薄く、回転糸



第32図 SGC 1 · SK · 柱穴類出土遺物実測図

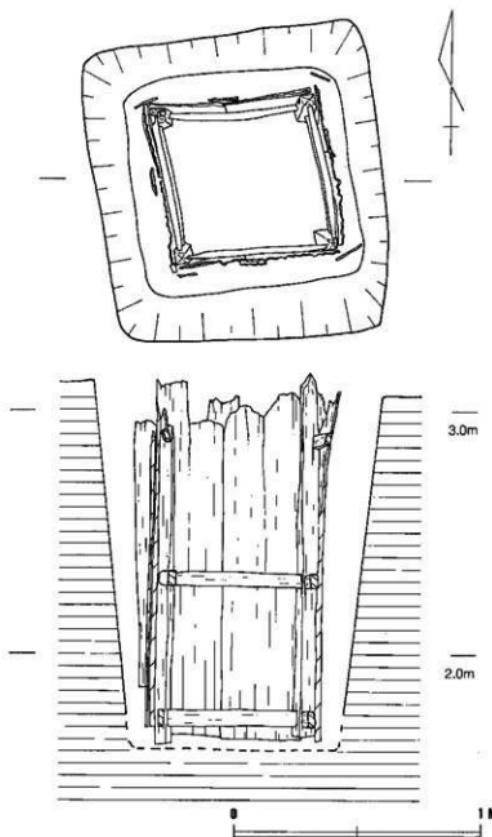
切り痕が残る。内面には回転ナデ痕が残る。(9)はIIIで口径8.8cm・底径4.4cm・器高2cmを測る。淡灰褐色を呈し、底部には回転系切り痕が残る。体部はやや上方へ立ち上がる。(10)は柱状高台のIIIで口径10.5cm・底径5.6cm・器高3.9cmを測る。淡灰褐色を呈し、磨滅のため調整は不明瞭である。(11)～(12)はC P 185出土である。(11)は緑釉陶器で口径12.7cmを測る。胎土は灰色で硬質である。淡緑色の釉が全面にかかる。口縁端部は外反する。(12)は白磁碗II類で底径6.5cmを測る。胎土白色で灰白色の釉が体部外面と内面にかかる。高台は内側を斜めに削り出している。(13)は土師器の壺で口径22.4cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡褐灰色を呈す。全体に風化しているため調整は不明瞭である。

#### S E C 1 (第33図)

S D C 1 と上器群Aを切つて造られた方形縦板組隅柱横桿型井戸である。東西辺約1m南北辺約1.2m・深さ約1.5mを測る長方形堀形の中心に1辺約0.7mの方形の井側を据える。涌水層である暗灰色砂質土面に底部を水平にした隅柱を立て、横桿を3段組み、各辺に2枚の大きな縦板を立て、縦目にさらに小さい縦板を立てている。堀形は地山ブロックの混じる黒色粘質土で埋めている。検出状況では井側内は自然石がぎっしり詰めて埋められていた。堀形と埋上からは土器群Aからの混入と考えられる土師器や須恵器と白磁が見つかった。なお、堀形の南東隅には約50cm角の角石が置かれていたが、堀形の上に乗っており井戸跡より後のものと考えられる。

#### S E C 2 (第34図)

調査区北東側に位置する方形縦板組横桿型井戸である。東西辺約1.3～1.5m・南北辺約1.5m・深さ約1.25mの堀



第33図 S E C 1 実測図

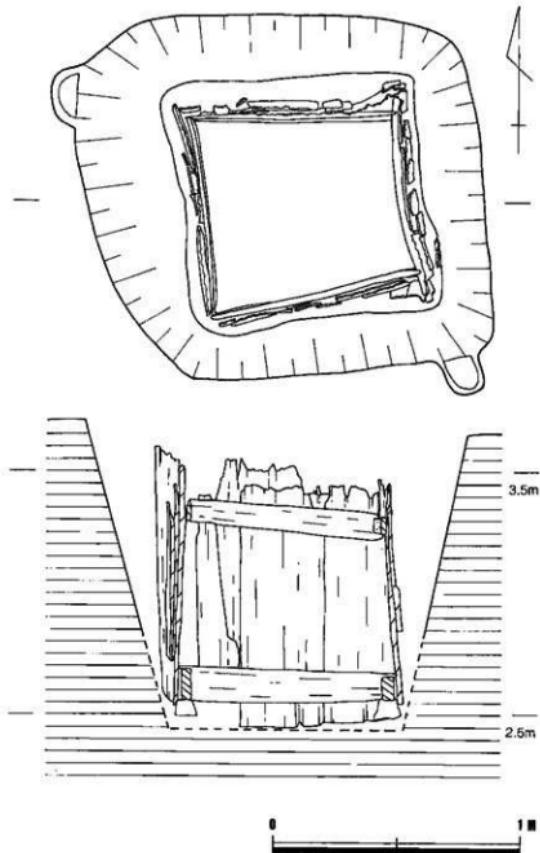
形の中央に1辺約0.8mの方形の井側を据える。涌水層である灰色砂層面に約7cm大の自然石を敷き詰め、井側を組んでいる。自然石は床面の支えと浄水のためと考えられる。石の上面で南北方向に凹柄、東西方向に凹柄の棧を組み、縦板を立てている。横棧は上位のものと併せ2段組んでいる。堀形は地山ブロックの混じる黒色粘質土で埋められ、井側埋土は黒色粘質土であった。検出状況では井側埋土の上層に自然石が見られた。井側埋土からは白磁の破片が見つかった。

### S E C 3 (第35図)

調査区東側に位置する円形の丸太くり抜き井戸だが、くり抜いた材をそのまま利用せず、割って井側の径を調整している。東西約1.45m・南北辺約1.15m・深さ約1.1mの堀形の中央に復元径約0.75mの円形の井側を据えている。涌水層である灰色砂層面にくり抜き材を3分割して据え、縦目には縦板を置いていたと考えられる。北側の材は大きく内側にずれていたが、使用時は円形であったと考えられる。堀形は地山ブロックの混じる黒色粘質土で埋められていた。検出状況では井側内には自然石がぎっしり詰まっていた。井側埋土からは上師器、瓦、上錘、青磁碗などが見つかったが、青磁碗は石の間より完形に近い状態で見つかり、井戸祭祀に関わると考えられる。

### 出土遺物 (第36図)

いずれも井側内からの出土である。遺物は土師器の細片が多く見つかった。(1)は龍泉窯系青磁碗I類である。胎上は淡紫灰色で精良である。釉は濃緑色で、高台までかかる。底部の器肉が厚い。内面には



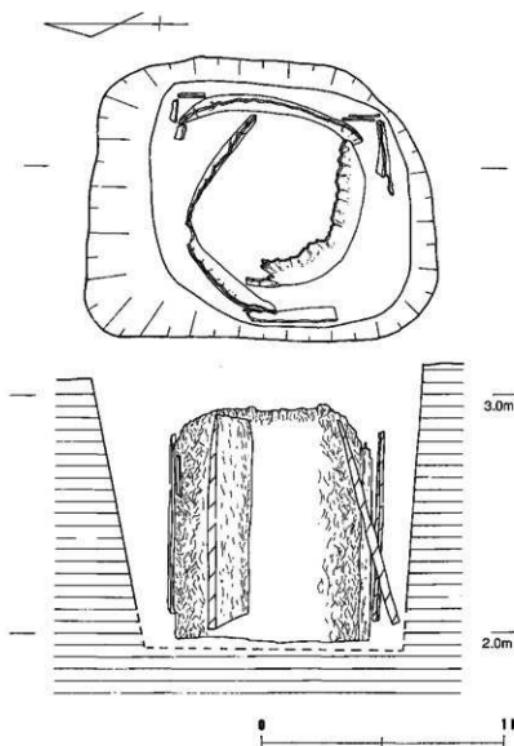
第34図 S E C 2 実測図

飛雲文で5分割し、雲のような模様を描く。(2)は土師器の皿である。口径7.9cm・底径5.4cm・器高1.75cmを測る。胎土は赤褐色粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。体部は近く上方へ立ち上がる。(3)～(4)は上錐である。(3)は長さ3.6cm・最大幅2.1cm・重量15gを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡褐灰色を呈す。(4)は長さ4.9cm以上・最大幅1.6cm・重量15gを測る。淡褐灰色を呈す。

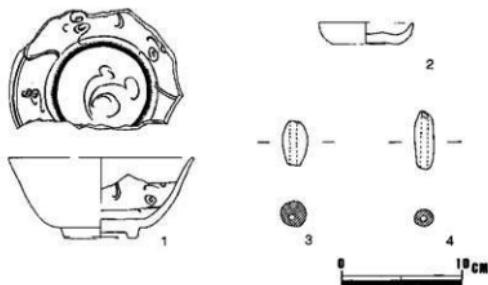
#### S E C 4 (第29図)

調査区東側に位置する方形縦板組隅柱横桟型井戸である。東西約1.6m・南北約0.65m以上・深さ約0.92mを測り、隅丸方形の堀形中央に復元して一辺約0.73mの方形の井側を据えている。涌水層である灰色砂層に隅柱を80cm程埋め込んでいる。隅柱は長さ130cmを測り、上下端を細くしており、横桟を転用したと考えられるものもある。横桟は凹柄と凸柄の桟を組み合わせており、隅柱に柄穴は開いていない。検出状況では井側内には自然石と須恵器甕の破片が多く見られた。遺物は井側内から土師器・須恵器・白磁などの破片、中国陶器・須恵器の甕が見つかった。

出土遺物 (第37図)



第35図 SEC 3実測図

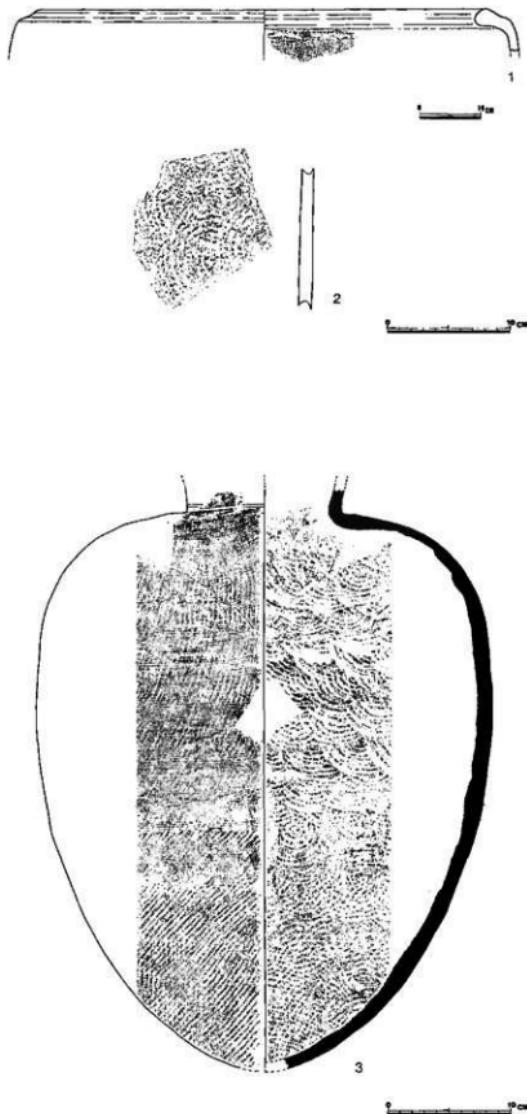


第36図 SEC 3出土遺物実測図

(1)は中国陶器の壺である。復元口径71.6cmを測る。胎土は2mm大の砂粒、黒褐色粒を多く含み、紫みを帯びた淡灰色を呈すが断面は一部赤褐色である。外面は淡褐灰色、内面は暗赤褐色である。口縁は内側に屈折する。体部の外面は、ナデが施され、釉が薄くかかっている。内面は同心円叩きの後ナデを施している。(2)は(1)の体部片と考えられる。胎土は2mm大の砂粒を多く含み、淡紫灰色を呈すが断面は一部赤褐色である。内外面共には暗褐色を呈す。外面は薄い灰褐色の釉がドロリし、内面は同心円叩きの後ナデを施している。(3)は須恵器の壺である。破片の状態で出土したが、ほぼ完形に復元できた。器高47.7cm以上・最大胴部径37cmを測る。胎土は砂粒を多く含む。暗青灰色を呈すが、断面は褐色である。頸部はナデの後沈線が一本施される。胴部の最大径は中位にあり、全体の器形は卵型で底は丸底である。体部の外面上半部は平行叩きの後一定間隔で横方向のカキメを施し、下半部は平行叩きである。内面には同心円叩きの痕跡が明瞭に残る。

#### E. 出土遺物（第38~40図）

遺物包含層（黒色粘質土）  
からは総破片数で3,293点の



第37図 SEC 4出土遺物実測図

遺物が出土した。最も多いのは須恵器で1544点（47%）を占める。古代の土師器や弥生土器は266点（8%）を占める。中世前半の土師器は褐色系のものが793点（24%）、特殊な用途と考えられる灰白色系の土師器は553点（17%）を占める。瓦は古代のもので19点（1%）程度を占めるが、ほとんどが平瓦や丸瓦片で軒丸瓦や軒半瓦は見つからなかった。貿易陶磁は白磁48点（1%）、青磁50点（1%）、陶器類43点（1%）である。白磁と青磁はほぼ同じ比率で、白磁は口縁が口禿げのものまである。

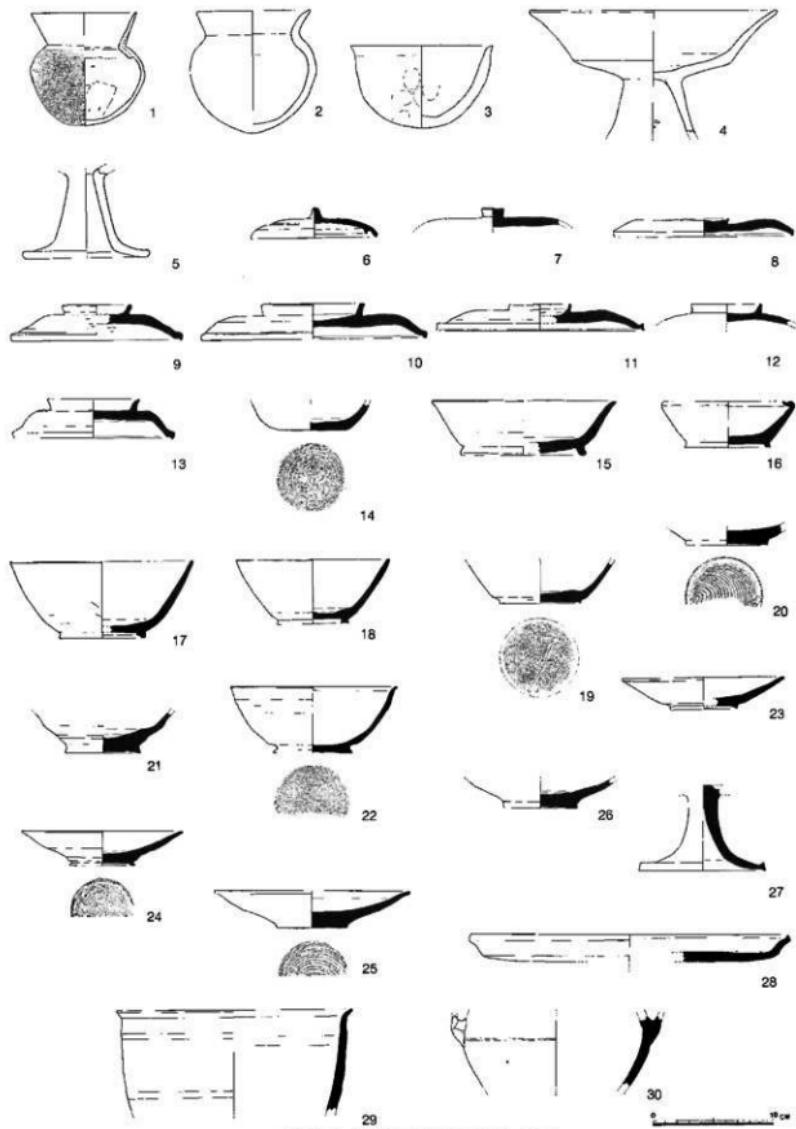
#### 古墳時代の遺物（第38図・1～5）

(1)～(2)は土師器の小型丸底壺である。(1)は口径8.7cm・器高9.4cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈す。焼成は良好で体部内外面に黒斑がある。体部外面の下半部は叩き痕が残り、内面上位は横方向のケズリ、下位は下から上方向のケズリである。口縁は後から接合して高く造る。(2)は口径9.6cm・器高10.2cmを測る。胎土は2mm大の砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。焼成は良好である。体部外表面はハケメが残り、一部赤色顔料が付着する。内面は横方向のケズリである。口縁はやや短く外方に開く。(3)は土師器の壺である。口径11.8cm・器高6.9cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈す。焼成は良好で、内面に黒斑が残る。体部外表面は指頭圧痕が残り口縁部はナデが施されている。内面は一部指頭圧痕のため凹凸があるが、ヨコナデで仕上げられている。口縁端部はやや短く外反する。(4)は土師器の高壺である。口径20.4cm・器高10.3cm以上を測る。胎土は砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。壺部は大きく外に開き、脚部と丁寧に接合されている。脚部内面には横方向のケズリ痕が残る。(5)は土師器高壺の脚部である。底径10.6cm・器高7.5cm以上を測る。胎土は砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。脚部は下位から大きく外に開く。

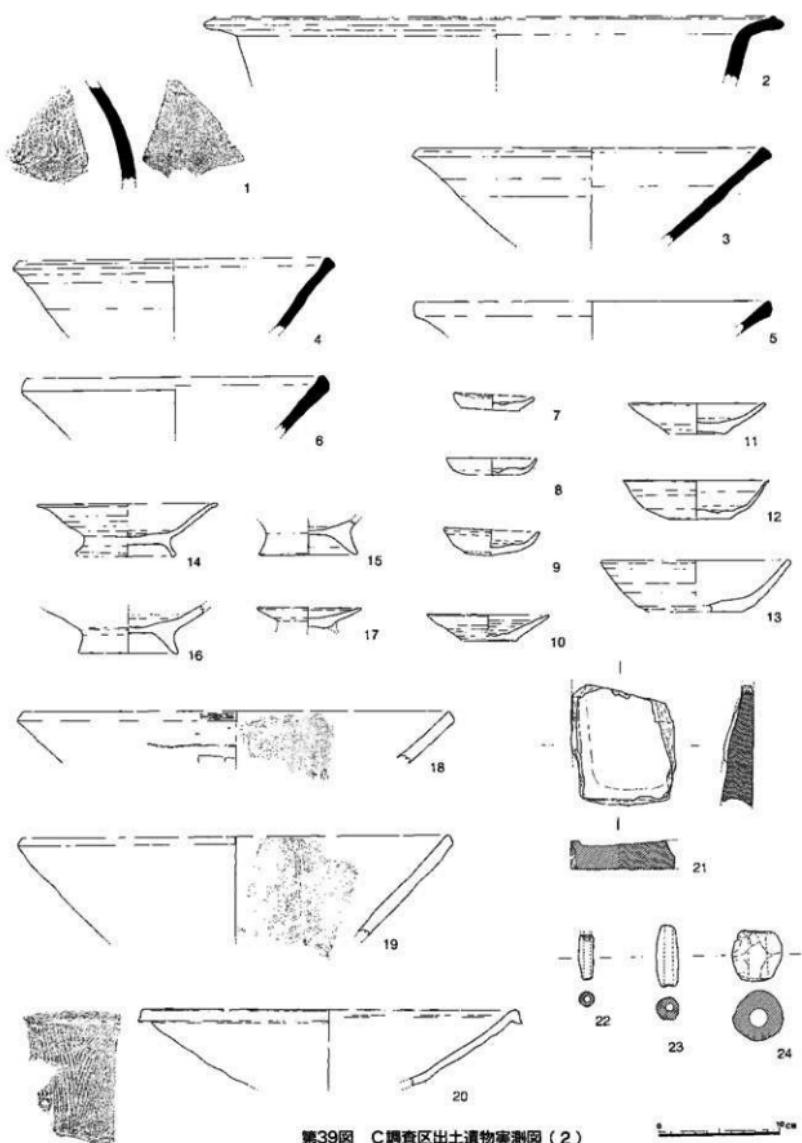
#### 須恵器（第38図・6～30・第39図・1～6）

(6)～(13)は蓋である。(6)は口径10.6cm・器高2.55cmを測る。胎土は暗灰色砂粒を少量含み、淡灰色を呈す。乳頭状つまみを有し、外表面は回転ヘラケズリとナデを施し、段が不規則に付く。内面にはナデが施され、返りはやや内側に入った所に付く。(7)は胎土に白色、褐色粒を少量含み、暗灰色を呈す。外表面には自然釉がかかる。ボタン状の高いつまみを有す。(8)は口径14.8cm・器高1.45cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。外表面は自然釉がかかる。低いボタン状つまみを有し、外表面は回転ヘラケズリとナデを施す。内面の天井部には丁寧なナデが施される。端部は短く下垂する。(9)は口径14.1cm・器高3cmを測る。胎土は1～3mm大の砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。丸みのある輪状つまみを有し、天井部はヘラ切り後にナデが施される。体部外表面は回転ヘラケズリとナデを施す。内面の天井部には丁寧なナデが施される。端部は短く屈曲して下垂する。(10)は口径18.6cm・器高2.9cmを測る。胎土は白色粒を多く含み、淡灰色を呈す。輪状つまみを有し、天井部はヘラ切り後にナデが施される。体部外表面はナデ痕が残る。内面の天井部には丁寧なナデが施され、若干凹む。端部は短く屈曲して下垂する。(11)は口径17.4cm・器高2.2cmを測る。胎土は白色粒を微量に含み、暗青灰色を呈す。上方にまっすぐ立ち上がる輪状つまみを有し、天井部はヘラ切り後にナデが施される。体部外表面はナデ痕が残る。内面の天井部には不定方向のナデが施される。端部は屈曲して短く下垂する。(12)は輪状つまみの径5.8cmを測る。胎土は白色粒を微量に含み、暗紫灰色を呈す。天井部はヘラ切り

後に不定方向のナデが施される。内面の天井部には不定方向のナデが施される。(13)は口径13.6cm・器高3.2cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、暗灰色を呈す。天井部はヘラ切りの後ナデを施す。口径に対して大きめの外反する輪状つまみを付けている。体部の肩には幅4mmの段が付く。天井部内面には丁寧なナデが施される。端部は屈曲し、短く下垂する。(14)～(22)は壺である。(14)は底径5.8cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈す。底部はヘラ切りである。(15)は口径15.2cm・底径10.2cm・器高4.55cmを測り、青灰色を呈す。底部はヘラ切り後に不定方向のナデを施し、外開きの太い高台を付ける。体部は外方に開き、口縁端部はやや外反する。(16)は口径10.3cm・底径7.1cm・器高3.85cmを測り、暗灰色を呈す。底部はヘラ切り後に不定方向のナデを中央部に施し、やや外開きの高台を付ける。体部は外方に大きく開き、口縁端部を内側へ屈曲させて蓋の受け部を造っている。(17)は口径15.3cm・底径7.1cm・器高6.5cmを測り、暗灰色を呈す。底部はヘラ切り後に不定方向のナデを施し、内側が凹む高台を付ける。体部はやや丸みをもって立上り、外面はケズリとナデを施している。(18)は口径12.6cm・底径5.9cm・器高5.4cmを測り、淡灰色を呈す。底部はヘラ切り後、幅広のしっかりした高台を付ける。(19)は底径6.8cmを測り、淡灰色を呈す。底部は回転糸切り後に、底部端をつまみ出しごく低く高台状に造っている。(20)は底径6.8cmを測る。胎土は砂粒を微量に含み、灰色を呈す。底部は回転糸切り後に、底部端をナデによりつまみ出してごく低く高台状に造っている。体部は外方に開くと考えられる。(21)は底径6.4cmを測る。胎土は砂粒を微量に含み、淡灰色を呈す。底部は厚く、回転糸切り痕と板状圧痕が残る。内面見込みは回転ナデの後不定方向のナデを施す。(22)は、口径13.8cm・底径6.5cm・器高5.5cmを測り暗灰色を呈す。底部はやや厚く、回転糸切り痕と板状圧痕が残る。内面見込みは回転ナデ痕が残る。体部は丸みをもって立上り、口縁端部は外反する。(23)～(26)は皿である。(23)は、口径13.2cm・底径5.5cm・器高2.6cmを測る。胎土は砂粒を微量に含み、灰色を呈す。底部は回転糸切り後に、底部端をナデにより外方へつまみ出してごく低く高台状に造っている。体部は外方へ直線的に立上り、口縁端部はわずかに外反する。(24)は、口径13.5cm・底径5.5cm・器高2.85cmを測り、淡灰色を呈す。底部は回転糸切り後に、底部端をナデにより外方へつまみ出してごく低く高台状に造っている。体部は外方へ直線的に立ち上がる。(25)は、口径16.2cm・底径5.7cm・器高3.1cmを測る。胎土は7mm大の黒色粒、砂粒を少量含み、淡灰色を呈す。底部は回転糸切りである。体部は外方へやや丸みをもって立上り、口縁端部はわずかに外反する。(26)は、底径6cmを測る。胎土は1～3mmの大砂粒を多く含み、暗灰色を呈す。底部は回転糸切りである。体部は外方へやや丸みをもって立ち上がる。(27)は高壺の脚部で、底径10.5cmを測る。淡灰色を呈す。(28)は高壺の壺部で、口径26.4cmを測る。胎土は1～3mm大の砂粒を多く含み、淡灰色を呈す。口縁部は屈曲し、上方へ立ち上がる。(29)は鉢の口縁部片である。胎土は砂粒を多く含み、復元口径19.6cmを測る。暗灰色を呈す。体部は直線的に立上り、口縁端部は外反する。(30)は把手が付く壺の体部片である。胎土は砂粒を微量に含み、暗灰色を呈すが断面は暗紫灰色を呈す。把手の周辺には自然釉がかかることもある。復元胴部径15.6cmを測る。貼り付けの把手が2ヶ所付くと考えられる。体部には沈線が一本施される。(第39図・1)は壺の体部片である。胎土は砂粒を少量含み、灰白色を呈す。やや軟質な焼きである。外面は横方向のハケメ、内面は同心円印きの後ナデを施している。(2)は壺の口縁部である。復元



第38図 C調査区出土遺物実測図(1)



第39図 C調査区出土遺物実測図(2)

1 cm

口径46.5cmを測り、淡灰色を呈す。体部外面は平行叩きの後に横方向のハケメを施す。口縁端部は外方向に屈折し、内面に突帯をつまみ出している。(3)～(6)は東播系須恵器の擂鉢である。(3)は復元口径28.6cmを測る。胎土は2mm大の砂粒を少量含み、暗灰色を呈す。(4)は復元口径25.6cmを測る。胎土は4mm大の砂粒を微量に含み、暗青灰色を呈す。(5)は復元口径29.3cmを測る。胎土は砂粒を少量に含み、淡灰色を呈す。口縁部は暗灰色を呈す。(6)は復元口径24.6cmを測る。胎土は砂粒を少量に含み、暗青灰色を呈す。口縁部は黒色を呈す。これらは12世紀末葉から13世紀初頭と考えられる(註8)。

#### 土師器(第39図・7～19)

(7)～(11)は皿である。(7)は口径6.6cm・底径4.8cm・器高1.5cmを測る。胎土は金雲母、褐色粒を多量に含み、淡褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。体部は短く立上り、全体的にひずんでいる。(8)は口径7.4cm・底径4.6cm・器高1.4cmを測る。胎土は赤褐色粒を少量含み、淡黄褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。体部は細く丸みをもって立ち上がる。内面見込みは回転ナデが施されるが、一部器壁が薄いため穴が開いている。(9)は口径8cm・底径4.4cm・器高2.1cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、暗赤褐色を呈す。底部は回転糸切り痕が残るが、ひずんでいる。体部は丸みをもって立ち上がる。(10)は灰白色を呈し、口径10.1cm・底径4.5cm・器高2.2cmを測る。底部は回転糸切り痕が残る。体部は直線的に外方へ開く。内外面には回転ナデが施されるが、口縁端部は丁寧に仕上げられる。(11)も灰白色を呈し、口径11.1cm・底径4.9cm・器高2.55cmを測る。底部は回転糸切り痕が残る。体部は直線的に外方へ開く。(12)～(13)は壺である。(12)は口径12.2cm・底径5.1cm・器高3.2cmを測る。淡赤褐色を呈す。底部は回転糸切り痕が残る。体部は丸みをもって次第に細く立ち上がり、口縁端部はやや外反する。(13)は口径15.3cm・底径7.8cm・器高4.3cmを測る。胎土は赤褐色粒を多く含み、淡黄褐色を呈す。底部は回転糸切り痕が残る。体部外面は回転ナデ、内面はやや丁寧なナデで仕上げられる。底径が大きく、器高がやや低い。(14)～(16)は高台付壺である。(14)は灰白色を呈し、口径15.1cm・底径8.5cm・器高4.45cmを測る。口縁端部を外反させ、外面は回転ナデ、内面には丁寧なナデが施される。底部回転糸切りの後、ナデにより高台を接合している。高台の接地部には一部板状圧痕が残る。(15)は底径8.2cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。調整は全体に不明瞭である。(16)は底径8.3cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、暗赤褐色を呈す。(17)は口径8.7cmを測る脚付き皿と考えられる。淡黄褐色を呈す。底部には回転糸切り痕が残る。(18)～(19)は土師器の擂鉢である。(18)は復元口径35.4cmを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡褐色を呈す。口縁部外面は横方向のハケメ、体部外面はケズリの後ナデを施す。内面は横方向のハケメの後、縦の卸目を付ける。(19)は復元口径35.4cmを測る。胎土は3～5mm大の砂粒を少量含み、淡黄褐色を呈す。外面の調整は不明瞭だが、内面は横方向のハケメのうち6条の卸目を施す。内面は磨滅している。

#### その他の遺物(第39図・20～24)

(20)は瓦質土器の擂鉢である。復元口径31.5cmを測り、暗灰色を呈す。口縁端部を外方向へ屈折させ、外面は縦方向の粗いハケメを施す。内面は磨滅している。(21)は淡赤灰色を呈する石硯である。かなり欠損しているが、陸部は磨滅している。石材は凝灰岩である(註9)。(22)～(24)

は土錐である。②は長さ3.6cm以上・最大幅1.2cm・重量5gを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈す。③は長さ5.1cm・最大幅1.8cm・重量16gを測る。胎土は砂粒を少量含み、淡灰褐色を呈す。④は長さ4.2cm・最大幅4.1cm・重量56gを測る。胎土は砂粒を多く含み、赤褐色を呈す。全面に指頭圧痕が残る。

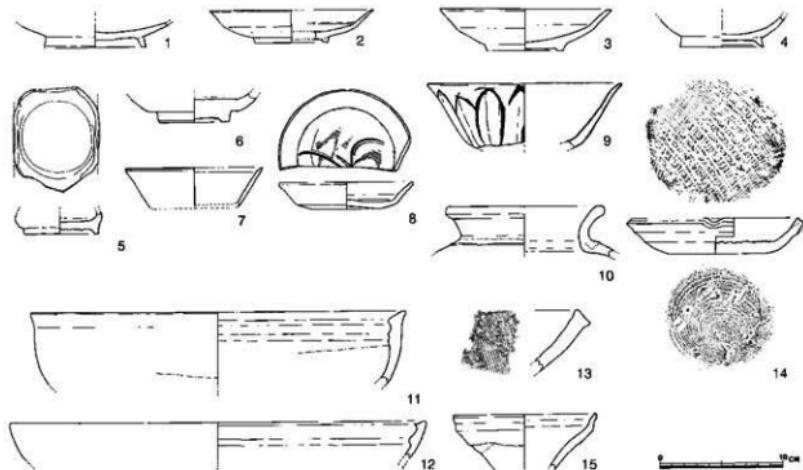
#### 緑釉陶器（第40図・1～5）

(1)は底径9.2cmを測る。胎土は淡灰色で硬質である。釉は失透性の緑色で、内面は重ね焼きの痕跡が残る。貼付高台で、高台内面に目跡が2か所残る。美濃あるいは近江産と考えられる。(2)は口径13.4cm・底径6cm・器高2.7cmを測る。胎土は淡黄灰色で軟質である。釉は光沢のある緑色で、ややむらがある。体部は中位で屈折し、口縁端部はやや外反する。(3)は口径14cm・底径6.4cm・器高3.4cmを測る。胎土は淡黄灰色で軟質である。釉は光沢のある緑色で、ややむらがある。体部は中位で屈曲し、口縁端部はやや外反する。高台は削り出しで幅3～5cmである。(4)は底径6.8cmを測る。胎土は灰白色で上師質である。緑色の釉が内外面に一部残る。有段輪高台を持ち、近江産と考えられる。(5)は底径6.1cmを測る耳皿である。胎土は灰白色で土師質である。淡緑灰色の釉が全面に残る。底部は回転糸切りで貼付高台を有す。

#### 貿易陶磁（第40図・6～12、15）

貿易陶磁の分類は太宰府のものを用いた。出土遺物全体における割合は低いが、主に太宰府C期からF期にかけての様々な陶磁器が出上した。

(6)は越州窯系青磁碗の底部である。復元底径5.5cmを測る。胎土は淡紫灰色で精良である。釉調は緑褐色で全面にかかる。内面見込み周辺は浅く凹み、高台内面には砂目跡が付着する。



第40図 C調査区出土遺物実測図（3）

(7)は白磁皿IX類である。復元口径11.2cmを測る。胎上は白色で釉調は淡緑灰色で全面にかかる。口縁部は口禿げである。(8)は同安窯系青磁の皿である。胎上は灰色で釉調は淡緑色で内外面にかかる。体部は下位でやや屈折する。内面には櫛とヘラによる文様が施される。(9)は龍泉窯系青磁碗I 5類である。胎土は淡灰色で精良、釉は淡緑色でやや厚くかかる。外面にやや浅い削りだしの鎬蓮弁文をもつ。(10)は中国陶器の壺類と考えられる。胎土は紫みを帯びた暗灰色で砂粒を少量含む。釉調は淡緑褐色で体部外面にかかる。口縁端部は玉縁状につくる。(11)は中国陶器の鉢である。復元口径30.6cmを測る。胎土は赤褐色で砂粒を多く含み粗い。釉調は明緑灰色で口縁部内外面にかかる。口縁内面はナデにより浅い突帶をつくりだしている。(12)も中国陶器の鉢である。復元口径34cmを測る。胎上は暗紫灰色で砂粒を多く含み粗い。外面は暗褐色を呈す。口縁内面に2条の突帶をつくりだしている。(13)は天目茶碗である。復元口径11.8cmを測る。胎上は淡灰色である。外面上位と内面に黒色の鉄釉が厚くかかり、口縁部は屈曲する。

#### 国産陶器（第40図・13～14）

(13)は備前系陶器の壺鉢である。片口部のためややゆがむ。胎土は白色を少量含み、暗赤褐色を呈す。焼きは良く硬質で断面は暗灰色を呈す。内面には5条の御目が残る。14世紀頃と考えられる（註10）。(14)は瀬戸系陶器の片口の御皿である。口径13.6cm・底径7.9cm・器高2.9cmを測る。胎土は淡黄灰色である。淡褐灰色を呈し、釉は淡緑色である。底部には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。内面にはヘラ描きの御目が残る。13世紀後葉と考えられる。（註11）。

#### 註

(1)貿易陶磁の分類と時期については以下の文献を主に参照した。

森田勉・横田賛次郎 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」

『九州歴史資料館研究論集4』

山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁」

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

(2)神原博英 1996 「横路遺跡」「発掘された地質痕跡」埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会

(3)間壁忠彦 1991 「備前焼」考古学ライブリー60 ニューサイエンス社

(4)江浦洋 1996 「大名・庶民の時代と自然」

『考古学による日本歴史16 自然環境と文化』雄山閣

(5)広島県立美術館の村上勇先生のご教示による。

(6)山内靖吾・中村唯史1997「横路遺跡の地質学的検討」

『横路遺跡(土器土地区)』浜田市教育委員会

(7)浜田市教育委員会1992「下府庵寺跡」

(8)森山稔1995「中世須恵器」

中世上器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

(9)石材については益田工業高校の桑田龍三先生にご教示いただいた。

(10)前掲註3

(11)藤澤良祐1995「古瀬戸」

中世上器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター1997「研究紀要 第5輯」

## IV. 小結

### 1 遺構について

遺構としては、A調査区で水田跡、B調査区とC調査区では集落跡が確認され、石見国府域の様相が次第に明らかになってきた。

水田跡は洪水砂で埋没した状態で見つかり、面的な広がりは押さえることができなかつた。杭列や取水施設などは確認できず、プランツ・オパールの量もわずかであった。このため、ほとんど使用されない状態で埋没したと考えられる。横路遺跡の土器上地区で確認された中世前半の集落跡とB調査区及びC調査区の集落跡との間に存在しており、当時は二つの集落の間には水田が広がっていたことが想定される。昭和52年の石見国府推定地調査の1次調査地点はちょうどこの間に位置しており、当時の生活空間ではなかつたと考えられる。現在の下府川に隣接しており、この平野の安定した時期を知ることができる。中世頃のこの地域の景観を知る上での重要な発見といえる。

また、B調査区で確認された18世紀頃の災害復旧痕と考えられる砂礫が充填した土壌や溝もこれまでこの地域では類例が無く注目されるものである。この方法は他の地域では中世ではなく、江戸時代のものが確認されており、徳川幕府のもとで全国に流布された可能性が想定されている（註1）。今後の類例の確認が必要である。

古代から中世の掘立柱建物群は比較的整然と並ぶものもあるが、組み合わないものが大半であり、建物群の詳細は明らかにできなかつた。柱穴内からの遺物から時期の分かれる建物は以下のとおりである。SBB5は須恵器の壺が方形に近い形で見つかっている（第15図・3、4）。壺は8世紀後半から9世紀にかけてのものである（註2）。今回の調査で唯一古代の建物と決定できるものである。SBB1出土の土師器壺（第15図・1）は体部が直線的で底部と体部の境がなくなつておらず、12世紀中頃から後半にかけてものと考えられる。C調査区では建物の平面形がかなり重複している。最も大きく2間×5間になると考えられるSBC2からは白磁碗IV類（第28図・7）が出土している。SBC1出土の皿（第28図・1）は体部が短く立ち上がり、13世紀前半頃と考えられる。SBC3出土の土師器の皿（第28図・5）は前述の皿よりもさらに体部が短く、14世紀頃と考えられる。壺も同様の傾向を示す。今回の検出建物の中では最も新しい建物である。SBC12出土の滑石製鍋（第28図・9）は12世紀初めから13世紀頃のものである（註3）。

C調査区の中央で確認されたSDC1はこれを境に遺構の分布に偏りが見られ、遺跡の中心はSDC1より北の山側と考えられる。まとまって廃棄されていた灰白色系の土師器はこの地域で白磁が大量に流入してくる時期のもので、11世紀後半から12世紀前半と考えられる（註4）。前述のSBC2とほぼ同時期で、位置関係からみてもこの2つの遺構は同時に存在したと考えられる。

井戸跡もSDC1より北側で見つかった。併存する建物や前後関係は明らかにできなかつたが、いずれも中世前半の土師器や陶磁器を伴っている。井側の構造では、方形縦板隅柱横棟型のもの2基、方形縦板横棟型のもの1基、くり抜き井戸1基である。特にくり抜き井戸は井側

のくり抜き材を分断することによって大きさを調整していると考えられ、やや特殊な例である。すべて井戸を埋める際に量の差はあるものの、自然石を意図的に投入するという井戸の祭祀には共通性が見られる。

## 2 遺物について

遺物は古代から中世まで幅広い時期の遺物が見つかった。一番多いのは須恵器であるが、ほとんどが包含層内の出土のため今回の調査から年代の根拠を求めるのは困難である。

### 古代の遺物について

石見地域における須恵器の編年は益山市の大溢遺跡、江津市の久本奥窯跡で行われている（註5）。これらを隨時時間軸として使用しながら古代の遺物についてまとめる。

蓋壺の中で最も古いと考えられるものは（第38図・6）の蓋である。乳頭状のつまみを付け、かえりはやや内側につくもので、久本奥窯跡編年III期である。時期はおよそ7世紀中頃と考えられる。次につまみは偏平になり、口径が大きくなる（第19図・1）。久本奥窯跡編年IV期にあたり、7世紀後半とされている。また、小さく低い輪状つまみをもつ須恵器蓋（第32図・14）や口縁部が屈曲する壺もごく少量見られる（第32図・15）。量的にはわずかである。

大溢遺跡編年I期・久本奥窯跡編年V期にあたる須恵器から出土量がやや増加する。8世紀前半頃と考えられる。蓋は口径が大きくなり、蓋口縁部は下垂する（第19図・2）。壺は体部が外方向へ開き、高台は外方へ突き出す（第38図・15）。

大溢遺跡編年III期・久本奥窯跡編年VI期とされる須恵器は最も出土量が多い。8世紀後半から9世紀初頭と考えられる。蓋は輪状つまみを付け、口縁部が屈曲するものである。しかし、輪状つまみの大きさ・形態や肩から口縁部の形態には差が見られる。外開きで大きい輪状つまみを持ち肩部の屈曲がきついもの（第38図・13）や、やや短い輪状つまみを持つもの（第19図・3）、肩部は丸みを持ち口縁端部がゆるく屈曲するもの（第31図・1）がある。これらは地域色を示すと考えられている（註6）。

大溢遺跡編年IV期にあたる須恵器は壺は体部が丸みを持つようになる（第38図・17）。また、大田市白壺遺跡で延喜2年（909）銘の木簡と共に伴したとされる須恵器と類似するものもある（註7）。底部を回転糸切りで切り離した後にやや内側をナデることにより、低い高台状につくるものである（第38図・19）。

10世紀から11世紀にかけての遺物はこれまでの研究でも不明な点が多いが、当該期と考えられる資料が確認できる。前述の白壺遺跡の須恵器壺と同様の底部調整を施した須恵器の皿（第38図・24）がある。高台の端を外反気味に造るものもある。同じ皿でも底部が回転糸切り後未調整のもの（第38図・25）もある。これらが時期的に並行するのかは現段階では不明である。また、やや焼きが悪く、脚の高い皿も見られる（第31図・7）。この時期の綠釉陶器は多く出土しており、今後地在土器の検討が必要である。

古代の土師器及び須恵器の壺片は非常に多く見つかったが、全体を知り得る資料はなかった。また、風字窓の破片が三点見つかったが円面窓は皆無であった。瓦も全体では凸面に繩叩き、格子叩きをもつ平瓦片がほとんどで、軒瓦は一点見つかったのみである。

## 中世の遺物について

中世の遺物は土師器と貿易陶磁が主流である。古市遺跡Ⅰ期にあたる11世紀後半から12世紀前半頃は白磁碗Ⅱ類や白磁碗Ⅳ類が流入してくるのが特徴的である（註8）。土師器はS D C 1からまとまって出土した灰白色系のものと包含層から見つかる褐色系のものとに分けられる。灰白色系のものは古市遺跡でも土壤に集中して廃棄されており、特殊な用途であったと考えられる。灰白色を呈するのは時期的に考えて白磁の影響があったと考えられる。ただし、器形は模倣しておらず、今後の分布と系譜の検討が必要である。現段階では同一平野の古市遺跡、横路遺跡（土器土地区）、下府庵寺跡、同一地区的石見国分寺跡、川向遺跡、やや離れた江津市古八幡遺跡で確認できる（註9）。褐色系のものは底部と体部の境が明瞭で、底部をやや柱状に厚くつくる。体部はやや丸みをもって立ち上がる（第28図・3）。古市遺跡Ⅱ期にあたる12世紀中頃から後半は底部と体部の差が無くなり、体部が直線的に立ち上がる（第15図・1）。器高が高く、器壁が厚いものもある（第18図・5）。古市遺跡Ⅲ期にあたる13世紀前半は底径が大きくなり、器高が低くなる（第38図・25）。皿も同様に短く立ち上がる体部をもつ（第28図・1）。この後に続くと考えられるものは器壁が薄く、底部がさらに大きくなる坏（第28図・6）と底径に対して体部がごく短く立ち上がる皿（第28図・5）がある。年代を示す根拠は薄いが、包含層出土遺物で最も新しいものは古瀬戸の卸皿（第40図・14）である。13世紀後葉から14世紀前半頃と考えられる（註10）。包含層から出土した遺物はこの時期を下限としておきたい。貿易陶磁は白磁と青磁の量はほぼ同一である。太宰府C期からF期までのもので、11世紀後半から14世紀頃のものである（註11）。水注・合子といった奢侈品がほとんど見られないのが特徴である。

## 3 遺跡の性格について

これまでに同一平野内で調査された古市遺跡（註12）、横路遺跡（土器土地区）（註13）との比較検討を行う。遺跡はいずれも溝で区画されているが、古市遺跡は下府川の脇に集落全体を区画するように壇状の溝をつくり、溝より東に遺構は存在しない。古代から中世にかけての集落である。横路遺跡（土器土地区）は建物数棟を区画するような浅い溝をつくりており、中世前半という限られた時期の遺跡である。やや飛躍した表現だが、石見府中の古市遺跡は「大規模な町」、横路遺跡（土器土地区）は「小規模な町」と考えられる。今回の調査区内、C調査区で確認された溝S D C 1はこれを境に遺構の密度が変わり、溝の北側には大型の掘立柱建物が復元できた。さらに溝には大量の灰白色系の土師器が北側から廃棄されたと考えられ、少なくとも中世前半には館のような特殊な建物群が存在していたと想定される。綠釉陶器や風字鏡の出土はこれらが古代に遡ることを示唆するが、瓦葺の建物は確認できなかった。平安時代初め頃から中世にかけて特に繁栄したと考えられ、国府域の中で見れば官衙域よりもむしろ住居域に近いと考えられる（註14）。

これまでの下府平野の調査結果から、下府川が安定して現在のような景観をしめすようになったのは中世になってからである（註15）。古代の遺跡はそれまで山側に存在しており、中世になって集落は現在の沖積部に拡大したと考えられる。

今後は全国的な国府・府中研究の中に位置づけ、さらに国府地区の調査を進めることが必要であろう。

註

- (1)江浦洋1996「大名・庶民の時代と自然」  
『考古学による日本歴史16自然環境と文化』雄山閣
- (2)島根県教育委員会1992「大溢遺跡」『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』  
島根県教育委員会1995「久本奥窓跡」『一般国道9号江津道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- (3)木戸雅寿1995「石鍋」  
中世土器研究会編「概説中世の土器・陶磁器」真陽社
- (4)浜田市教育委員会1995「伊豆土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報」  
柳原博英1998「浜田市・古市遺跡における中世前半の土器について」  
『松江考古 第9号』松江考古学談話会
- (5)前掲註2
- (6)野田直子1994「石見の歴史時代須恵器について」  
石見考古学研修会発表資料  
蓋の形態を西部型・中央型・東部型に三分している。
- (7)人田市教育委員会1989「白坏遺跡発掘調査概報」
- (8)前掲註4
- (9)浜田市教育委員会1992「下府魔寺跡」  
浜田市教育委員会1989「石見国分寺跡第Ⅰ期調査概報」  
古八幡遺跡の資料は島根県埋蔵文化財調査センター東森晋氏の好意により実見。胎土は異なるが色調や器形は類似する。
- (10)藤澤良祐1995「古瀬戸」  
中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社  
財瀬戸市埋蔵文化財センター1997「研究紀要 第5輯」
- (11)山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁」  
中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社
- (12)浜田市教育委員会1995「伊豆土地区画整理事業に伴う古市遺跡発掘調査概報」
- (13)浜田市教育委員会1997「横路遺跡（土器土地X）」  
京都府埋蔵文化財研究所の平尾政幸氏によると縄文陶器は官衙域から の出土は少なく、住居域から多く発見されるという。
- (14)西尾克己・守岡正司1997「出雲国庁跡出土陶磁器について(1)」『八雲立つ風土記の丘No141』
- (15)前掲註13

## V. 自然理化学分析

### 横路遺跡（原井ヶ市地区）発掘調査における花粉分析

川崎地質株式会社（担当者：渡辺正巳）

#### はじめに

本報は、遺跡内での農耕の実態、遺跡周辺の植生変遷などを推定するために、川崎地質株式会社が浜田市教育委員会の委託を受けて実施した分析調査の概報である。

また横路遺跡（原井ヶ市地区）は島根県西部の浜田市下府町地内の下府川北岸に広がる遺跡であり、同遺跡土器土地区の東に隣接する。

#### 分析試料について

分析試料は浜田市教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が採取した。調査地域内の調査区の配置を図1に、各調査区内での試料採取地点を図2～4に示す。図5～14の各ダイアグラムに示す柱状図の左側の数字が地層番号（本文参照）であり、右側の数字の位置が試料採取層準（試料番号）である。

花粉分析処理は渡辺（1995）に従い実施し、顕微鏡観察は光学顕微鏡を使用し、通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉化石総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本花粉化石も同定した。プラント・オパール分析は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い実施した。

#### 分析結果

分析結果を図5～9の花粉ダイアグラム、図10～14のプラント・オパールダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、木本花粉総数を基数とした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。花粉化石含有量の少なかった試料では、出現した種類を\*で示した。プラント・オパールダイアグラムでは、試料1gあたりの検出数量を算出し、スペクトルで表した。

#### 考察

##### 1 花粉分帶

花粉分析結果および層序をもとに、花粉分帶を行った。花粉組成の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

###### (1)IV帶（B区1試料No.4）

スギ属が高い出現率を示すほか、マツ属（複維管束亜属）も他の種類に比べ高い出現率を示す。

###### (2)III帶（B区1試料No.3～1、C区1試料No.2、1）

マツ属（複維管束亜属）が高い出現率を示すほか、コナラ亜属も他の種類に比べ高い出現率

を示す。

(3) II 帯 (A 区 1 試料 No. 2)

マツ属 (複維管束亜属) が極めて高い出現率を示す。

(4) I 帯 (A 区 1 試料 No. 1)

マツ属 (複維管束亜属) が高い出現率を示すほか、スギ属、コナラ亜属が他の種類に比べ高い出現率を示す。

## 2 既知の結果との比較

横路遺跡内では花粉分析が、土器土地区において実施されている (川崎地質株式会社, 1997)。しかし、土器土地区では花粉化石の検出量が極めて少なく、花粉化石が十分に検出できた試料についても堆積年代が明らかにできなかったなど、十分な古環境解析が行われなかつた。

マツ属 (複維管束亜属)、スギ属の出現傾向より、今回設定した花粉帯の I 帯が土器土地区的 7 層 (No. 2 地点試料 No. 1 層準)、8 層 (No. 2 地点試料 No. 2 層準) に対応すると考えられる。

## 3 各花粉帯の示す時期について

出土遺物から推定される、各地点の堆積時期と花粉帯の関係を表 1 に示す。

図のように、I 帯が現代、II 帯が近世～現代、III 帯が近世、IV 帯が古代～中世の植生を表すと考えられる。

## 4 古環境復元

ここでは、花粉分帯に対応する時期毎に、花粉分析結果、プラント・オパール分析結果より遺跡周辺の古環境を推定する。

### (1) IV 帯期 (古代～中世)

遺跡近辺から国府海岸にかけての山地にはアカマツを要素とするいわゆる「里山」や、クロマツを要素とする海岸林が分布していた。またスギ林も遺跡近辺から下府川上流の谷筋に分布していた。島根県東部の花粉分析結果 (例えば大西、1993) ではこの時期にスギ属花粉の出現率は低く、現在の所島根県西部でのみ認められる現象である。また遺跡内あるいは下府川の形成する沖積低地は水田として利用され、休耕田や畦ではソバの栽培も行われていた。

A 区の 4 層、10 層では花粉化石がほとんど検出できなかつた。しかし、少量であるがイネのプラント・オパールが検出されることから、両層共に水田耕作土であったと考えられる。

C 区の SGC 1 (C 3) の各試料からも、ほとんど花粉化石が検出できなかつた。しかし、試料 No. 1 ではスギ属花粉の出現率が高い傾向にあり、この時期に埋まったと考えられる。このことは、出土遺物から推定される遺構の年代 (13世紀前半～14世紀) と矛盾しない。また、SGC 1、SDC 1 共に花粉化石の検出量が少なかつたことから、これら周辺の植生を論じることはできなかつた。

### (2) III 帯期 (近世)

スギ林は伐採され、遺跡近辺から国府海岸にかけての山地にはアカマツやコナラを要素とする「里山」や、クロマツを要素とする海岸林が分布していた。遺跡内あるいは下府川の形成する沖積低地は前時期から連続して水田として利用され、休耕田や畦ではソバの栽培も積極的に行われていた。

### (3) II带期（近世～現代）

遺跡近辺から国府海岸にかけての山地は、アカマツを要素とする「里山」や、クロマツを要素とする海岸林で被われていた。遺跡内あるいは下府川の形成する沖積低地は前時期から連続して水田として利用されていた。

### (4) I带期（現代）

前時代同様に、遺跡近辺から国府海岸にかけての山地は、アカマツを要素とする「里山」や、クロマツを要素とする海岸林で被われていた。しかし、アカマツ林の一部は商品価値の高いスギ林に変わった。また遺跡内あるいは下府川の形成する沖積低地は前時期から連続して水田として利用され、ソバも栽培された。

## まとめ

花粉分析、プラント・オパール分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

(1)花粉分析結果から、本地域の花粉化石群集をI～IV带の4花粉帯に分帶できた。

(2)遺跡周辺での古代から現代にかけての断続的な植生変遷が推定できた。

これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

① 遺跡内あるいは下府川の形成する沖積低地は、古代から現代まで連続して水田として利用され、休耕田や畦ではソバの栽培も行われていた。

② 古代以降遺跡周辺では、開発の結果と考えられるアカマツ林（里山）が広く分布していたと考えられる。

③ 古代から中世にかけて、下府川流域にスギ林が存在したと考えられる。

## 引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究a

—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、15-29.

川崎地質株式会社（1997）横路遺跡（土器土地区）発掘調査における花粉分析、横路遺跡（上巒土地区）

—下府川河川局部改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—、54-58.

島根県浜田土木建築事務所・島根県浜田市教育委員会、島根。

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13,p.187-197.

大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉帯と植生変化、地質学論集、39、33-39.

渡辺正巳（1995）花粉分析法、考古資料分析法、84-85、ニューサイエンス社、東京。



図1 調査区の配置

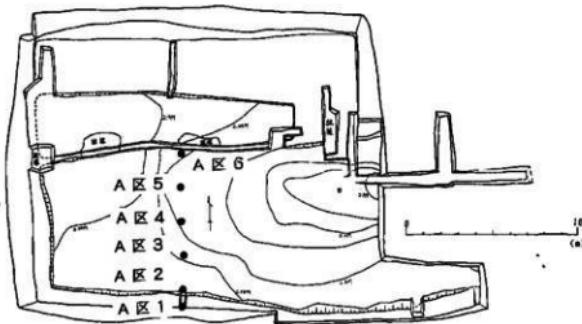


図2 A区の試料採取地点配置図



図3 B区の試料採取地点配置図

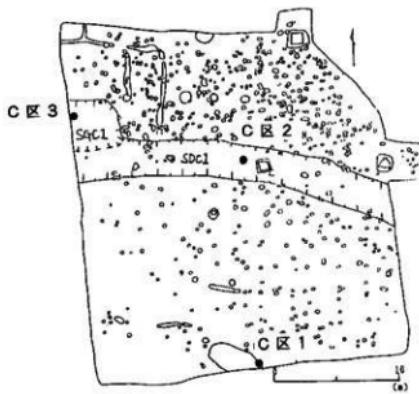


図4 C区の試料採取地点配置図

図6 B区1の花粉ダイアグラム



図7 C区1の花粉ダイアグラム

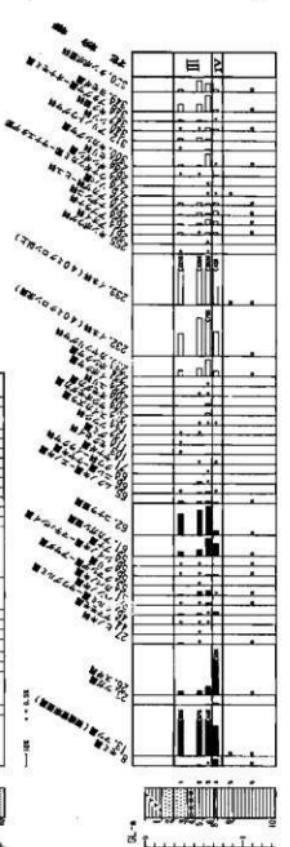


図5 A区1の花粉ダイアグラム



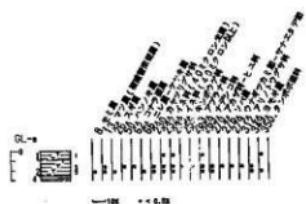


図8 C区2の花粉ダイアグラム

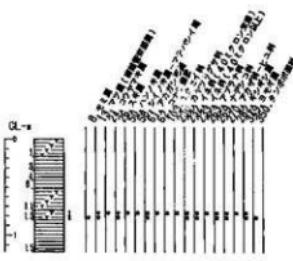


図9 C区3の花粉ダイアグラム

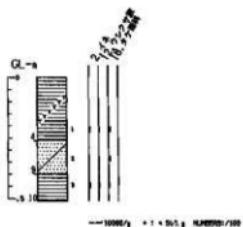


図10 A区2のプラント・オバルダイアグラム

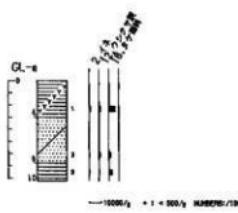


図11 A区3のプラント・オバルダイアグラム

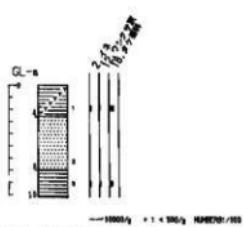


図12 A区4のプラント・オバルダイアグラム

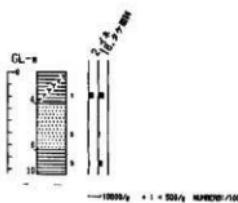


図13 A区5のプラント・オバルダイアグラム

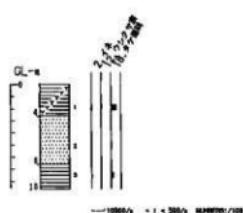


図14 A区6のプラント・オバルダイアグラム

表1 堆積時期と花粉帶の関係

A I		B I		C I	
堆積時期	花粉帶	堆積時期	花粉帶	堆積時期	花粉帶
現代	I				
		II			
			III		
				IV	
					V

# 横路遺跡(原井ヶ市地区)出土土器の蛍光X線分析

三辻利一 (奈良教育大学)

## 1) はじめに

全国各地の窯跡出土須恵器を大量に分析した結果、K、Ca、Rb、Sr の4元素が有効に地域差を示すことが発見された。すなわち、1基の窯跡から出土する須恵器はK-Ca、Rb-Srの両分布図上で窯ごとに集中して分布し、かつ、他地域のものとは十分な地域差があった。この事実をもとに、窯跡すなわち、須恵器生産地に消費地遺跡出土須恵器を結び付けることによって、その産地を推定することが可能となる。しかし、実際に産地推定の作業に入ると、いろいろと難しい問題がでてくる。須恵器の年代の問題もその一つであるが、器形・胎土観察の問題、さらには、同地域内にある、同じ時期の遺跡から出土する須恵器胎土との比較も必要となってくる。いわば、考古学的諸条件をとり入れつつ、胎土分析のデータを解析することによって、より豊かな情報を引き出すことができる。考古学者との共同研究の密度をより濃密にする必要がある。

須恵器の産地推定に使用された手法は土師器、弥生土器、縄文土器などの軟質土器の胎土研究に応用される。

本報告では、横路遺跡（原井ヶ市地区）から出土した須恵器と土師器の蛍光X線分析法による胎土分析の結果について報告する。

## 2) 分析結果

今回分析した試料の分析データは表にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料、JG-1による標準化値で表示されている。

須恵器の分析結果から説明する。山陰地方の窯跡出土須恵器の分析データは相当数、筆者の手元にあるが、日下、整理中であるため、今回は統計学の手法を使用したデータ解析はしなかった。K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で定性的にデータ解読し、大勢を把握することに努めた。

図1には古代の須恵器の両分布図を示す。前回報告した1群領域を手書きで描いてある。2群領域は松江市を中心とした出雲地域の窯出土須恵器が分布する領域であり、ここでは長方形に描いてある。描き易いため、長方形で描いたただけであり、その領界についてはとくに定量性はない。それでも、比較対照のための領域としては十分使用できるので、大勢を把握する上では十分役に立つ。瑞穂町の窯の製品もほぼ、2群領域に対応する。これに対して、1群領域は地元、浜田市を中心とした地域の製品が分布するところであり、そして、両群をずれて、K、Rb量の高い領域に分布する第3群は石見地方の窯の製品が分布するところである。図1から、No.7、11、87、98、129、130は地元産の須恵器であり、No.10は島根県東部地域の大井窯群からの搬入品である可能性をもつ。残りの須恵器はいずれも、K、Rb量が多いという化学特性をもっており、この化学特性をもつ須恵器は石見地域（益田市を中心とした地域）から出土しているので、石見地域からの搬入品と推定される。

図2には、飛鳥・奈良時代の須恵器の両分布図を示す。図1の第1群、第2群、それに石見地方のものに対応する3群に対応する須恵器ばかりで、分布パターンは同じである。ただ、第2群に対応する須恵器は増え、第3群に対応する須恵器が減少している点が目立つ。

図3には、平安時代の須恵器の両分布図を示す。やはり、須恵器の分布パターンは同じである。つまり、須恵器の供給体制は古代、飛鳥、奈良時代、平安時代と一貫して変わっていないのである。ただ、第1群、第2群、第3群の須恵器の比率の変動があるだけである。この点についてさらに詳しく論じようすると、もう少し、定量的にデータ解析することが必要となる。

土師器はK-Ca分布図は図4に示してある。前回分析した古市遺跡のI群領域に分布する土師器の奈良時代でも、平安時代でもともに少ない点が注目される。つまり、古市遺跡のI群と同じ胎土をもつ土師器はほとんどないということである。古市遺跡のI群土師器とは異なる別の場所で製作された土師器が横路遺跡には多いということである。これに代わって、Ca量の少ない土師器が増える。

また、奈良時代、平安時代、中世の土師器胎土を比較すると、それぞれ、別々に分布しており、別場所で作られた土師器である。須恵器とは違い、一般に、低温で焼成する土師器の粘土選択はそれ程厳しくなく、その分だけ、あちこちの場所で手軽に製作していた可能性が強く、胎土分析から産地を求める作業は容易に進展しない。

図5にはRb-Sr分布図を示してある。奈良時代の土師器の多くは古市遺跡のI群領域に分布するものが多いが、K-Ca分布図ではほとんどのものが対応しない。しかし、I群領域の近くに分布するところから、胎土は比較的類似していることは確かである。

図4、5から、今回分析した土師器は大きくばらついて分布しており、いろいろの胎土の土師器が混ざっていること、したがって、いくつもの産地からの供給品が混ざっているといえそうである。

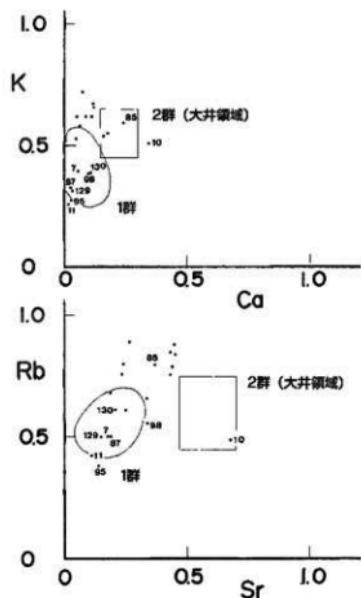


図1 古代の須恵器の両分布図

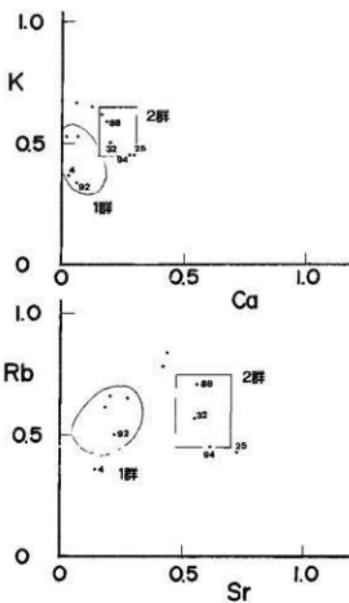


図2 飛鳥・奈良時代の両分布図

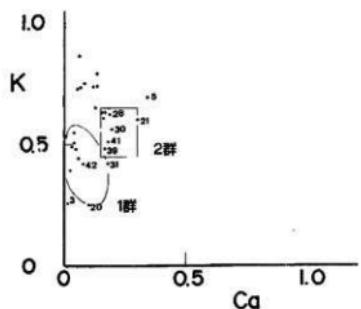


図3 平安時代の須恵器の両分布図

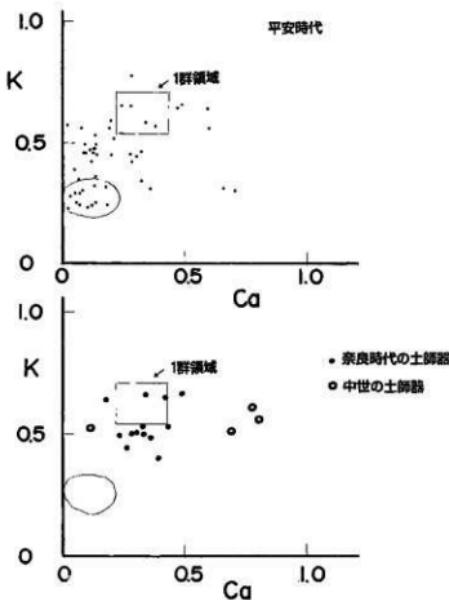


図4 土師器のK-Ca分布図

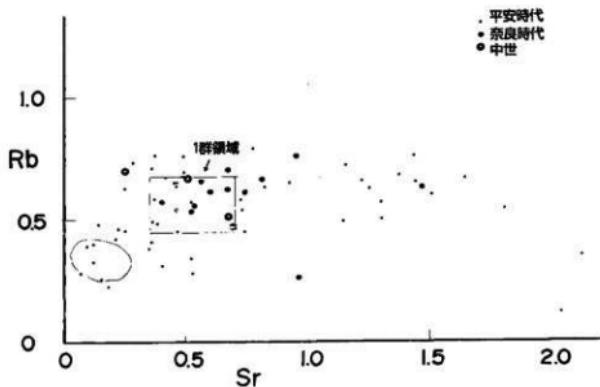


図5 土師器のRb-Sr分布図

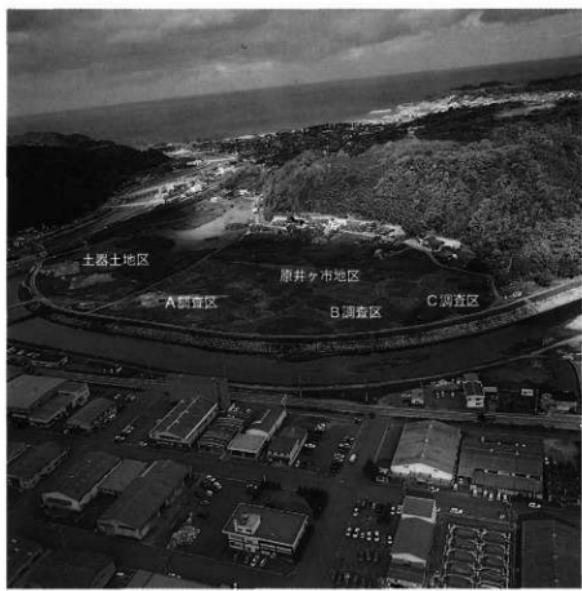




番号	遺物名	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類	回版番号・出土状況
102	石見國分寺跡	土師器(白)片	"	0.358	0.134	1.34	0.448	0.458	0.099		報告書 第15-8
103	"	足高高台城(中)	"	0.57	0.016	1.09	0.596	0.15	0.045		報告書 第15-6
104	"	"	"	0.577	0.334	1.2	0.499	1.3	0.358		報告書 第15-9
105	石見國分寺跡	土師器(白)片	"	0.235	0.121	1.77	0.225	0.182	0.033		
106	"	"	"	0.253	0.137	1.59	0.309	0.4	0.074		
107	"	土師器(白)片	"	0.237	0.07	1.87	0.255	0.151	0.029		
108	"	土師器(白)片	"	0.236	0.181	1.33	0.283	0.527	0.08		
109	宮室山遺跡	土師器(茶)片	"	0.65	0.277	2.83	0.644	0.457	0.26		
110	"	"	"	0.587	0.199	2.66	0.484	0.382	0.3		
111	吉八櫛周辺遺跡	土師器(白)片	"	0.473	0.11	1.57	0.578	0.37	0.111		遺物包含層
112	"	"	"	0.246	0.055	0.959	0.332	0.117	0.042		"
113	"	"	"	0.289	0.051	1.59	0.402	0.119	0.048		"
114	"	"	"	0.278	0.032	1.46	0.39	0.092	0.047		"
115	"	足高高台城(中)	"	0.298	0.081	1.17	0.448	0.252	0.084		"
116	"	土師器(茶)片	鎌倉中期	0.5	0.299	3.51	0.556	0.527	0.153		"
117	"	土師器(茶)片	鎌倉前期	0.442	0.261	4.13	0.536	0.455	0.147		"
118	"	"	"	0.493	0.227	4.09	0.573	0.395	0.134		"
119	高田市川内遺跡	土師器(白)片	平安後期	0.556	0.074	0.942	0.634	0.252	0.059		表探
120	"	"	"	0.315	0.66	1.57	0.408	0.357	0.041		"
121	"	"	"	0.315	0.177	1.55	0.423	0.206	0.038		"
122	"	土師器(白)	"	0.381	0.047	2.61	0.479	0.138	0.036		"
123	"	"	"	0.561	0.603	1.22	0.541	0.727	0.162		"
124	"	"	"	0.313	0.355	1.34	0.375	0.349	0.048		"
125	"	土師器(茶)	中世	0.557	0.808	1.67	0.467	0.689	0.178		"
126	"	"	"	0.613	0.779	1.4	0.671	0.5	0.553		"
127	"	"	"	0.525	0.114	2.22	0.701	0.252	0.189		"
128	"	"	"	0.505	0.689	3.05	0.509	0.566	0.176		"
129	"	須恵器	古代	0.311	0.034	1.6	0.499	0.147	0.044	1	"
130	"	"	"	0.382	0.1	1.19	0.615	0.209	0.093	1	"

# 図 版





図版1 横路地区遠景（南より）



図版2 A調査区全景



図版3 B調査区全景（北より）



図版4 C調査区全景（北より）



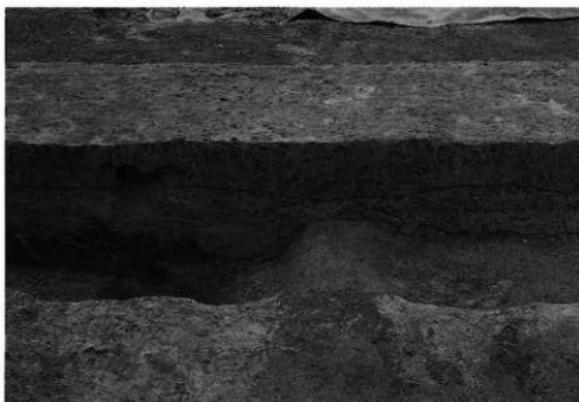
図版5  
試掘調査B-1調査区  
(水田跡検出状況)



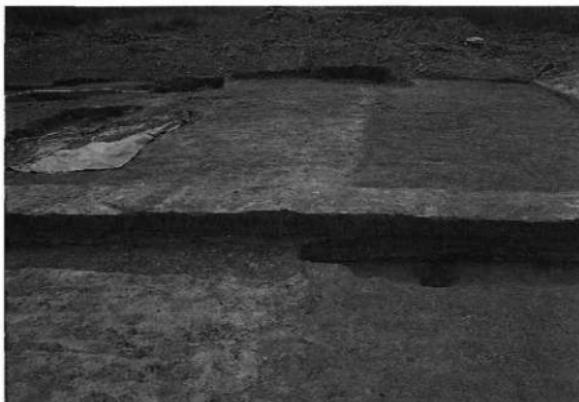
図版6  
試掘調査D-1調査区  
(近世遺構)



図版7  
試掘調査E-4調査区  
(中世遺構検出状況)



図版8  
A調査区水田跡畦畔検出状況



図版9  
A調査区水田跡北縁検出状況



図版10  
B調査区西壁土層



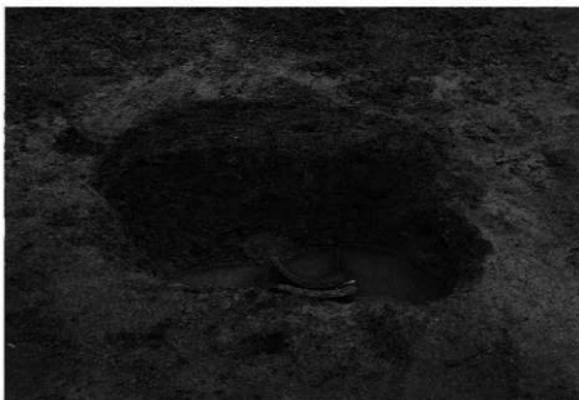
図版11  
B調査区中世遺構検出状況



図版12  
B調査区近世遺構検出状況



図版13  
B調査区近世遺構(西より)



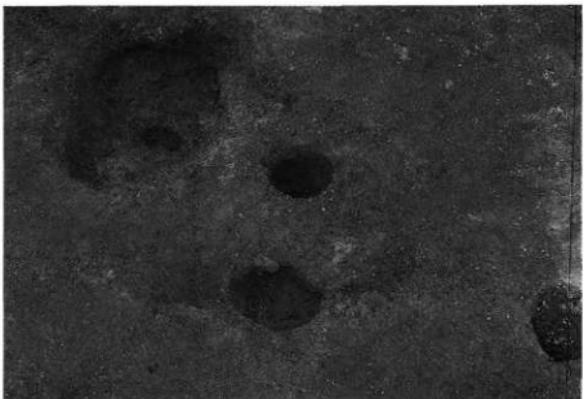
图版14  
B P 85遗物出土状况



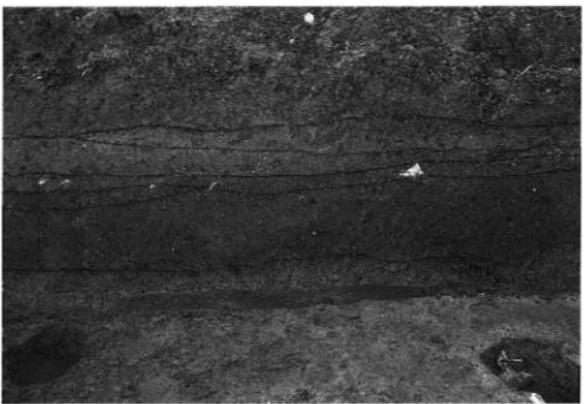
图版15  
B P 86遗物出土状况



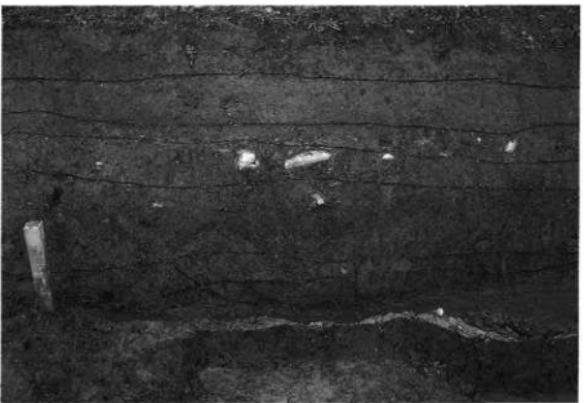
图版16  
S K B 1遗物出土状况



図版17  
SKB1全景



図版18  
C調査区西壁土層（北側）



図版19  
C調査区西壁土層（中央）



図版20  
SDC1土層堆積状況



図版21  
SDC1全景（東より）



図版22  
噴砂検出状況(遺物包含層上面)



図版23  
SEC 1と土器群A  
(SDC 1内)



図版24  
SDC 1内土器群B



図版25  
SGC 1全景（西より）



図版26  
SEC1検出状況



図版27  
SEC1全景



図版28  
SEC2全景



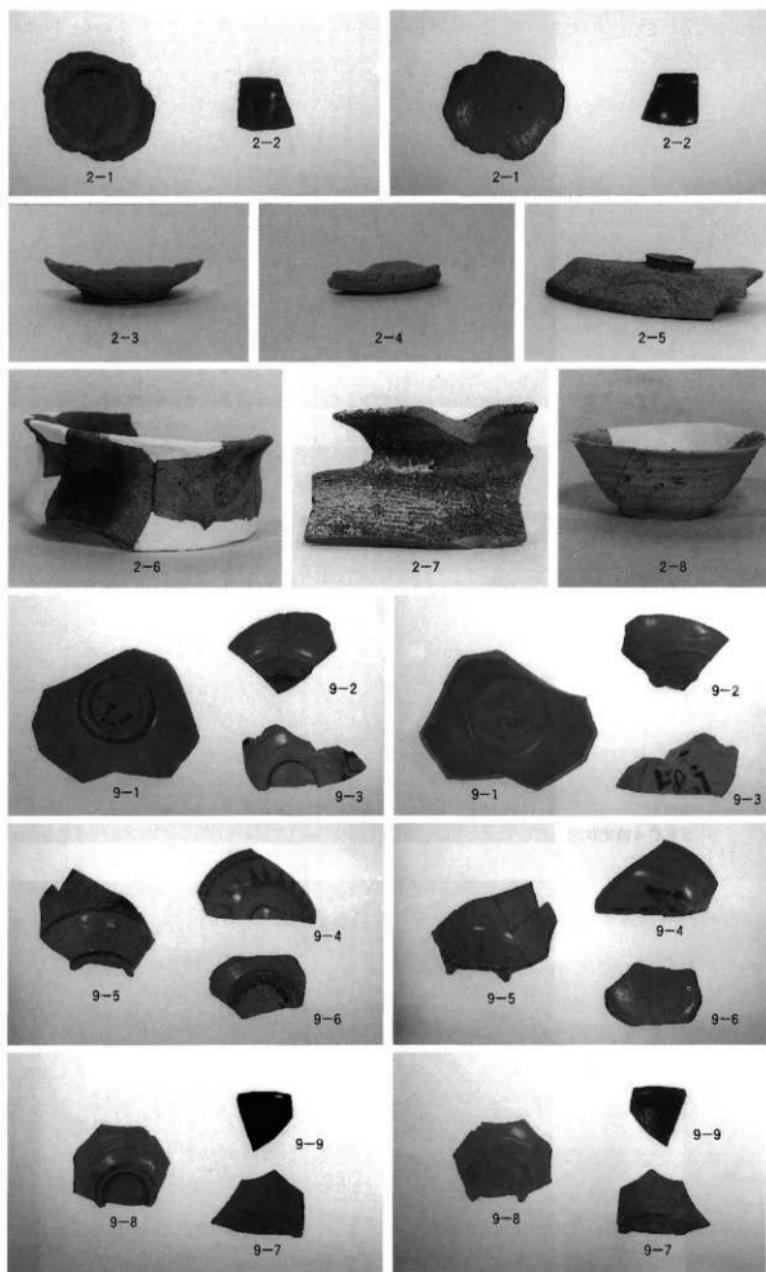
圖版29  
SEC 3全景



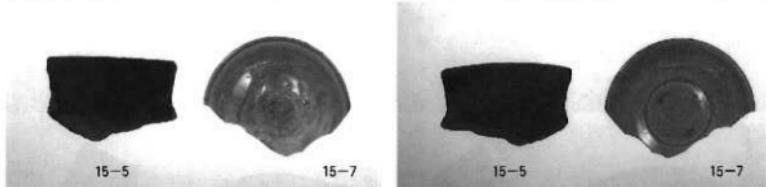
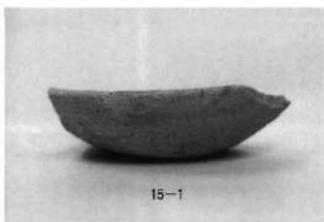
圖版30  
SEC 4檢出狀況



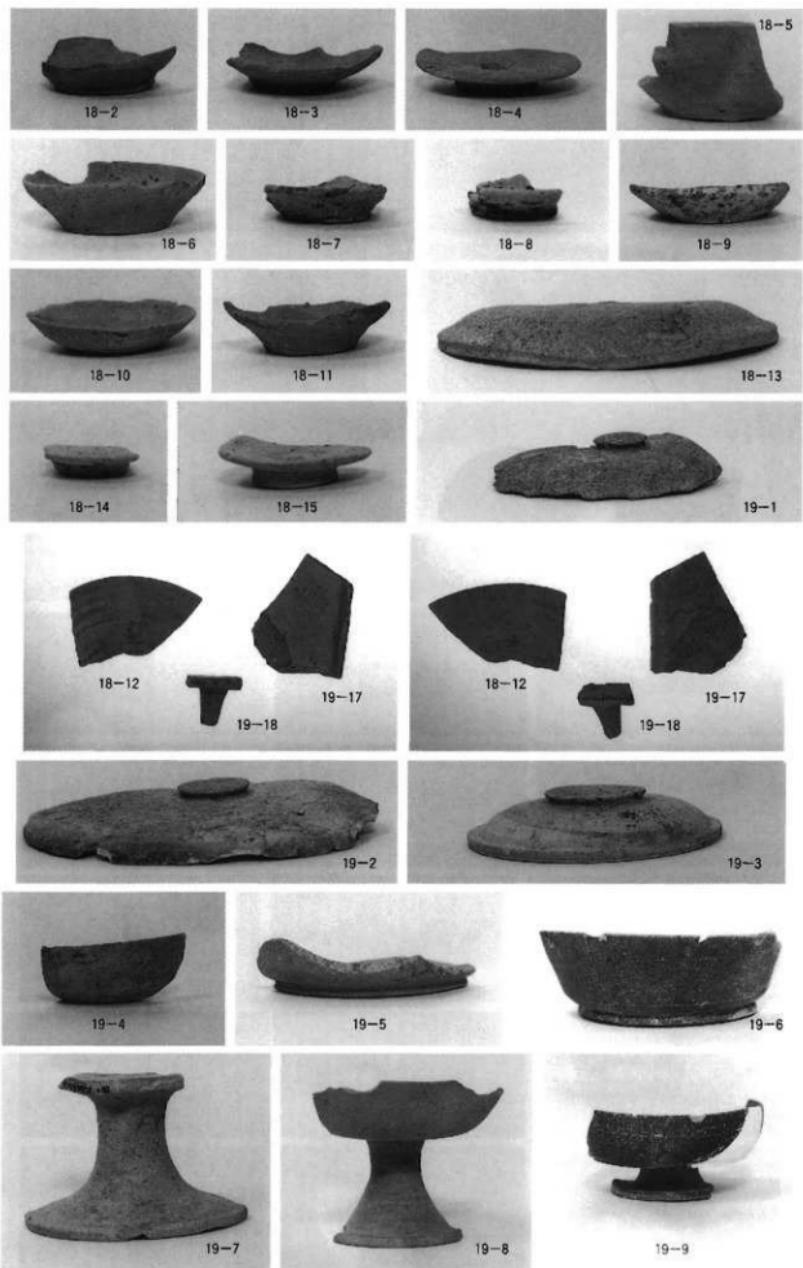
圖版31  
SEC 4全景



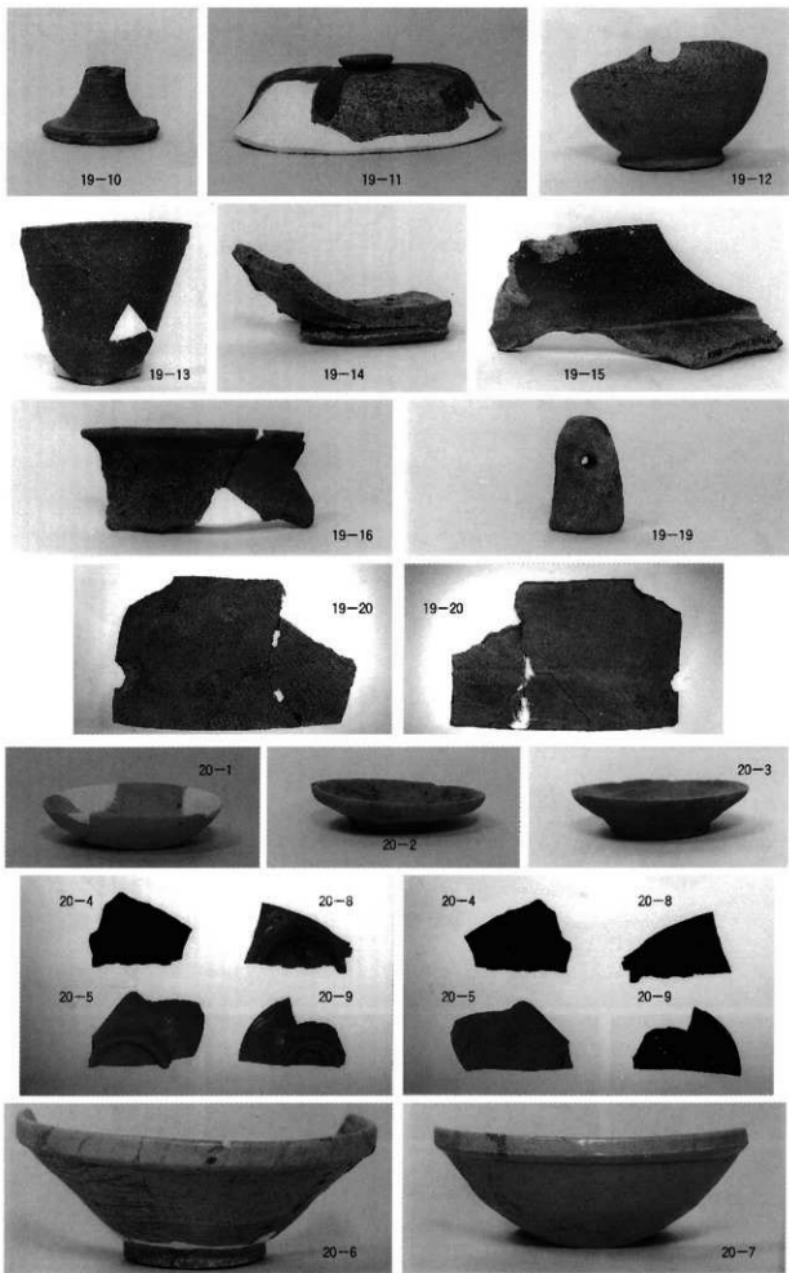
図版32 出土遺物(1)



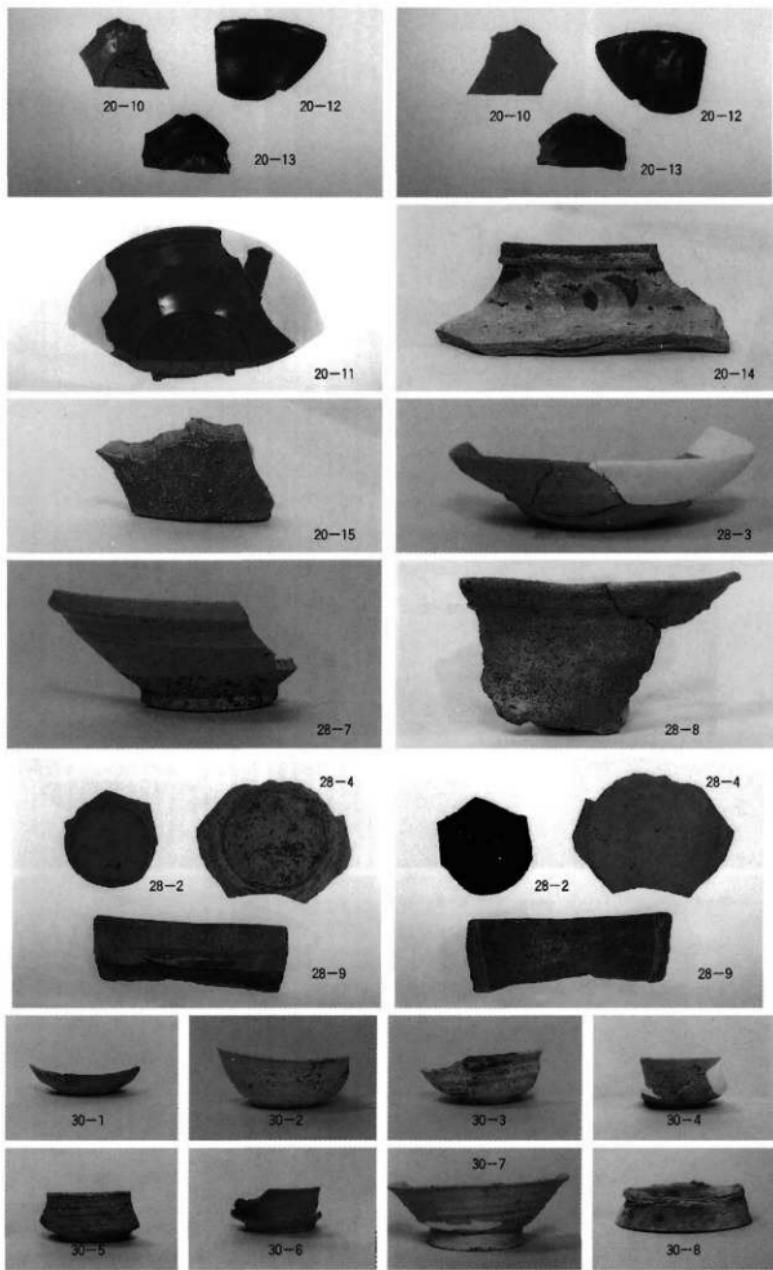
図版33 出土遺物(2)



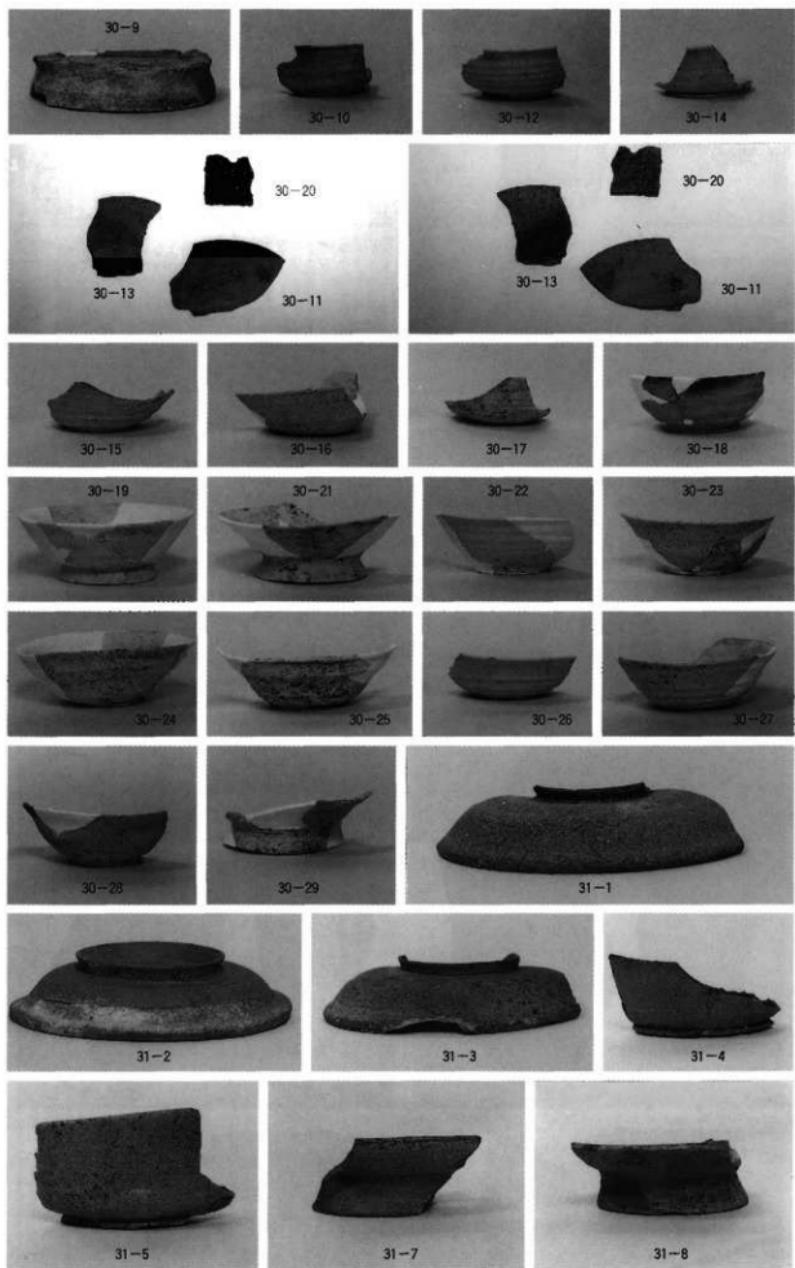
図版34 出土遺物(3)



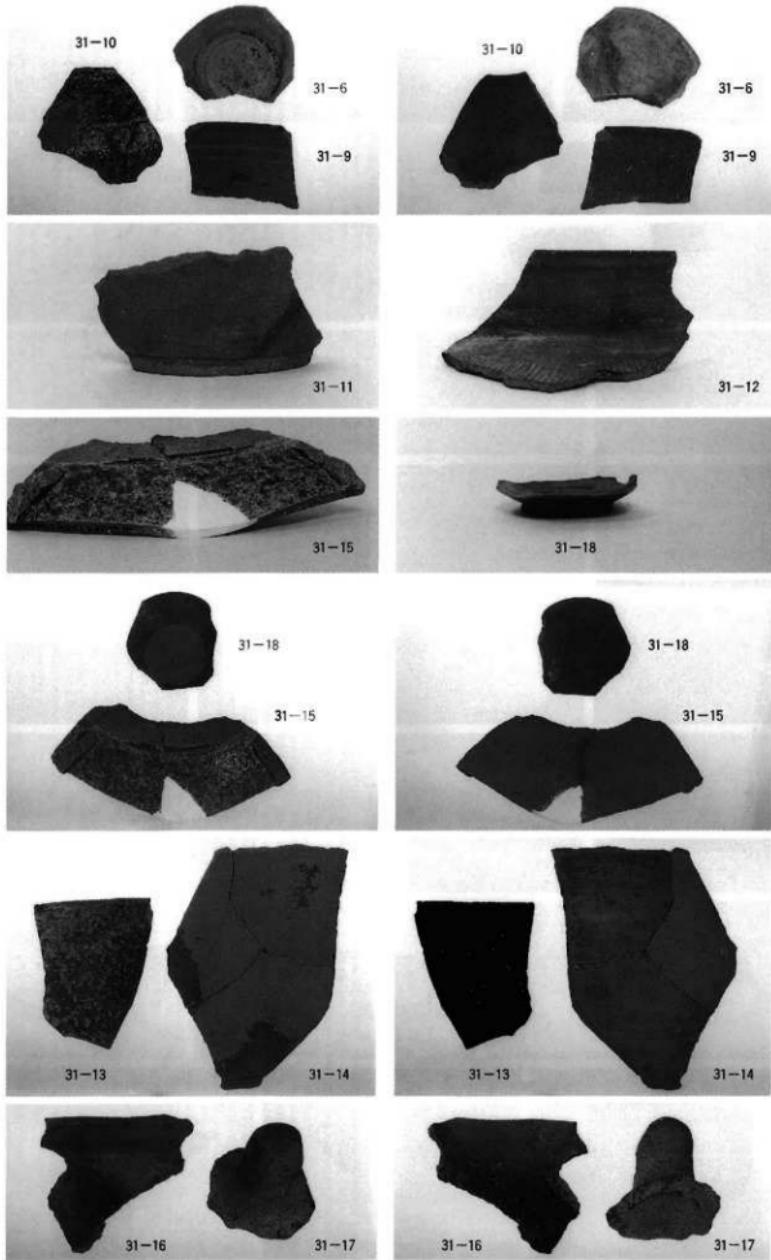
図版35 出土遺物(4)



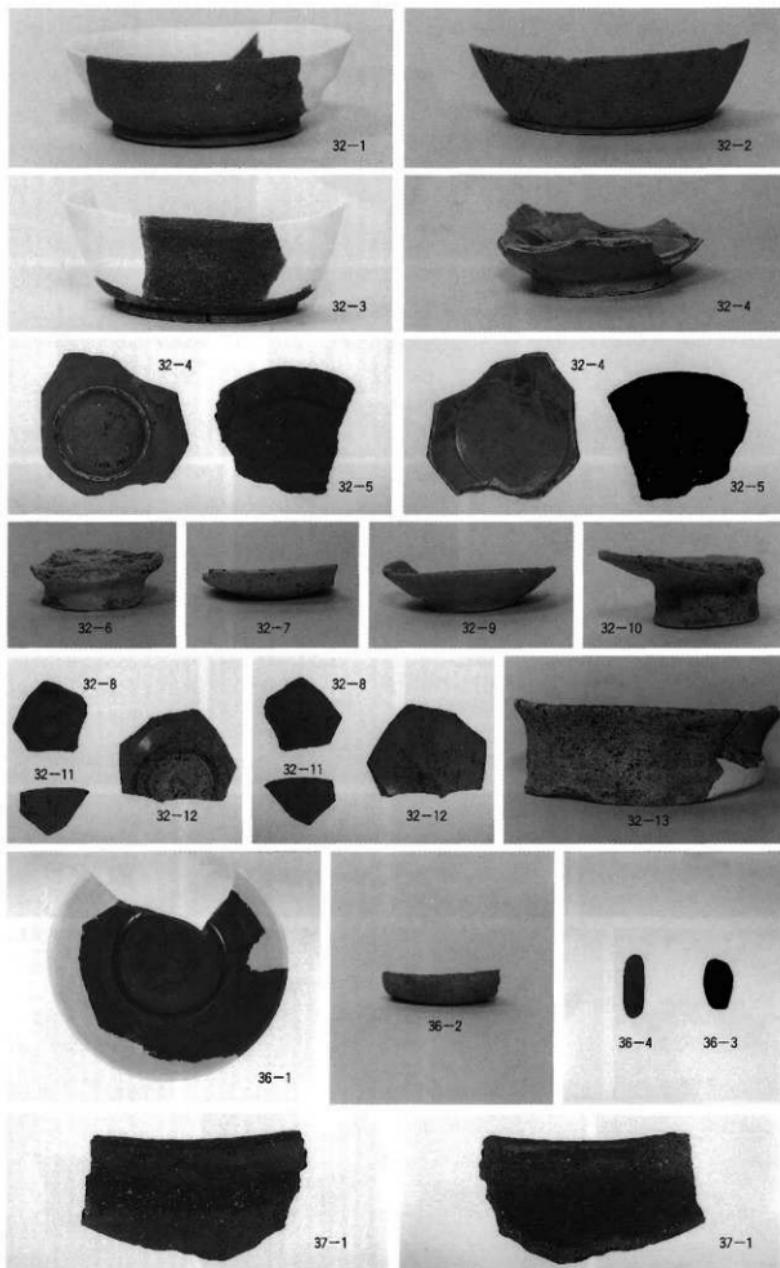
図版36 出土遺物(5)



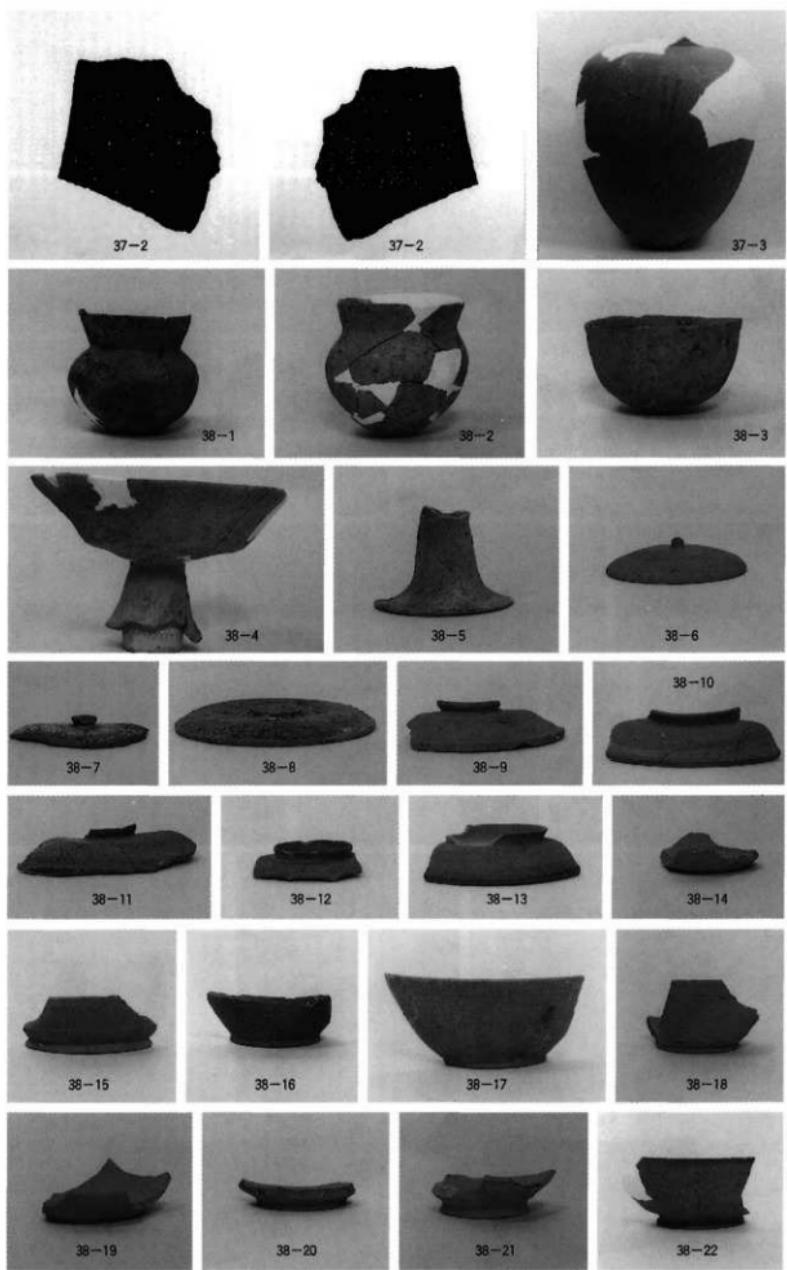
図版37 出土遺物6)



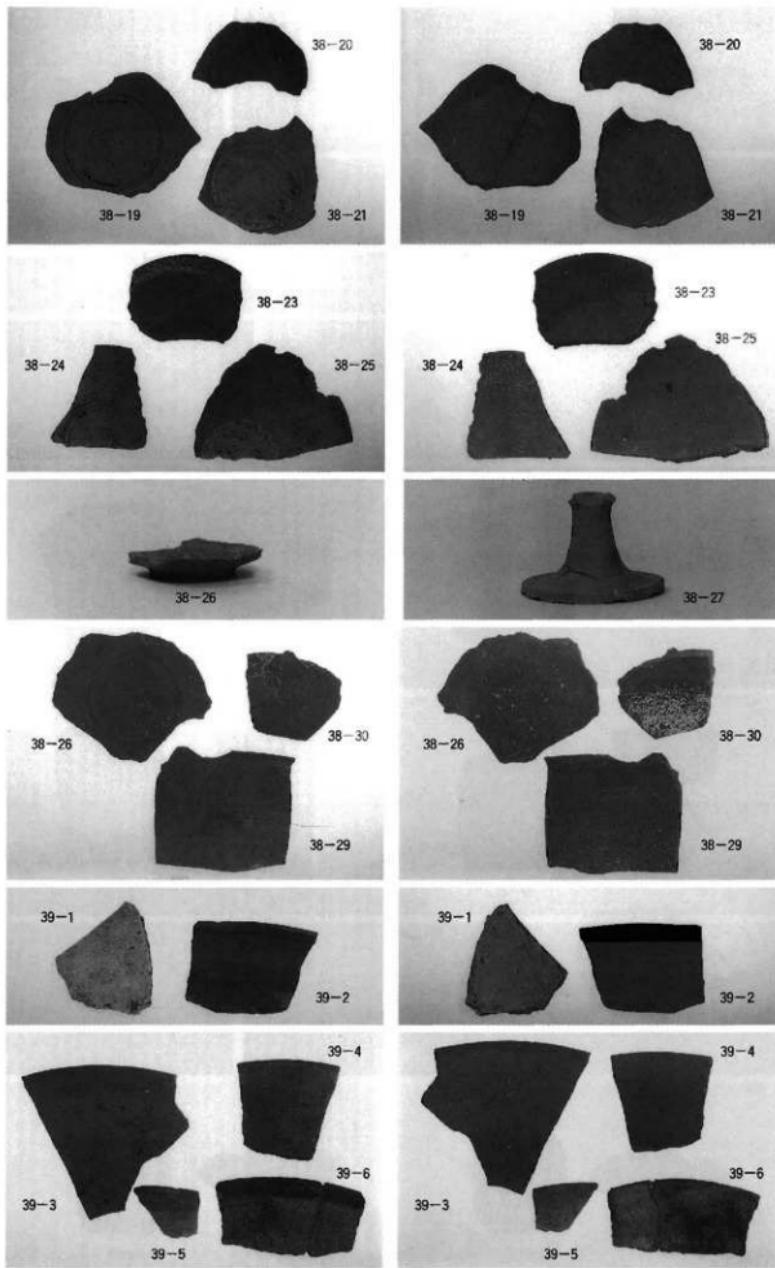
図版38 出土遺物<sup>(7)</sup>



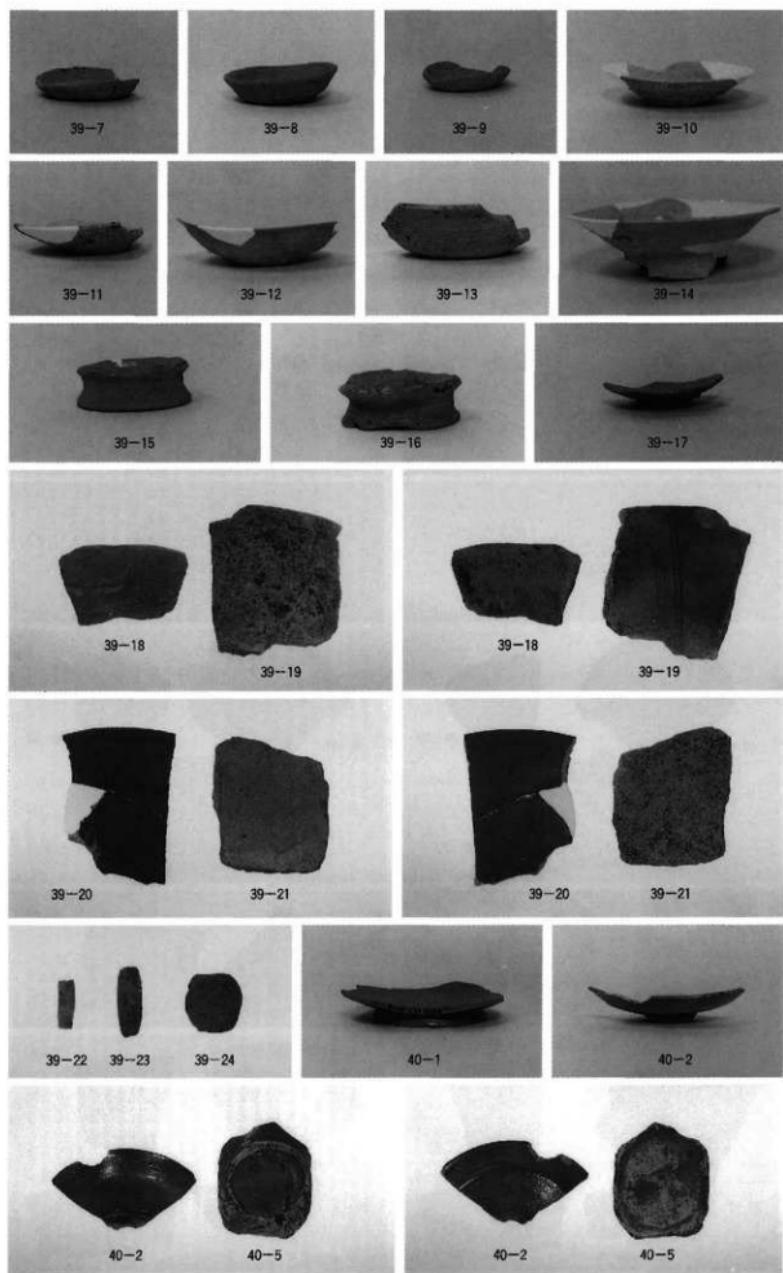
図版39 出土遺物(8)



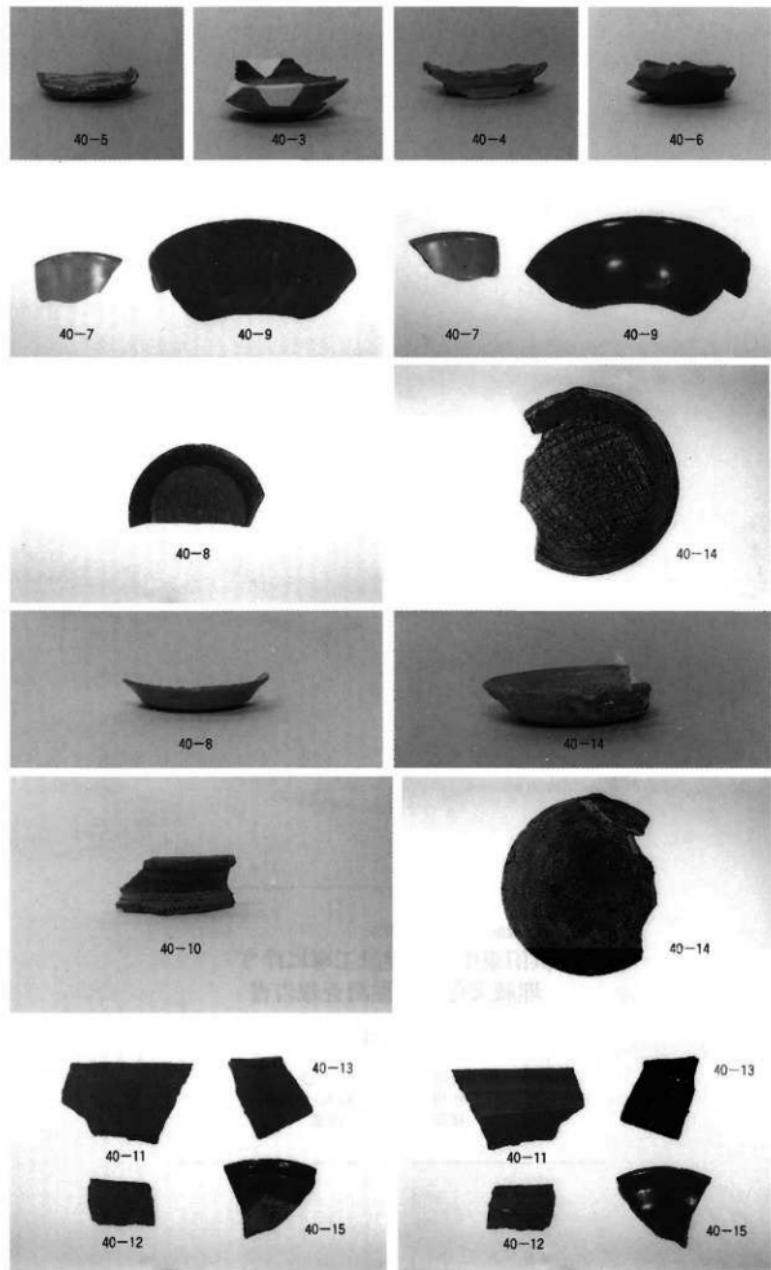
図版40 出土遺物<sup>(9)</sup>



図版41 出土遺物(1)



図版42 出土遺物<sup>(1)</sup>



図版43 出土遺物(12)

---

横路遺跡（原井ヶ市地区）  
浜田東中学校建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月 発行

発 行 島根県浜田市教育委員会  
島根県浜田市殿町1番地  
印 刷 有限会社 原印刷

---